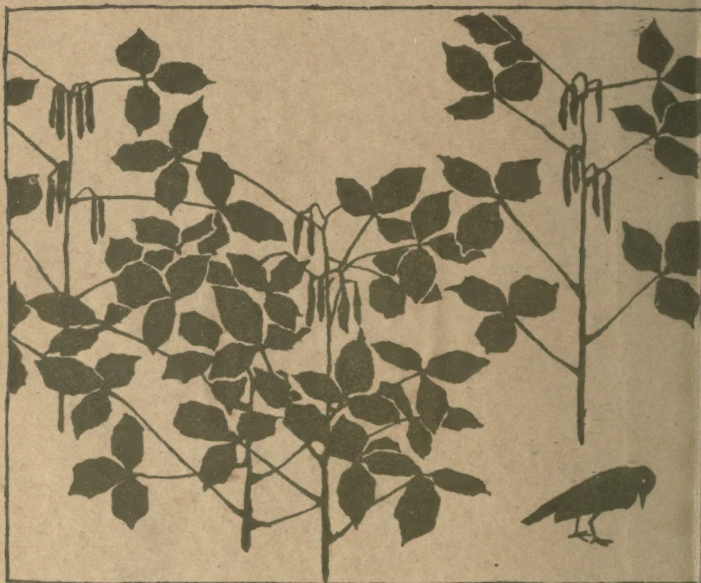
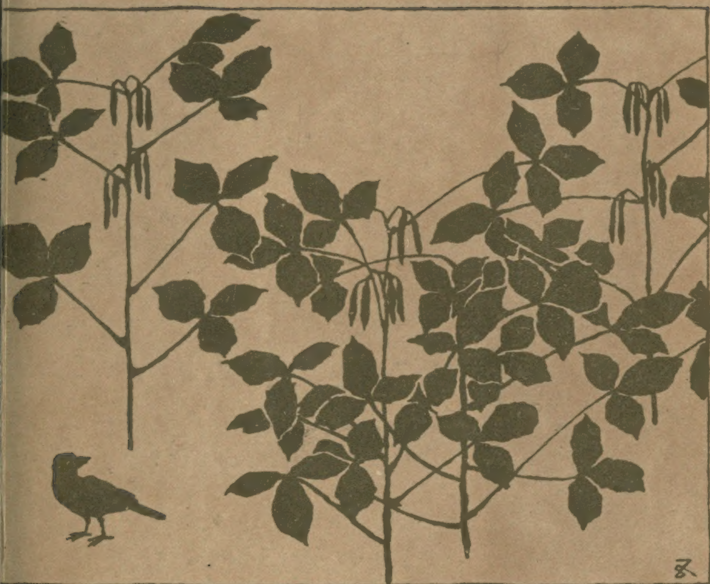

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02980 4887

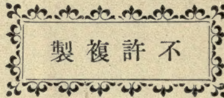






金葉、詞花、千載
定價金八拾五錢

明治四十四年九月三日印刷
明治四十四年九月六日發行



編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店
同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

ヰ

ヱ

ヲ

千載和歌集索引　終

ム

メ

モ

ヤ

へ

ホ

マ

ヒ

フ

ニ

ヌ

テ

ト

ナ

タ

ス

セ

ソ

ケ

コ

キ

ク

カ

ウ

下句七言

ア

ワ

ユ

ヨ

マ

ミ

フ

ホ

ヒ

ニ

ヌ

ネ

ノ

ハ

サ

カ

ウ

イ

千載和歌集索引

（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

詞花和歌集索引　終

サ

シ

ス

セ

ソ

タ

下句七言

ウ

オ

詞花和歌集索引

（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

イ

金葉和歌集索引終

サ

シ

ス

セ

ソ

エ

オ

カ

ウ

ワ

ヲ

下句七言

ア

ホ

ナ

ニ

ヌ

ネ

ノ

ハ

サ

キ

ク

ケ

コ

カ

ウ

オ

金葉和歌集索引

（上句の頭五言及び下句の頭七言を採り歴史的假名遣により五十音順に排列す）

上句五言

ア

或本

卷第十九

在曉を高野の山下思ひとく心上　　寂照法師

ひとすぢに心かくればむかふなる蓮(はちす)のいとよをはりみだるな

千載和歌集終

すべらぎを八百萬代の神もみなときはにまもる山の名ぞこれ

壽永元年大嘗會主基方の歌よみて奉りけるとき

神樂の歌丹波國神南備山をよめる　權中納言兼光

三島木綿かたに取り懸けかみなびの山の榊をかざしにぞする

元曆元年今上の御時大嘗會悠紀方の歌奉りける

神あそびの歌近江國諸神鄕をよめる　藤原季經朝臣

もろがみの心にいまぞかなふらし君を八千代と祈ることは

おなじ大嘗會の主基方の歌よみたてまつりける

神樂の歌丹後國千年山をよめる　藤原光範朝臣

ちとせやま神の代させる榊葉のさかえまさるは君がためとか

＊　＊　＊　＊　＊

ときはなる神なび山の榊葉をさしてぞいのるよろづよのため

治暦四年後三條院の御時大嘗會主基方神樂の歌　藤原經衡

いはや山をよめる

うごきなく千代をぞ祈るいはや山とる榊葉のいろかへずして

寛治元年堀河院の御時の大嘗會悠紀方神あそびの歌諸神鄕をよめる　前中納言匡房

いにしへの神の御代よりもろ神の祈るいはひは君が世のため

久壽二年院の御時大嘗會悠紀方の神樂の歌近江國木綿園をよめる　宮内卿永範

神うくる豐のあかりにゆふ園の日影かつらぞはえまさりける

嘉應元年高倉院の御時大嘗會悠紀方の神あそびの歌近江國守山をよめる

山寺に侍りけるに太神宮の御山をば神路山と申す大日如來の御垂跡を思ひてよみ侍りける
圓位法師
深くいりて神路の奥をたづぬればまたうへもなき峯のまつ風
治承四年遷都の時伊勢太神宮にかへりまゐりて君の御祈念し申し侍りてよみ侍りける
大中臣爲定朝臣
月讀の神してらさばあま雲のかかるうき世も晴れざらめやは
そののちの世の中なほり侍りけるとなむ
石清水社に歌合とて人々よみ侍りける時社頭月といへる心をよめる
能蓮法師
石清水きよきながれの絶えせねば宿る月さへくまなかりけり
長元九年後朱雀院の御時大嘗會主基方の神あそびの歌丹波國神なび山をよめる
藤原義忠朝臣

述懐の歌によめる　賀茂重保

君をいのる願を空にみてたまへわけいかづちの神ならばかみ

おなじき社の後番の歌合の時月の歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

きぶねがはたまちる瀬々のいはなみに氷をくだく秋の夜の月

述懐の歌の中によみ侍りける　法印慈圓

わがたのむ日よしの影は奥山の柴の戸までもささざらめやは

日吉の大宮の本地を思ひてよみ侍りける　法橋性憲

いつとなくわしのたかねに澄む月の光をやどすしがのから崎（うら波イ）

日吉の社に御幸侍りける時あめのふり侍りける

その時になりて霽れにければよみ侍りける　中原師尚

御幸する高根のかたに雲はれてそらに日吉のしるしをぞ見る

高野の山を住みうかれて後伊勢の國二見の浦の

侍りけるを二千三百度にもあまりける時貴布禰の社にまうでて柱にかきつけける

平　實　重

今までになどしづむらむきぶね川かばかり早き神をたのむに

かくて後なむ程なく藏人になり侍りける近衞院の御時なり

片岡のはふりにて侍りけるをおなじ社の禰宜にわたらむと申しける頃よみて物に書き付け侍りける

賀　茂　政　平

さりともとたのみぞかくる木綿襷わがかたをかの神と思へば

その後なむ禰宜にまかりなりにける

百首歌の中に神祇の歌よませ給ひける

武　子　内　親　王

さりともとたのむ心は神さびてひさしくなりぬ賀茂のみづ垣

賀茂社の歌合とて人々すすめてよみ侍りける時

といへる心をよみ侍りける　　權大納言實國

おしなべてゆきのしらゆふかけてけりいづれ榊の梢なるらむ

有馬のゆに忍びて御幸ありける御供に侍りける

に湯の明神をば三輪の明神となむ申し侍ると聞

きてものにかきつけて侍りける　　按察使資賢

珍らしき御幸をみ輪の神ならばしるしあり馬の出湯なるべし

熊野にまうでて侍りけるとき發心門の王子にて

よみ侍りける　　權中納言經房

うれしくもかみに誓をしるべにて心をおこすかどに入りぬる

三輪の社にて霞をよめる　　僧都範玄

杉がえを霞こむれど三輪の山かみのしるしはかくれざりけり

藏人にならぬ事をなげきて年來賀茂社にまうで

社の歌合とて人々よみけるに述懐の歌とてよみ
侍りける　右大臣

數ふれば八年經にけりあはれわが沈みしことは昨日と思ふに

そののち神感あるやうに夢想ありて大納言にも還任して侍りけるとなむ

おなじ歌合に　皇太后宮大夫俊成

いたづらにふりぬる身をも住吉のまつはさりとも哀しるらむ（と思はむイ）

おなじ歌合に社頭月といへる心をよみ侍りける　右大臣

ふりにける松ものいはばとひてまし昔もかくやすみのえの月

俊惠法師

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さえぬれば霜はおきけり

廣田社の歌合とて人々歌よみ侍りける時社頭雪

白河法皇熊野へまゐらせ給うける御供にてしほやの王子の御前にて人々歌よみ侍りけるによみはべりける

後三條内大臣

思ふことくみてかなふる神なれば鹽やに跡をたるるなりけり

百首の歌めしける時神祇歌とてよませ給うける

崇德院御製

道のべのちりにひかりをやはらげて神の佛となのるなりけり

藤原清輔朝臣

あめのしたのどけかれとや榊葉を三笠の山にさしはじめけむ

中納言家成住吉にまうでて歌よみ侍りける時よめる

大納言隆季

神代よりつもりの浦に宮居して經ぬらむ年のかぎり知らずも

大納言辭し申して出で仕へず侍りける時住吉の

千載和歌集 卷第二十

神祇歌

後一條院の御時はじめて春日社に行幸(みゆき)ありけるに一條院の御時の例をおぼしめしいださせ給うてよませ給うける

上東門院

三笠山さして來にけりいそのかみ古きみゆきの跡をたづねて

長元八年關白左大臣歌合し侍りけるのち左方の人よろこびに住吉に詣でて歌よみ侍りけるに左の頭にてよみ侍りける

大納言經輔

住吉のなみも心をよせければうべぞみぎはに立ちまさりける

鳥のねも波の音にぞかよふなるおなじ御法を聞けばなりけり

天王寺の御幸の時古寺忍昔といへる心をよめる　藤原定長朝臣

世をすくふ跡は昔にかはらねどはじめたてけむ時をしぞ思ふ

天王寺にまゐりて遺身舍利を禮してよめる　天台座主明雲

常ならぬためしは夜半の煙にて消えぬ名殘を見るぞうれしき

往生講式かき侍りける時敎化の歌よみ侍りける　律師永觀

みな人をわたさむとおもふ心こそ極樂にゆくしるべなりけれ

滿三七日已乘六牙白象の心をよめる　中原有安
待ちいでていかに嬉しく思ふらむはつかあまりの山の端の月

雪朝聞法といふ心を　中原清重
朝まだき御のりの庭にふる雪はそらより花のちるかとぞ見る

山階寺の涅槃會の暮れ方に遮羅入滅の昔を思ひてよみ侍りける　惠章法師
望月の雲がくれけむいにしへのあはれを今日の空に知るかな

涅槃經の如於鏡中見諸色像の心をよめる　俊秀法師
清くすむ心のそこをかがみにてやがてぞうつる色もすがたも

火盛久不燃といへる心をよめる　寂然法師
烟だにしばしたなびけ鳥邊山たちわかれにしかたみとも見む

阿彌陀經の心をよめる　平康頼

る　　　　　　　　　　　　　　　　　皇太后宮大夫俊

武藏野のほりかねの井もある物を嬉しくも水の近づきにけり

提婆品をよめる　　　　　　　　　　顯昭法師

谷水をむすべばうつる影のみやちとせをおくる友となりけむ

勸持品をよめる　　　　　　　　　　法橋泰覺

朽ちはてゝあやふく見えしをばたゞの板田の橋も今渡すなり（るイ）

　　　　　　　　　　　　　　　　　藤原敦仲

うらみける（つイ）けしきや空に見えつらむ姨捨山をてらすつきかげ

神力品如日月光明能除諸幽冥の心をよめる　　蓮上法師

日のひかり月の影とぞてらしけるくらき心のやみ晴れよとて

勸發（普賢イ）品の心をよめる　　　　皇太后宮大夫俊成

さらにまた花ぞちりしく鷲の山のりのむしろのくれがたの空

驚かぬわが心こそ憂かりけれはかなき世をばゆめと見ながら

高野にまゐりてよみ侍りける　寂蓮法師

あかつきを高野の山にまつほどや苔のしたにもありあけの月

煩惱卽菩提の心をよめる　式子内親王家中將

思ひとく心ひとつになりぬればこほりも水もへだてざりけり

觀音のちかひを思ひてよみ侍りける　前大納言時忠

たのもしき誓は春にあらねども枯れにしえだも花ぞ咲きける

法華經序品の心をよめる　藤原伊綱

春ごとになげきしものを法の庭ちるがうれじき花もありけり

受記品の心をよめる　右京大夫季能

水草のみ茂き濁と見しかどもさても月すむ江にこそありけれ

法師品漸見濕土泥決定知近水の心をよみ侍りけ

法華經我等長夜修習空法の心をよめる　前中納言師仲

長き夜もむなしき物としりぬれば早く明けぬる心地こそすれ

壽量品の心をよめる　圓位法師

鷲の山月を入りぬと見る人はくらきにまよふこころなりけり

瞻西上人雲居寺の極樂堂に堀河右大臣まゐりて歌よみ侍りけるによめる　神祇伯顯仲

いさぎよき池に影こそうかびぬれ沈みやせむと思ふ我が身を

大品經の常啼菩薩の心をよめる　寂超法師

朽ちはつる袖には如何(いかが)つつましし空しと說ける御法ならずば

維摩經十喩此身は(はイ)夢の如しといへる心をよめる　藤原資隆朝臣

見るほどは夢もゆめとも知られねば現(うつつ)も今はうつつと思はじ　登蓮法師

にとどまりて侍りけるほどに冬にも成りにけれ
ば雪ふりたる(たりける イ)朝に尋圓法師のもとに遣しける　法印慈圓

いとどしく昔の跡やたえなむとおもふもかなし今朝のしら雪

かへし　尋圓法師

君が名ぞなほあらはれむ降る雪に昔のあとはうづもれぬとも

法華經弟子品内祕菩薩行の心をよみ侍りける　左近中將良經

獨のみくるしき海をわたるとやそこをさとらぬ人は見るらむ

攝政前右大臣家に百首の歌よませ侍りけるとき

法文の歌の中に般若經の心をよめる　藤原隆信朝臣

吳竹のむなしと說けることの葉は三世の佛のははとこそ聞け

おなじ百首の時色卽是空空卽是色の心をよめる　攝政家丹後

むなしきも色なるものと悟ればや春のみ空のみどりなるらむ

照らすなる三世(みよ)の朝日(光イ)にはふる雪よりもつみや消ゆらむ

百首の歌の中に法文の歌の中に普賢願の唯此願
王不相捨離といへる心を　式子内親王

ふるさとをひとりわかるる夕にもおくるは月の影とこそ聞け(光とぞ聞くイ)

百首の歌よませ侍りける時法文の歌に五智如來
をよみ侍りけるに平等性智の心をよみ侍りける　攝政前右大臣

人ごとにかはるは夢のまどひにて覺むればおなじ心なりけり

維摩經十喩此身如水中月といへる心をよめる　宮内卿永範

すめば見ゆにごればかくる定なきこの身や水にやどる月かげ

比叡の山に堂衆學徒不和の事出で來りて學徒皆
ちりける時千日の山ごもりみちなむ事もちかく
ひじりの跡をたえむことを歎きてかすかに山洞

ませ給うける　崇德院御製

誓をばちひろの海にたとふなり露もたのまばかずに入りなむ

おなじ百首のとき華嚴經の心をよめる　前參議教長

果(はか)なくぞみよの佛と思ひけるわが身ひとつに有りと知らずて

卽身成佛の心を

照る月の心の水にすみぬればやがてこの身にひかりをぞます(さイ)

法華經信解品の心をよみ侍りける　前大僧正覺忠

歸りても入りぞわづらふ槇の戶をまどひ出でにし心ならひに

冬のころ後入道法親王高野にこもりて侍りける時(イ)におくり給うける　崇德院御製

降る雪は谷の戶ほそをうづむとも三世(みよ)の佛の日やてらすらむ

御返事　仁和寺後入道法親王覺性

あなほの觀音を見たてまつりて

みるままに淚ぞおつるかぎりなき命にかはるすがたと思へば

提婆品の心をよめる　　僧都覺雅

千年までむすびし水も露ばかり我が身のためと思ひやはせし

陀羅尼品の受持法華名者福不可量何況擁護具足受持といふわたりを誦して持經者の結緣たのもしくや侍りけむよみ侍りける　　前大僧正快修

嬉しくぞ名をたもつだにあだならぬ御法の花にみを結びける

阿彌陀の十二光佛の御名よみ侍りける中に智惠光佛の心をよめる　　源俊頼朝臣

わびびとの心のうちをよそながら知るやさとりの光なるらむ

百首の歌めしける時普門品弘誓深如海の心をよ

薪つき煙もすみて逝にけむこれやなごりと見るぞかなしき

御嶽にまうではべりける精進のほど金泥の法華經書き奉りてかの御山にをさめたてまつらむとてまゐり侍りける時思ふ心や侍りけむ物に書きつけおきて侍りける　藤原敦家朝臣

夢さめむその曉をまつほどのやみをも照らせのりのともし火

かくてまうで侍りて後御山にてなむ身まかりにけるその後故鄕にてこの歌は見いでて侍りけるとなむ

三十三所の觀音をがみ奉らむとて所々まゐり侍りける時美濃の谷汲にて油の出づるを見てよみ侍りける　前大僧正覺忠

世をてらす佛のしるしありければまだ燈火も消えぬなりけり

大空の雨はわきてもそそがねどうるふ草木はおのがさまざま

菩提といふ寺に結縁の講しける時聽聞にまうでたりけるに人のもとよりとく歸りねといひたりければ遣しける　清少納言

求めてもかかる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかは

後冷泉院の御時皇后宮に一品經供養せられける時壽量品のこころをよめる　藤原國房

月影（の影イ）のつねにすむなる山の端をへだつる雲のなからましかば

寄月念極樂といへる心をよみ侍りける　堀河入道右大臣

入る月を見るとや人はおもふらむ心をかけてにしにむかへば

天王寺にまゐりて舍利ををがみ侍りてよみ侍りける　瞻西上人

千載和歌集　卷第十九

釋教歌

維摩經十喩の中に〈にイ〉この身は水の泡のごとしといへる心をよみ侍りける　前大納言公

ここに消え彼處〈かしこ〉に結ぶ水の泡の憂世に廻る身にこそありけれ

うかべる雲のごとしといへる心を

定なき身は浮雲によそへつつはてはそれに〈らイ〉ぞなり果てぬべき

三身如來を觀ずる心をよませ給うける　花山院御製

世の中はみな佛なりおしなべていづれの物とわくぞはかなき

法華經藥草喩品の心をよみ侍りける　僧都源信

あづまの方にまかりけるに八橋にてよめる　道因法師

八橋のわたりに今日も止る哉ここに住むべきみかはと思へど

女をかたらひ侍りけるをいかにも有るまじき事なり思ひ絶えねといひ侍りければよめる　安性法師

つらしとてさてはよもわれやま烏頭はしろくなる世なりとも

あみだの小呪の文字を歌のかみにおきて十首よみ侍りけるにおくにかき侍りける　源俊頼朝臣

上における文字は誠のもじなれば歌もよみ路を助けざらめや

山寺に詣でたりける時貝吹けるを聞きてよめる　赤染衛門

今日もまた午の貝こそふきつなれ未のあゆみちかづきぬらむ

題しらず　空也上人

極樂ははるけきほどと聞きしかどつとめていたる所なりけり

六波羅密寺の講の導師にて高座にのほる程に聽
聞の女房あしをつみ侍りければよめる　　良喜法師

人の足をつむにて知りぬ我が方へふみ遣せよと思ふなるべし

山寺にこもりて侍りける時心ある文を女のしば
しば遣し侍りければよみ遣しける　　空人（仁イ）法師

おそろしや木曾のかけぢの丸木橋ふみ見る度に落ちぬべき哉

賀茂社にこもりて侍りけるに政平つねにまうで
きて歌よみ笛吹きなどしてあそびける傍なるつ
ほねにこもりたる人をも知りてそなたへも罷り
などしけるがその人出でて後久しくまうで來ざ
りければ遣しける　　心覺法師

笛竹のこちくとなにに思ひけむ隣におとはせしにぞありける

野花をみて道にとどまるといへる心をよめる　　僧都範玄

落ちにきとかたらばかたれ女郞花こよひは花のかげに宿らむ

九月十三夜によめる　　賀茂まさひら

暮の秋ことにさやけき月影は十夜(とよ)にあまりてみよとなりけり

隔我聞他戀といへる心をよめる　　顯昭法師

板びさしさすやかや屋の時雨こそ音し音せぬかたはわく(あるイ)なれ

堀河院の御時百首のうち戀歌とてよめる　　藤原基俊

笛竹のあな淺ましのよの中やありしやふしのかぎりなるらむ

旅戀　　源俊賴朝臣

したひくる戀の奴のたびにても身のくせなれや夕とどろきは

百首歌奉りけるに(時イ)戀の歌とてよめる　　待賢門院堀河

逢ふ事のなげきの積る苦しさをおへかし人のこりはつるまで

ともしをよめる　橘俊綱朝臣

照射（さもし）して箱根の山に明けにけりふたよりみより逢ふとせしまに

みな月のつごもりがたはたおりの鳴くをききて　よめる　江侍従

夏の中ははた隱れてもあらずしておりたちにける蟲の聲かな

題しらず　輔仁親王

秋來れば秋のけしきも見えけるを時ならぬ身と何にいふらむ

萩の露の玉と見ゆとて折りけれども露もなかりければよめる　藤原爲頼朝臣

朝露を日たけて見ればあともなし萩の上葉（うらイ）にものやとはまし

崇德院に百首歌奉りける時（の御時イ）秋の歌とてよめる　花園左大臣家小大進

つばな生ひし小野の芝生の朝露をぬき散しける玉かとぞみる

稲荷山しるしの杉のとしふりてみつのみやしろ神さびにけり

かさぎのいはや　登蓮法師

名にし負はば常に萬木の森にしもいかでかさきのいはやすく寐る

誹諧歌

花のもとにより臥してよみ侍りける　道命法師

あやしくも花のあたりにふせる哉をらば咎むる人やあるとて

卯花をよめる　源俊頼朝臣

うの花よいでことごとしかけ島の波もさこそは岩をこえしか

五月五日菖蒲をよめる　道因法師

けふかくる袂に根ざせ菖蒲草うきは我が身にありと知らずや

かるかや　源俊頼朝臣

我が駒をしばしとかるかやま城のこはたの里にありと答へよ

まま木のやたて

御倉やままきのやたてて住む民は年を（のイ）つむ共くちじとぞ思ふ

からかみのかたき

よと共に心をかけて頼めどもわれからかみのかたきしるしか

とりははき　刑部卿頼輔母

秋の野に誰を誘はむ行き返りひとりははぎを見るかひもなし

百首うたたてまつりけるときのかくし題のうた

きりぎりす　待賢門院堀河

秋はきりきりすぎぬれば雪降りてはるる間もなき深山邊の里

みづのみ　僧都有慶

なにとなくものぞ悲しきあき風の身にしむ夜半の旅の寐覺は

物名

さみだれをよめる　　和泉式部

夜の程にかりそめ人やきたりけむ淀の水薦(みこも)のけさみだれたる

すたれかは　　中納言定頼

跡たえてとふべき人も思ほえずたれかは今朝の雪をわくらむ

かきのから　　大貳三位

さかき葉はもみぢもせじを神がきのから紅に見えわたるかな

ふりつゞみ　　一條太皇太后宮肥後

池もふりつゝみ崩れて水もなしうべ勝間田にとりも(のイ)居ざらむ

へだてたる　かすみもはれて　むかへるがごと

百首歌たてまつりける時旅の心をよめる　左京大夫顯輔

あづまぢの　野嶋が崎の　はまかぜに
わがひも結ひし　いもがかほのみ　おもかげに見ゆ

折句歌

二條院の御時こいたじきといふ五字を句の上に
おきて旅の心を　源雅重朝臣

駒なべて　いざ見にゆかむ　龍田川　しら波よする　きしのあたりを

なもあみだの五字を句のかみにおきて旅の心を
よめる　仁上法師

かくれなく　ながれての名を　をしどりの　憂きためしにや
ならむとすらむ

旋頭歌

しもつふさのかみにまかれりけるを任はてて上りたりける頃みなもとのとしよりの朝臣につかはしける　源　仲　正

あづまぢの　やへの霞を　わけきても
君にあはねば　なほへだてたる　ここちこそすれ

かへし　源俊頼朝臣

かきたえし　ままの繼橋　ふみ見れば

とき知らぬ　たにのうもれ木　朽ちはてて　むかしのはるの
こひしさに　なにのあやめも　わかずのみ　かはらぬつきの
かげ見ても　しぐれに濡るる　袖のうらに　しほたれまさる
あまごろも　あはれをかけて　訪ふひとも　なみにただよふ
つりぶねの　漕ぎはなれにし　世なれども　きみにこころを
かけしより　しげきうれへも　わすれぐさ　わすれがほにて
すみの江の　まつのちとせの　はるばると　こずゑはるかに
さかゆべき　ときはのかげを　たのむにも　なぐさのはまの
なぐさみて　ふるのやしろの　そのかみに　いろふかからで
わすれにし(ばイ)　もみぢのした葉　のこるやと　おいそのもりに
たづぬれど　いまはあらしに　たぐひつつ　しもかれがれに
おとろへて　かきあつめたる　みづぐきに　あさきこころの

しきしまや　やまとのうたの　つたはりを　聞けばはるかに
ひさかたの　あまつかみ代に　はじまりて　三十文字あまり
ひと文字は　いづものみやの　やくもより　おこりけりとぞ
しるすなる　それよりのちは　ももくさの　ことの葉しげく
ちりぢりに　かぜにつけつつ　きこゆれど　ちかきためしに
ほりかはの　ながれを汲みて　ささなみの　より來るひとに
あつらへて　つたなきことは　はま千どり　あとをすゑまで
とどめじと　おもひながらも　津のくにの　なにはのうらの
なにとなく　ふねのさすがに　このことを　しのびならひし
なごりにて　世のひとぎきは　はづかしの　もりもやせむと
おもへども　こころにもあらず　かきつらねつる

おなじ百首奉りける時のなが歌　待賢門院堀河

うせはてて　あるにもあらぬ　世のなかに　またなにごとを
みくま野の　うらのはま木綿　かさねつつ　うきに堪へたる
ためしには　なる尾のまつの　つれづれと　いたづらごとを
かきつめて　あはれ知られむ　行くすゑの　ひとのためには
おのづから　しのばれぬべき　身なれども　はかなきことも
くもとりの　あやにかなはぬ　くせなれば　これもさこそは
實なしぐり　くち葉がしたに　うづもれめ　それにつけても
津のくにの　いく田のもりの　いくたびか　海士のたくなは
くりかへし　こころに添はぬ　身をうらむらむ

反歌

世の中は憂き身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり

百首歌めしける時よませ給うける　崇徳院御製

立ちまじり　うつふしぞめの　あさごろも　はなのたもとに
ぬぎかへて　のちの世をだに　と思へども　おもふ（たのむイ）ひとびと
ほだしにて（なくもイ）　行くべきかたも　まどはれぬ　かかるうき身の
つれもなく　經にけるとしを　かぞふれば　いつつのとをに
なりにけり　いま行くすゑは　いなづまの　ひかりの間にも
さだめなし　たとへばひとり　ながらへて　過ぎにしばかり
すぐすとも　ゆめにゆめ見る　ここちして　ひまゆくこまに
ことならじ　さらにもいはじ　ふゆがれの　尾ばながすゑの
つゆなれば　あらしをだにも　待たずして　もとのしづくと
なりはてむ　ほどをばいつと　知りてかは　くれにとだにも
しづ（たのイ）むべき　かくのみつねに　あらそひて　なほふるさとに
すみの江の　しほにただよふ　うつせがひ　うつしごころも

あふげども　むなしきそらは　みどりにて　言ふこともなき
かなしさに　音をのみなけば　からころも　おさふるそでも
朽ちはてぬ　なにごとにかは　あはれとも　おもはむひとに
あふみなる　うち出のはまの　うちいでて　言ふともたれか
ささがにの　いかさまにても　かきつがむ　ことをのきばに
吹くかぜの　はげしきころと　知りながら　うはのそらにも
をしふべき　あづさのそまに　みや木ひき　みかきがはらに
せりつみし　むかしをよそに　聞きしかど　我が身のうへに
なりはてぬ　さすがに御代の　はじめより　くものうへには（のイ）
かよへども　なにはのことも　ひさかたの　つきのかつらし
折られねば　うけらがはなの　咲きながら　ひらけぬことの
いぶせさに　よものやま邊に　あくがれて　このもかのもに

千載和歌集 巻第十八

雑歌下

短歌

堀河院の御時百首歌奉りける時述懐の歌によみて奉りける

源俊頼朝臣

もがみがは 瀬々のいはかど わきかへり おもふこころは
おほか（けイ）れど 行くかたもなく せかれつつ そこのもくづと
なることは 藻にすむむしの われからと おもひ知らずは
なけれども いはではえこそ なぎさなる かたわれぶねの
うづもれて 引くひともなき なげきすと なみの起ち居に

つかはせと仰せ出されければよみて遣しける　藤原定長朝臣

あしたづの霞（はイ）をわけて帰るなりまよひし雲路いま（けふイ）やはるらむ

この道の御あはれびむかしの聖代にも異ならずとなむときの人申し侍りける

嬉しさをかへすがへすもつつむべき苔の袂の狹くもあるかな

還昇して侍りける人のもとにつかはし侍りける　藤原季經朝臣

うれしさをよその袖までつつむかなたち歸りぬるあまの羽衣

今上の御時五節のほど侍從定家あやまちある樣にきこしめす事ありて殿上除かれて侍りけるその年も暮にける又の年のやよひのついたち頃に院におほんけしき給ふべきよし左少辨定長が許に申し侍りけるにそへて侍りける　入道皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲路まよひし年くれて霞をさへやへだて果つべき

このよしを奏し申し侍りければいとかしこく哀がらせおましまして今ははや還昇仰せ下すべきよし御けしきありて心はるるよしのかへし仰せ

見るゆめの過ぎにしかたをさそひきて覺むる枕も昔なりせば

太宰大貳重家入道身まかりて後山寺懷舊といへる心をよめる　藤原有家朝臣

初瀨山いりあひの鐘を聞くたびにむかしの遠くなるぞ悲しき

春の頃久我にまかれりけるついでに父のおとどの墓所のあたりの花（のイ）ちりけるを見てむかし花惜み侍りけるこころざしなど思ひ出でてよみ侍りける　權中納言通親

ちりつもる苔のしたにも櫻花をしむこころやなほのこるらむ

かしらおろし侍りて後前中納言雅賴まだ小男に侍りける時はじめて昇殿申させ侍りけるを許されて侍りければよみて奏せさせ侍りける　入道前中納言雅兼

源清雅九月ばかりにさまかへて山寺に侍りける
を人のとひて侍りける返事せよと申し侍りけれ
ばよみて遣しける　源通清

思ひやれならはぬ山にすみぞめのそでに露おく秋のけしきを

題しらず　圓位法師

あかつきの嵐にたぐふ鐘の音をこころの底にこたへてぞ聞く

いづくにか身を隱さまし厭ひ出でて憂世に深き山なかりせば

述懷百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

世の中よみちこそなけれ思ひ入る山の奥にもしかぞ鳴くなる

秋の頃山寺にてよみ侍りける　藤原良淸

思ふことありあけ方の鹿の音はなほ山ふかくいへゐせよとや

題しらず　藤原家隆

大井河となせの瀧に身をなげてはやくと人にいはせてしがな

病ありて東山なる所に侍りけるをよろしくなりて後いかがと人のとひて侍りける返事によめる　大江公景

鳥邊山君たづぬとも朽ちはてて苔のしたにはこたへざらまし

題しらず　法眼兼覺

分けわびて厭ひし庭の蓬生も枯れぬと思へばあはれなりけり

賀茂社の歌合に述懐の歌とてよめる　寂蓮法師

世の中のうきは今こそ嬉しけれ思ひしらずばいとはましやは

山寺にこもりる侍りけるに房にとどまりたる人のいつか出でむずると言ひて侍りければつかはしける　覺俊上人

世をそむき草の庵にすみ染のころものいろはかへるものかは

寂蓮法師

寂しさにうき世をかへて忍ばずばひとり聞くべき松の風かは

殷富門院大輔

つくづくとおもへばかなし曉の寐覺も夢を見るにぞありける

西住法師

まどろみてさて（までイ）も止みなば如何（いかが）せむ寐覺ぞあらぬ命なりける

六條院宣旨

先だつを見るは猶こそ悲しけれ後れはつべきこの世ならねば

さまかへむと思ひたつ人のものあはれなる夕暮に箏のことひくを聞きて

二條太皇太后宮式部

いまはとてかきなす琴のはての緒の心細くもなりまさるかな

題しらず

空人（仁イ）法師

憂世をば捨てて入りにし山なれど君がとふにや出でむとすらむ

閑居水聲といへる心をよみ侍りける　仁和寺法親王守覺

岩そそぐ水よりほかにおとせねば心ひとつにすましてぞ聞く

高野に參りて侍りけるに奥の院に靜蓮法師が庵室にまかりたりけるに哀に見えければかへりて遣しける　權大納言實國

たれもみな露の身ぞかしと思ふにも心とまりしくさの庵かな

秋の頃山に登りて横川の安樂の五僧の許にまかれりけるに正法房の障子に書き付け侍りける　藤原公衡朝臣

なほざりにかへるたもとはかはらねど心ばかりぞ墨染のそで

題しらず　法印慈圓

おほけなくうき世の民におほふかなわがたつ杣にすみ染の袖

厭ひても猶忍ばるる我が身哉ふたたび來べきこの世ならねば

上西門院兵衛

これや夢いづれか現(うつつ)はかなさを思ひわかでも過ぎぬべきかな

花園左大臣家小大進

明日しらぬみ室の峯のねなし草何あだし世に生ひはじめけむ

前大僧正覺忠御嶽より大峯にまかり入りて神仙といふ所にて金泥法華經書き奉りて埋み侍るとて五十日ばかりとどまりて侍りけるに房覺熊野のかたよりまかり入りけるにつけて言ひおくりける

前大納言成道(通イ)

をしからぬ命ぞさらにをしまるる君がみやこに歸り來るまでかへし

前大僧正覺忠

夢とのみこの世の事の見ゆる哉さむべき程はいづとなければ

わづらふ事ありて雲林院なる所にまかりけるに
人のとぶらへりければ遣しける　良暹法師

この世をばくもの林にかどでして煙とならむゆふべをぞ待つ

題しらず　讀人しらず

憂き事のまどろむほどは忘られてさむれば夢の心地こそすれ

紫式部

何處とも身をやる方のしられねばうしと見つつも永らふる哉

述懷百首の歌の中に夢の歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

うき夢はなごりまでこそ悲しけれこの世の後もなほや歎かむ

百首の歌奉りける時無常の心をよめる　藤原季通朝臣

うつつをも現といかが定むべき夢にも夢を見ずばこそあらめ

この瀨にもしづむときけば淚川ながれしよりも濡るる袖かな
世をそむかむと思ひたちける頃よめる　空人法師
斯ばかり憂身なれ共すで果てむと思ふになればかなしかりけり
心の外なることにて知らぬ國にまかりけるを事
なほりて京にのぼりて後日吉の社にまゐりてよ
み侍りける　平康賴
思ひきや志賀の浦波立ち返りまたあふみともならむものとは
述懷の歌よみ侍りける時　登蓮法師
かくばかり憂き世の中を忍びても待つべき事の末にあるかは
修行にまかりありきける時よめる　覺禪法師
思ひかねあくがれ出でてゆく道はあゆく草葉に露ぞこぼるる
世のつねなきことを思ひてよめる　權僧正永緣

攝政家丹後

うしとても厭ひもはてぬ世の中をなかなか何に思ひしりけむ

題しらず　法印倫圓

のぼるべきみちにぞまよふ位山これより奥のしるべなければ

十月に重服になりて侍りける又の年の春傍官ども加階し侍りけるを聞きてよめる　中納言長方

もろびとの花さく春をよそに見てなほしぐるるは椎しばの袖

題しらず　藤原顯方賢イ

憂世にもうれしき世にも先にたつ涙はおなじなみだなりけり

遠き國に侍りける時おなじさまなる者どもことなほりのぼると聞えけるとき其のうちに漏れにけりと聞きて都の人のもとに遣しける　前右兵衞督惟方

思ひ出のあらば心もとまりなむいとひやすきは憂世なりけり

大峯とほり侍りける時笙の岩屋といふ宿にてよみ侍りける

前大僧正覺忠

やどりする岩屋のとこの苔筵いく夜になりぬ寐こそやられね

述懐の歌とてよみ侍りける

大納言宗家

身の程をしらずと人や思ふらむかくうきながら年をへぬれば

右近中將忠良

そむかばや誠の道はしらずとも憂世をいとふしるしばかりに

二條太皇太后宮別當

杣川におろす筏のうきながら過ぎゆくものはわが身なりけり

百首歌の中に述懐歌とてよめる

藤原定家

おのづからあればある世に永らへて惜むと人に見えぬべき哉

かへし　聰子内親王

山里のさびしきやどの住家にもかけひの水のとくるをぞまつ

大納言實家のもとに三十六人集をかりて返しつかはしけるなかに故大炊御門の右大臣の書きて侍りけるさうしに書きておしつけられて侍りける　太皇太后宮

この本にかきあつめたる言の葉をわかれし秋の形見とぞ見る

かへし　權大納言實家

このもとにかく言の葉を見る度にたのみし蔭のなきぞ悲しき

高野にまうで侍りける時山路にてよみ侍りける　仁和寺法親王守覺

跡たえて世をのがるべき道なれや岩さへ苔のころもきにけり

述懷の心をよみ侍りける

かへし　　　　　　　　　　入道大納言公任

おなじとしちぎりしあれば君がきる法の衣をたちおくれめや

おなじとしの人になむ侍りける

三條院かくれさせ給うて後かの院のまへを過ぎけるに松の梢はおなじさまにてついがき所々くづれたるにむぐらの茂りたるを見て其の内に江侍從が侍りけるに遣しける　　　　　　　　辨のめのと

むかし見し松の梢はそれながらむぐらの門をさしてけるかな

一品聰子内親王仁和寺に住みはべりける冬の頃かけひのこほりを三のみこのもとにおくられて侍りければ遣しける　　　　　　　　輔仁のみこ

山里のかけひの水のこほれるは音きくよりもさびしかりけり

常よりも世の中はかなく聞えける頃さがみが許につかはしける　藤原兼房朝臣

哀とも誰かは我を思ひ出でむある世にだにも訪ふひともなし

前大納言公任ながたにに住み侍りける頃風はげしかりける夜の朝つかはしける　中納言定頼

ふるさとの板間の風にねざめして谷のあらしを思ひこそやれ　前大納言公任

かへし

谷風の身にしむごとに故鄉のこのもとをこそおもひやりつれ

前大納言公任入道しはべりてながたにに侍りけるとき僧の裝束法服などおくるとてつかはしける　法性寺入道前太政大臣

いにしへは思ひかけきや取りかはしかく著むものと法の衣を

山里の柴をりをりに立つけぶり人まれなりとそらに知るかな

九月のつごもりがたにわづらふ事ありてたのもしげなく覺えければ久しくとはぬ人につかはしける

藤原基俊

秋はつる枯野の蟲のこゑたえば有りやなしやを人のとへかし

女のもとにまかりて月のあかく侍りけるに空のけしき物心細く侍りければよみ侍りける

藤原道信朝臣

この世には住むべき程やつきぬらむ世の常ならず物の悲しき

題しらず

和泉式部

命あらばいか樣にせむ世をしらぬ蟲だに秋はなきにこそなけ

紫式部

かずならで心に身をばまかさねど身にしたがふは心なりけり

攝政右大臣の時家の歌合に述懷の歌とてよめる　源師光

今はただいけらぬ物に身をなして生れぬ後の世にもふるかな

つかさめしに伊勢になりけるを辭し申しける時

大僧正行尊がもとに遣しける　源俊重

いかにせむいせの濱荻みがくれておもはぬ磯の波にくちなば

たなかみの山里に住み侍りける頃風はげしかり

ける夜よめる　源俊頼朝臣

槇の戸をみ山おろしにたたかれて訪ふにつけてもぬるる袖哉

山田の庵にけぶりの立ちけるを見てよめる　橘盛長

小山田の庵にたく火のありなしに立つ煙もやくもとなるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき山家の心を

よめる　二條太皇太后宮肥後

右大將實房中將に侍りける時十首歌よませ侍りけるに述懐歌とてよめる
中原師尙
數ならぬ身をうき雲の晴れぬかなさすがに家の風はふけども

學文料申し侍りけるをたまはらず侍りける時人のとぶらへるかへり事によみて遣しける
大江匡範
おもひやれとよにあまれる燈火のかかげかねたる心ぼそさを

題しらず
藤原公重朝臣
世のうさを思ひ忍ぶと人も見よかくてふるやの軒のけしきを

藤原是忠
引く人もなくて捨てつる梓弓こころづよきもかひなかりけり

一條院内侍參河
いかで我がひまゆく駒をひきとめて昔にかへる道をたづねむ

春日山まつにたのみをかくるかな藤の末葉のかずならねども

歎く事侍りける頃よみ侍りける　前左衛門督公光

物思ふ心や身にもさきだちてうき世を出でむしるべなるべき（らむ イ）

述懷の歌とてよめる　俊惠法師

數ならで年へぬる身は今さらに世をうしとだに思はざりけり

道因法師

いつとても身のうき事はかはらねど昔は老をなげきやはせし

述懷の歌よみ侍りける時昔白河院につかうまつりける事を思ひ出でてよめる　藤原家基

いにしへも底にしづみし身なれどもなほこひしきは白河の水

廣田社の歌合によめる　藤原盛方朝臣

哀れてふ人もなき身をうしとても我さへいかが厭ひ果つべき

歌とてよめる　　藤原定家

いづくにて風をも世をもうらみまし吉野の奥も花は散りけり

花の歌とてよめる　　源季廣

深く思ふ事し叶はばこむ世にも花見る身とやならむとすらむ

家に櫻をうゑてよみ侍りける　　源師教朝臣

老が世に宿に櫻をうつし植ゑてなほこころみに花をまつかな

高倉院春宮の御時權亮に侍りけるを參議にてほどへ侍りける頃賀茂社の歌合とて人々よみ侍りけるに述懷の歌とてよみ侍りける　　權中納言實守

くらゐやま花をまつこそ久しけれはるの都にとしは經しかど

崇德院の御時十五首歌奉りける時述懷の心をよみ侍りける　　右兵衞督公行

題しらず

世の中を常なきものと思はずばいかでか花のちるに堪へまし

都うつりなど聞えける又の年のはる白河の花ざかりに女の手にて花の下におとしおきて侍りける

讀人しらず

かくばかり憂世のするにいかにして春は櫻のなほにほふらむ

花ざかりに法成寺にまゐりて金堂のまへのはなちるを見てよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

ふりにけりむかしを知らば櫻花ちりの末をもあはれとは見よ

むイ

依花待客といへる心をよめる

源定宗朝臣

やまざくら花をあるじと思はずば人をまつべきしばの庵かは

圓位法師がすすめ侍りける百首の歌の中に花の

除目(ぢもく)の頃つかさ給はらで歎き侍りける時範永が
もとに遣しける　大江公資
年ごとに涙の川に浮べども身はなげられぬものにぞありける
寄霞述懐の心をよめる　源仲正
思ふことなくてや春をすごさましうき世へだつる霞なりせば
世をのがれて後白河の花を見てよめる　圓位法師
散るを見て歸るこころや櫻花むかしにかはるしるしなるらむ(らまし イ)
花の歌あまたよみ侍りける時
花にそむ心のいかで殘りけむ捨て果ててき(に イ)とおもふわが身に(な イ)
ほとけには櫻の花をたてまつれわがのちの世を人とぶらはば
世をそむきて又の年の春花を見てよめる　寂然法師
この春ぞおもひはかへす櫻(山櫻 イ)花むなしきいろに染めしこころを

今はとて入りなむ後ぞおもほゆる山路をふかみ訪ふ人もなし

春の頃あはたにまかりてよめる

うき世をば峯の霞やへだつらむなほ山ざとは住みよかりけり

歎く事侍りける頃よめる　　和泉式部

花さかぬ谷のそこにも住まなくにふかくも物をおもふ春かな

前大納言公任長谷といふ所にこもりゐける時つかはしける　　法性寺入道前太政大臣

谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにおとせではるの暮れぬる

山寺にこもりて侍りけるころ雨降りて心細かりけるに人のまうできて歌などよみけるついでによめる　　道命法師

かくてだになほ哀なるおく山に君こぬよよをおもひ知らなむ

かしらおろして後東山の花見ありき侍りけるに圓城寺の花おもしろかりけるを見てよみ侍りける

前中納言基長

いにしへにかはらざりけり山櫻はなは我をばいかが見るらむ

遁世の後はなの歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

雲のうへの春こそさらに忘られね花は數にもおもひいでじを

石山にたびたび詣で給ひけるをはてのたび關の清水のもとに御車とどめてこのたびばかりやと心ぼそく御覽じてよませ給うける

東三條院

あまたたび行きあふ坂の關水に今はかぎりのかげぞかなしき

山にのぼりてしばし行ひなどし侍りける時よみ侍りける

前大納言公任

千載和歌集　卷第十七

雜歌中

五十御賀過ぎて又の年の春鳥羽殿の櫻のさかりに御前の花を御覽じてよませ給うける

鳥羽院御製

心あらばにほひを添へよ櫻花のちのはるをばたれか見るべき(知イ)

落花の心をよみ侍りける

仁和寺後入道法親王覺性

はかなさを恨みもはてじ櫻花うき世はたれもこころならねば

僧都頼實身まかりて後またの年の春禪定院の花さかりなるを見てよみ侍りける

僧正尋範

宿もやど花もむかしに匂へどもぬしなき色はさびしかりけり

ゆく年は波とともにやかへるらむ面がはりせぬわかの浦かな

廣田社の歌合とて人々よみ侍りける時海上眺望といへる心をよみ侍りける

權大納言實家

今日こそは都のかたの山の端も見えずなるをの沖に出でけれ

權中納言實宗

播磨がた須磨のはれまに見渡せば波は雲井の物にぞありける

右衛門督賴實

はるばるとおまへの沖をみわたせば雲井にまがふあまの釣舟

眺望の心をよめる

圓玄法師

なにはがた潮路はるかに見わたせば霞にうかぶ沖のつりぶね

藤原重綱

春がすみ繪島が崎をこめつれば波のかくとも見えぬ今朝かな

和歌浦をよみ侍りける

祝部宿禰成仲

むろのやしまをよめる　藤原顕方

たえずたつ室の八島の煙かな如何につきせぬおもひなるらむ

堀河院の御時百首歌奉りける時橋の歌とてよみ
侍りける　大納言師頼

かつらぎや渡しも果てぬものゆゑにくめの岩橋苔生ひにけり

おなじ御時うへのをのこども題をさぐりて歌つ
かうまつりけるに釣舟をとりてよみ侍りける　権中納言俊忠

いかり（いはイ）おろす方こそなけれ伊勢の海の汐瀬にかかる蜑（あま）の釣舟

百首の歌の中に松をよめる　修理大夫顕季

玉藻かるいらこがさきの岩根松いくよまでにか年のへぬらむ

夏草をよめる　源俊頼朝臣

汐みてば野島がさきの小百合葉（さゆりは）に波こす風の吹かぬ日ぞなき

瀧の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ

屏風に瀧落ちたる所をよめる　藤原長能

ぬけばちるぬかねばみだる足引の山よりおつる瀧のしらたま

京極前太政大臣布引の瀧見侍りける時よみ侍り

ける　六條右大臣

水のいろのただ白雲と見ゆるかな誰さらしけむぬのびきの瀧

龍門寺にまうでて仙室に書きつけ侍りける　能因法師

あしたづにのりて通へる宿なれば跡だに人は見えぬなりけり

おなじ龍門の心をよめる　藤原濤輔朝臣

やまびとの昔のあとを來て見ればむなしき床をはらふたに風

布引瀧をよめる　藤原良濤

音にのみ聞きしはことのかずならで名よりもたかき布引の瀧

何事もかはり行くめる世の中にむかしながらの橋ばしらかな

おなじ所にて　道因法師

今日見ればながらの橋は跡もなし昔ありきと聞きわたれども

津守國基身まかりてのち住吉にもすまずなりに
けるを有基に具してあからさまに下りてはべり
けるに人の心もかはりて見えはべりければ松の
もとを削りて書きつけ侍りける　津守景基

人ごころ有らずなれども住吉の松のけしきはかはらざりけり

吉野の瀧をよめる　中納言經忠

白雲にまがひやせまし吉野やま落ちくる瀧のおとなかりせば（せざりイ）

さがの大覺寺にまかりてこれかれ歌よみ侍りけ
るによみ侍りける　前大納言公任

漏れにければ遣しける

契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり　源俊頼朝臣

運を恥づる百首の歌よみ奉りける中によめる

世の中のありしにも有らずなりゆけば涙さへこそ色變りけれ　覺審法師

述懐の心をよめる

すぎ來にしよそぢの春の夢の世は憂(うき)より外のおもひ出ぞなき　經因法師

果(はか)なしや憂身ながらも過ぎぬべき此世をさへも忍びかぬらむ

天王寺にまうでて侍りけるに長柄にてここなむ

橋のあとと申すを聞きてよみ侍りける　源俊頼朝臣

ゆく末を思へばかなし津の國のながらの橋も名はのこりけり

長柄の橋のわたりにて　道命法師

この世にて六十(むそぢ)はなれぬ秋の月しでの山路もおもがはりすな(にイ)

月の歌とてよめる　圓位法師

來む世には心の中にあらはさむ飽かでやみぬる月のひかりを

二條院の御時四代まで侍臣なる事をおもひてよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

いかなれば沈みながらに年をへて代々の雲井の月をみるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時述懐の心をよめる　藤原基俊

唐國にしづみし人もわが如くみよまで遇はぬなげきをばせし

僧都光覺維摩會の講師の請を申しけるをたびたび漏れにければ法性寺入道前太政大臣に恨み申しけるをしめぢがはらと侍りけれど又その年も

もろともに秋をやしのぶ霜枯のをぎの上葉をてらすつきかげ

月照山水といへる心を　法眼長眞

ますげ生ふる山下水にやどる夜は月さへ草のいほりをぞさす

山の端の月といへる心をよめる　藤原爲忠

ふかき夜の露ふきむすぶこがらしに空さえのぼる山の端の月

荒屋月といへる心を　覺延法師

山風にまやのあしぶき荒れにけり枕にやどる夜半のつきかげ

題しらず　法印慈圓

山ふかみ誰またかかる（あとイ）すまひして槇の葉わくる月を見るらむ

月影のいりぬるのちに思ふかなまよはむやみの行くすゑの空

攝政前右大臣の家に百首の歌よませ侍りける時

月の歌の中によめる　俊惠法師

住みなれし宿をば出でて西へゆく月をしたひて山にこそいれ

故郷月をよめる　俊恵法師

ふるさとの板井のしみづ水草ゐて月さへすまずなりにける哉

水上月といへる心を　藤原家基

さもこそは影とどむべきよならねど跡なき水にやどる月かな

賀茂社後番歌合に月の歌とてよめる　藤原親盛

何となくながむる袖のかわかぬは月のかつらの露やおくらむ

山家暁霰といへる心をよめる　大江公景

ましばふくやどの霰に夢さめてありあけがたの月を見るかな

山家月をよめる　静蓮法師

あしびきの山の端ちかくすむとても待たでやは見る有明の月

月照寒草といへる心をよめる　紀康宗

題しらず　藤原家隆

山ふかき松のあらしを身にしめて誰かねざめに月をみるらむ

八條院六條

まつ程もいとどこころぞなぐさまぬ姨捨山のありあけのつき

法師實修

世をいとふ心は月をしたへばや山の端にのみおもひ入るらむ

藤原隆親

寂しさも月見るほどはなぐさみぬ入りなむ後をとふ人もがな

寒夜月といへる心をよみ侍りける　圓位法師

霜さゆる庭の木の葉をふみ分けて月は見るやととふ人もがな

世をのがれて後西山にまかりこもるとて人につかはしける　平實重

じける　　　　　　　　　　近衛院御製

うき雲のかかるほどだに有るものをかくれな果てそ有明の月

箕面の山寺に日頃こもりて出で侍りけるあかつき月のおもしろく侍りければよめる　　　　仁和寺後入道法親王覺性

木の間もる有明の月の送らずばひとりや山のみねを出でまし

月の歌とてよみ侍りける　　　　道性法親王

琴の音を雪にしらぶときこゆなり月さゆる夜の峰のまつかぜ

　　　　　　　　　　　　　　　權中納言長方

あかで入らむ名殘をいとど思へとや傾くままにすめる月かな

殷富門院にて人々百首の歌よみ侍りける時月の歌とてよめる　　　　藤原定家

いかにせむさらで憂世はなぐさまずたのみし月も涙おちけり

都をはなれて遠くまかる事侍りける時月を見て
よみ侍りける　法印靜賢
あかなくに又もこの世にめぐりこば面がはりすな山の端の月
月の歌あまたよみ侍りける時いさよひの月の心
をよめる　源仲正
果なくも我がよのふけを知らずしていさよふ月を待ち渡る哉
見月戀故人といへる心をよめる　源仲綱
さきだちし人はやみにや迷ふらむいつまで我も月をながめむ
百首の歌奉りける時月の歌とてよめる　待賢門院堀河
殘なく我がよふけぬと思ふにもかたぶく月にすむこころかな
從一位藤原宗子やまひ重くなりて久しくまるり
侍らで心細きよしなど奏せさせて侍りけるに遣

さよ千鳥ふけひの浦におとづれて繪島がいそに月かたぶきぬ

俊惠法師

いかだおろす清瀧川にすむ月は棹にさはらぬこほりなりけり

賀茂成保

あまの原すめるけしきは長閑にてはやくも月の西へゆくかな

顯昭法師

寂しさにあはれもいとどまさりけり獨ぞ月は見るべかりける

藤原清輔朝臣

今よりは更けゆくまでに月は見じそのこととなく涙落ちけり

年頃修行にまかりありきけるが歸りまうで來て

月前述懷といへる心をよめる

登蓮法師

もろともに見し人いかになりにけむ（ぬらむイ）月は昔にかはらざりけり

相模

ながめつつ昔も月は見しものをかくやは袖のひまなかるべき

和泉式部

ひとりのみ哀なるかとわれならぬ人にこよひの月を見せばや

思ふこと侍りける頃月のいみじくあかく侍りけるによみ侍りける

久我内大臣

かくばかりうき世の中の思ひ出に見よともすめる夜半の月哉

山家月といへる心をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

住みわびて身を隠すべき山里にあまりくまなき夜半の月かな

百首の歌奉りける時月の歌とてよめる

前參議親隆

播磨がた須磨の月よみそらさえて繪島がさきに雪ふりにけり

月の歌十首よみ侍りける時

藤原家基

三條の女御琮子遁世の後あふぎがみに月いだしてつかはし侍るとて添へて侍りける

權中納言實綱

秋をへてひかりを増せ（いふ事なイ）と思ひしにおもはぬ月の影にもある哉

月爲友といへる心を

仁和寺後入道法親王

とふ人に思ひよそへてみる月のくもるはかへる心地こそすれ

月の歌あまたよませ侍りける時よみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

さゝなみやくにつみ神のうらさびてふるき都に月ひとりすむ

天の原［そら］ゆく月はひとつにてやどらぬ水のいかでなからむ

題しらず

中務卿具平親王

ひとりゐて月をながむる秋の夜はなに事をかは思ひのこさむ

赤染衛門

物思はぬ人もや今宵ながむらむ寐られぬまゝに月を見るかな

狩衣をきせて侍りけるををかしく見えければ又
の日範綱がもとにさし置かせける　左京大輔顯輔
昨日見ししのぶもぢずり誰ならむ心のほどぞかぎり知られぬ
上東門院に侍りけるを里に出でたりける頃女房
のせうそこのついでに箏つたへにまうでむとい
ひて侍りければ遣しける　紫式部
露しげきよもぎがもとの蟲の音をおぼろげにてや人の尋ねむ
二條院の御時とし頃おほうちまもる事をうけた
まはりて御垣のうちに侍りながら昇殿はゆるさ
れざりければ行幸ありける夜月のあかかりける
に女房のもとに申し侍りける　從三位賴政
ひと知れぬ大内山のやまもりは木がくれてのみ月を見るかな

何事かなど侍りけるかへり事につかはされ侍りける　式子内親王

御手洗(みたらし)やかげたえはつる心地して志賀の波路に袖ぞぬれこし

右兵衛督に侍りける時中院右大臣中納言に侍りけるに弓をかりおきて侍りけるをつかさ辭し申してこもりゐ侍りける時かの弓をかへしおくるとて添へてつかはし侍りける　大宮前太政大臣

八年(やとせ)まで手ならしたりし梓弓かへるをみるに音ぞなかれける

かへし　中院右大臣

なにかそれおもひ捨つべき梓弓また引きかへす時もありなむ

右大將兼長春日の祭の上卿に立ち侍りけるともに藤原範綱が子清綱が六位に侍りけるに忍摺(しのぶずり)の

つかはしける　藤原實方朝臣

ちはやぶるいつきの宮の旅寐にはあふひぞくさの枕なりける

彈正尹爲尊のみこかくれ侍りて後太宰帥敦道のみこ花たち花をつかはしていかが見るといひて侍りければ遣しける　和泉式部

かをる香によそふるよりは郭公きかばやおなじ聲やしたると

上西門院賀茂のいつきと申しけるをかはらせ給ひて唐崎にはらへし給ひける御ともにて女房のもとにつかはしける　八條前太政大臣

昨日までみたらし川にせしみそぎ志賀の浦波たちぞかはれる

賀茂のいつきかはり給うてのち唐崎のはらへ侍りけるまたの日雙林寺のみこのもとより昨日は

いかにして過ぎにし方を過しけむ暮しわぶてふ昨日今日かな

御かへし　　清少納言

雲の上もくらしかねける春の日を所がらともながめつるかな

いぶかしく覺されける人のむすめの女房のつぼねにゆかりありて忍びて方違（かたたがへ）にまゐれりけるを曉とく出でにければ遣しける　　選子内親王

あひ見むと思ひし事をたがふればつらき方にもさだめつる哉

選子内親王に侍りける右近後の齋院にまゐりて御禊のいだし車にのると聞きて又の日つかはしける　　齋院中將

みそぎせし鴨の川波立ちかへりはやく見し世に袖はぬれきや

祭のつかひにて神だちの宿所より齋院の女房に

いもと寐ておきゆく朝の道よりもなかなか物の思はしきかな

二月ばかり月のあかき夜二條院にて人々あまたゐあかして物語などし侍りけるに內侍周防より

ふして枕をがなと忍びやかにいふを聞きて大納言忠家是を枕にとてかひなをみすの下よりさし入れて侍りければよみ侍りける

周防內侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたたむ名こそをしけれ

といひ出し侍りければ返事によめる

大納言忠家

契ありてはるの夜ふかき手枕をいかがかひなき夢になすべき

一條院御時皇后宮に淸少納言はじめて侍りける頃三月ばかりに二三日まかり出で侍りけるにかの宮よりつかはされて侍りける

皇后宮定子

せられたりけるに兵衛といふが赤紐のとけたりけるをこれ結ばばやといふをききて中將實方朝臣よりてつくろふとて足びきの山井の水はこほれるを如何なるひものとくるなるらむと言ふを聞きて返事によみ侍りける

皇后宮清少納言

うは氷あはに結べるひもなればかざす日影にゆるぶばかりぞ

十二月ばかりに門をたたきかねてなむ歸りにしと恨みたりける男としかへりて門はあきぬらむやといひて侍りければ遣しける

上東門院紫式部

たが里の春のたよりにうぐひすの霞にとづるやどを訪ふらむ

藤原實方朝臣のとのゐる所にもろともに臥して曉かへりて朝につかはしける

藤原道信朝臣

千載和歌集　巻第十六

雜歌上

上東門院より六十賀おこなひ給ひける時よみ侍りける

法成寺入道前太政大臣

かぞへしる人なかりせばおく山のたにの松とや年をつままし

上東門院入内の時御屏風に松ある家に笛ふきあそびしたる人ある所をよみ侍りける

大納言齊信

笛竹のよふかき聲ぞきこゆなる峰のまつかぜ吹きやそふらむ

一條院の御時皇后宮五節奉られける時辰の日かしづき十二人わらは下づかへまで青摺をなむ著

馬内侍

笹の葉に霰ふる夜の寒けきにひとりは寐なむものとやは思ふ

和泉式部

うらむべき心ばかりはある物をなきになしても訪はぬ君かな

契りしにあらずなるとの濱千鳥跡だに見せぬうらみをぞする
藤原定家

秋夜戀といへる心をよめる
顯昭法師

しかばかり契りし中も變りけるこの世に人をたのみけるかな

十首の歌人のよませ侍りける時よめる
前參議教長

秋の夜をもの思ふ事のかぎりとはひとり寐ざめの枕にぞしる

よしさらば君に心はつくしてむまたもこひしき人もこそあれ

暮戀故人といへる心を
仁和寺後入道法親王覺性

なき人を思ひ出でたる夕ぐれは恨みしことぞくやしかりける

題しらず
源俊頼朝臣

これを見よ六田のよどにさでさしてしをれししづの麻衣かは

笹めかるあれ田の澤にたつ民も身のためにこそ袖もぬるらめ

何せむに空だのめとて恨みけむ思ひたえた（ぬイ）るくれもありけり

戀の歌とてよめる　殷富門院大輔

なほざりの空だのめとて（かとイ）待ちし夜の苦しかりしぞ今は戀しき

題しらず　攝政右大臣

をしみかねげに言ひしらぬ別かな月もいまは（かなしイ）のありあけの空

右近大將實房

戀ひわぶる心はそらにうきぬれど涙のそこに身はしづむかな

隔關路戀といへる心をよめる　前中納言雅頼

思ひかね越ゆる關路に夜をふかみ八聲の鳥に音をぞそへつる

九月つごもりに女につかはしける　權中納言通親

世にしらぬ秋のわかれにうち添へて人やりならず物ぞ悲しき

戀の歌とてよめる　藤原經家朝臣

百首の歌めしける時戀の歌とてよませ給ひける　崇德院御製

なげくまに鏡の影もおとろへぬ契りしことのかはるのみかは　左京大夫顯輔

年ふれどあはれにたえぬ涙かなこひしき人のかからましかば　藤原季通朝臣

今はただおさふる袖も朽ちはてて心のままに落つるなみだか　皇太后宮大夫俊成

奧山の岩がきぬまのうきぬなは深きこひぢになにみだれけむ

敷きしのぶ床だにたへぬ涙にも戀はくちせぬ物にぞありける　藤原清輔朝臣

朝夕にみるめをかづく蜑だにもうらみはたえぬ物とこそきけ　上西門院兵衛

思ひしる心のなきをなげくかなうき身ゆゑこそ人もつらけれ
源　有房
思ふをも忘るる人はさもあらばあれ憂きを忍ばぬ心ともがな
惟宗廣言
はかなくぞ後の世までと契りけるまだきにだにもかはる心を
源　仲頼
厭はるるその由緣にていかなれば戀は我が身を離れざるらむ
隔海路戀といへる心をよめる、
鴨　長明
思ひあまりうち寐る宵の幻影も波路を分けて行きかよひけり
たえて久しくなりにけるをとこ思ひ出でて今よりはあだなる心あらじなど言ひければ遣しける
土御門前齋院中將
年ふれど憂身は更にかはらじをつらさも同じつらさなるらむ

變りゆくけしきを見ても生ける身の命をあだに思ひけるかな　俊惠法師

君やあらぬ我が身やあらぬおぼつかな賴めし事の皆變りぬる　圓位法師

物おもへどかからぬ人もある物をあはれなりける身の契かな

月前戀といへる心をよめる

なげけとて月やはものを思はするかこちがほなる我が淚かな　寂超法師

久方の月ゆゑにやは戀ひそめしながむればまづ濡るる袖かな　祐盛法師

戀の歌とてよめる

つらしとも恨む（てイ）る方ぞなかりける憂きを厭ふは君ひとりかは　藤原隆親

知るなれば いかに枕のおもふらむ塵のみつもる床のけしきを　右大臣

題しらず

はかなくもこむ世をかけて契るかな二度同じ身ともならじを　右近中將忠良

思ひ出でよ夕の雲もたなびかばこれや歎きにたへぬけぶりと　左兵衛督隆房

戀ひ死なばうかれむ魂よ暫だに我が思ふ人のつまにとどまれ　太皇太后宮小侍従

君こふとうきぬる魂の小夜ふけていかなるつまに結ばれぬらむ　二條院讃岐

きみ戀ふる心の闇をわびつつはこの世ばかりと思はましかば　殷富門院大輔

花園左大臣の家に侍りける女にまだ中納言など
申しける頃物申し渡りけるをかれがれになりに
ければ思ひたえにけむ前山城守なりけるものに
物申すと聞きていひ遣しける　中院右大臣
まことにやみとせも待たで山城のふしみのさとににひ枕する
かくいひて侍りければあやなくかの男にあはずなむなりに
けるとなむ
百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる　待賢門院堀河
うき人をしのぶべしとは思ひきや我が心さへなどかはるらむ
上西院兵衛
うかりける世々の契をおもふにもつらきはいまの心のみかは
前參議親隆

時々物申しける女のもとに文を遣したりけるを
よもあらじとて返して侍りければ遣しける　藤原つねひら

いにしへもこえ見てしかば逢坂はふみたがふべき中の道かは

むすめのもとに通ふ男の狩になむまかるとて太
刀をこひにおこせて侍りければ女にかはりて遣
しける　赤染衛門

かりにぞといはぬ先より頼まれずたちとまるべき心ならねば

中納言國信の家の歌合に戀の心をよめる　藤原基俊

人心なにをたのみて水無瀬川（みなせがは）せぜのふるぐひ朽ちはてぬらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき恨の心をよ
める　隆源法師

恨みずば忘れぬ人もありなまし思ひしらでぞ（もすぐイ）あるべかりける

左大將朝光がちかごとぶみを書きてかはりおこせよと責めはべりければ遣しける　馬内侍

ちはやぶる賀茂の社の神もきけ君わすれずばわれもわすれじ

かたらひける人の久しく音づれざりければ遣しける　大貳三位

うたがひし命ばかりはありながら契りし中のたえぬべきかな

もとしりて侍りける男のこと人に物申すと聞きてふみ遣したりければいひ遣しける　相模

かり人はとがめもやせむ草茂みあやしき鳥のあとのみだれを

女のふかき山にも入らまほしきよしいひて侍りければ遣しける　大納言ただのぶ

山よりもふかきところをたづね見ば我が心にぞ人はいるべき

千載和歌集　巻第十五

戀歌五

題しらず　　　　　　　　　　　　相模

假寐（うたたね）に果（はか）なくさめし夢をだにこの世にまたは見でや止みなむ

　　　　　　　　　　　　　　　和泉式部

ねをなけば袖に朽ちてもうせぬめり猶憂き事ぞつきせざりける

ともかくも言はば（びにイ）なべてになりぬべし音になきてこそ見すべかりけれ

有明の月見すさみておきていにし人の名殘をながめしものを

　　　　　　　　　　　　　　　紫式部

忘るるは憂世のつねと思ふにも身をやるかたのなきぞ侘（悲イ）しき

戀ひ侘びてうちぬる宵の夢にだに逢ふとは人の見えばこそあらめ

忍びて物申し侍りける女のせうそこをだに通はしがたく侍りけるをからの枕のしたに師子つくりたるが口のうちに深くかくしてつかはし侍りける

権大納言實家

侘びつつはなれだに君が（にイ）床なれよかはさぬ夜半の枕なりとも

かへし

讀人しらず

歎きつつかはさぬ夜半のつもるには枕もうとくならぬ物かは

題しらず

左近中將忠良

これはみな思ひし事ぞ馴れしより哀なごり（なげきイ）を如何にせむとは

権中納言通親

死ぬとても心をわくるものならば君に殘してなほや戀ひまし

遇不逢戀といへる心をよめる　　　　　俊恵法師

思ひきやうかりし夜半の雞の音をまつ事にして明すべしとは

夏夜戀といへる心をよめる

唐衣かへしては寐じなつの夜は夢にもあかでひとわかれけり

戀の歌とてよみ侍りける　　　　　法印靜賢

身のうさを思ひしらでや止みなまし逢ひ見ぬ先のつらさなりせば

攝政右大臣の時家の歌合に戀の心をよみ侍りける　　　　　皇太后宮大夫俊成

逢ふ事は身をかへてとも待つべきによよを隔てむ程ぞ悲しき（久イ）

攝政家丹後

おもひねの夢に慰むこひなれば逢はねど暮のそらの待たるる（ぞイ）

題しらず　　　　　民部卿成範

人しれずむすびそめてし若草の花のさかりも過ぎやしぬらむ

稀會不絶戀　藤原顯家朝臣

いかなればはたえぬ中川に逢ふ瀬のかずのすくなかるらむ

攝政右大臣の時百首の歌よませ侍りける時遇不逢戀をよめる　源仲綱

すみなれしさのの中川瀬だえしてながれかはるは淚なりけり

初踈後思戀といへる心をよめる　一條院讃岐

今さらに戀しといふもたのまれずこれも心のかはると思へば

戀の歌とてよめる　太皇太后宮小侍從

戀ひそめし心のいろのなになれば思ひかへすに返らざるらむ

道因法師

伊勢島やいちしの浦のあまだにもかづかぬ袖は濡るる物かは

移香增戀といへる心をよみ侍りける　權中納言經房

うつり香に何しみにけむ小夜衣忘れぬつまとなりけるものを

あけぐれの空をともに眺めける女また逢ふまでのかたみに見むと申しける後遣しける　右近中將忠良

忘れぬや忍ぶやいかに逢はぬ間の形見ときしあけぐれの空

歌合し侍りける時戀の歌とてよめる　俊惠法師

おもひかねなほ戀路にぞかへりぬる恨は末もとほらざりけり

殷富門院大輔

見せばやな雄島の蜑の袖だにも濡れにぞぬれし色はかはらず

隔川戀といへる心をよめる　從三位頼政

山城のみつのの里にいもをおきて幾たびよどに船よばふらむ

絶久戀といへる心をよみ侍りける　藤原隆信朝臣

秋風のうき人よりもつらきかな戀せよとては吹かざらめども

源仲綱

心さへ我にもあらずなりにけり戀はすがたのかはるのみかは

寄浦戀といへる心をよめる

二條院內侍參河

待ちかねて小夜もふけひの浦風にたのめぬ波の音のみぞする

戀の歌とてよめる

讃岐

一夜とて夜がれし床のさむしろにやがても塵の積りぬるかな

百首の歌よませ侍りける時遇不逢戀の心をよみ侍りける

攝政前右大臣

ながらへてかはる心を見るよりは逢ふに命をかへてましかば

在所不言戀といへる心をよみ侍りける

前中納言雅頼

逢ふ事のありしところし變らずば心をだにもやらましものを

寄源氏物語戀と云ふ心をよみ侍りける

見せばやな露のゆかりの玉かつら心にかけてしのぶけしきを

逢坂の名を忘れにし中なれどせきやられぬはなみだなりけり

二條院の御時うへのをのこども百首の歌奉りける時忍戀の心をよめる

刑部卿範兼

月まつと人には言ひてながむれば慰めがたきゆふぐれのそら

題しらず

藤原爲實

蘆の屋のかりそめ臥(ぶし)は津の國のながらへ行けど忘れざりけり

圓位法師

知らざりきくもゐのよそに見し月の影を袂にやどすべしとは

逢ふと見し其夜の夢のさめであれな永き眠はうかるべけれど

空人(仁イ)法師

君にのみしたのおもひはかはしまのみづの心は淺からなくに
うへのをのこども老後戀といへる心をつかうま
つりけるによませ給うける　院御製
おもひきや年のつもるはわすられて戀に命のたえむものとは
題しらず　藤原季通朝臣
歎きあまりうき身ぞ今はなつかしき君ゆゑ物を思ふと思へば
水莖はこれをかぎりとかきつめてせきあへぬ物は涙なりけり　從三位賴政
むつきのついたちごろ忍びたる所に遣しける　二條院御製
たれもよもまだ聞きそめじ鶯の君にのみこそおとしはじむれ
御返事　讀人しらず
鶯はなべてみやこになれぬらむ古巣に音をばわれのみぞなく

露ふかきあさまの野邊(らイ)にをかや刈る賤が袂もかくは濡れじを

逢ふ事は引佐細江(いなさ)のみをつくし深きしるしもなき世なりけり

百首の歌よみける時戀の歌とてよめる　顯昭法師

人づてはさしもやはとも(やイ)おもふらむ見せばや君になれる姿を

女のかよふ人あまたきこゆるに遣しける　平實重

淺ましやさのみはいかに(がイ)信濃なる木曾路の橋のかけ渡るらむ

題しらず

人の上と思はばいかにもどかましつらきも知らず戀ふる心を

契りける事たがひにける女に遣しける　參議爲通

契りしももろともにこそ契りしか忘ればわれも忘れましかば

忍びて物いひ侍りける女の常に心ざしなしと怨んじければ遣しける　從三位季行

うづら鳴くしづやに生ふる玉小菅かりにのみ來て歸る君かな

たえて後のかたみといへる心をよみ侍りける　久我内大臣

わかれてはかたみなりける玉章を慰むばかり書きもおかせで

崇德院に百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる　上西門院兵衛

わが袖の涙やにほのうみならむかりにも人をみるめなければ

前參議親隆

あづまやのをがやの軒の忍草しのびもあへずしげるおもひに

皇太后宮大夫俊成

戀をのみしかまの市にたつ民のたへぬ思ひに身をやかへてむ

待賢門院安藝

戀をのみすがたの池に水草ゐてすまでやみなむ名こそ惜しけれ

藤原清輔朝臣

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時の家にて寄花戀といへる心をよめる

源　雅　光

吹く風にたへぬこずゑの花よりもとどめがたきは涙なりけり

逢不逢戀といへる心をよみ侍りける

大納言成通

あひみむといひ渡りしは行末の物思ふ事のはしにぞありける

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りけるに戀の歌とてよめる

伊豫三位

戀ひわびてあはれとばかりうち歎く事よりほかの慰めぞなき

おなじ家に十首の戀の歌よみ侍りけるとき來不留戀といへる心をよみ侍りける

權中納言師時

たちかへる人をも何かうらみまし戀しさをだに留めざりせば

藤原道經

思ひ出でてたれをか人のたづねまし憂にたへたる命ならずば

太宰帥敦道のみこ中たえ侍りけるころ秋つかた思ひ出でてものして侍りけるによみ侍りける　和泉式部

待つとてもかばかりこそは有らましか思ひもかけぬ秋の夕暮

題しらず

ほどふれば人は忘れてやみぬらむ契りしことを猶たのむかな

女のもとより夜ふかく歸りてつかはしける　藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにける哉

堀河院御時百首の歌奉りける時戀の心をよめる　藤原基俊

木のまより領巾振る袖を外に見ていかがはすべき松浦さよ姫

藤原仲實朝臣

まぶしさす賤男の身にもたへかねて鳩ふく秋の聲たてつなり

千載和歌集　巻第十四

戀歌四

題しらず　　和泉式部

如何にしてよるの心をなぐさめむ晝はながめにさても暮しつ
これもみなさぞな昔の契ぞとおもふものからあさましきかな

昔御らんじ（たイ）ける人の近き程にわたりける由きかせ給うてつかはしける　　花山院御製

よそにては中々さてもありにしをうたて物思ふ昨日今日かな

久しくまうで來ざりける人のおとづれたりける返事につかはしける　　小式部

かへりつるなごりの空をながむればなぐさめがたき有明の月

皇太后宮大夫俊成

忘るなよ世々の契をすがはらやふし見の里のありあけのそら

皇嘉門院尾張

命こそおのが物からうかりけれあればぞ人をつらしとも見る

契る事侍りけるを忘れたる女につかはしける　右近中將忠良

何とかやしのぶにはあらで故郷の軒端にしげる草の名ぞうき

夢中契戀といへる心をよめる　太皇太后宮小侍從

見し夢の覺めぬやがての現にて今日と賴めしくれを待たばや

人につかはしける　二條院御製

知るらめや落つる涙の露ともにわかれの（しイ）床にきえて戀ふとは

御返事　讀人しらず

まだしらぬ露おく袖を思ひやれかごとばかりの床のなみだに

右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りける時

後朝の歌とてよみ侍りける　攝政前右大臣

の侍りければ遣しける　左近衛督隆房

いづくより吹きくる風の散らしけむ誰もしのぶの森の言の葉

題しらず　従三位頼政

思ひかね夢に見ゆやとかへさずば裏さへそでは濡さざらまし

源師光

くり返しくやしきものは君にしもおもひよりけむ賤のをだ巻

藤原隆親

いとはるる身をうしとてや心さへ我をはなれて君にそふらむ

源光行

あぢきなくいはで心をつくすかなつつむ人目も人のためかは

皇太后宮若水

くれなゐに萎れし袖も朽ちはてぬあらばや人に色もみすべき

かれはつる小笹がふしを思ふにも少なかりけるよよの數かな

寄催馬樂戀といへる心をよめる　藤原伊經

分けきつる小笹が露のしげければ逢ふ道にさへぬるる袖かな

旅戀といへる心をよめる　讀人しらず

おきて行く涙のかかるくさまくら露しげしとや人のあやめむ

月前戀といへる心を

涙をもしのぶるころのわが袖にあやなく月のやどりぬるかな

稱他人戀といへる心をよみ侍りける　内大臣

しのびかね今は我とやなのらまし思ひ捨つべき氣色ならねば

左近中將良經

知られても厭はれぬべき身ならずば名をさへ人に包ましやは

女に忍びてかたらふこと侍りけるを聞ゆること

顯昭法師

よしさらば涙にくちねからころもほすも人目を忍ぶかぎりぞ

題しらず　道因法師

おもひわびさても命はあるものをうきにたへぬは涙なりけり

藤原仲實朝臣備中守國イにまかれりけるとき具して

くだりたりけるを思ひうすくなりて後月をみて

よみ侍りける　遊女戸々

數ならぬ身にも心のありがほにひとりも月をながめつるかな

契日中戀といへる心をよめる　中原淸重

涙にや朽ちはてなましから衣そでのひるまとたのめざりせば

鳥羽院御時藏人所に侍りけるとき女にかはりて

よめる　藤原成親

中納言國信しのびて物申して後つかはしける　前齋院新肥前

あづまやのあさきの柱我ながらいつふしなれて戀しかるらむ

寄枕戀といへる心をよみ侍りける　久我内大臣

つつめども枕はこひを知りぬらむ涙かからぬ夜半しなければ

夏の戀の心をよめる　前中納言雅頼

戀すればもゆる螢もなく蟬もわが身のほかのものとやは見る

題しらず　右大臣

引きかけて涙を人に包むまにうらや朽ちなむ夜半のころもは

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる　前參議親隆

潮たるる伊勢をの蜑の袖だにもほすなる隙(ひま)はありとこそ聞け

歌合し侍りける時よめる　藤原淸輔朝臣

しばしこそ濡るる袂もしぼりしか涙にいまはまかせてぞ見る

忍びたる所にまかりて有明の月に夜ふかく歸りてつかはしける　權中納言通親

思へただ入りやらざりしありあけの月よりさきにいでし心を

攝政右大臣の時家の歌合に旅宿逢戀といへる心をよめる　皇嘉門院別當

難波江の葦のかりねの一よ故みをつくしてや戀ひわたるべき

初逢戀の心をよめる　藤原公衡朝臣

戀ひ戀ひてあふ嬉しさをつつむべき袖は涙にくちはてにけり

藤原隆信朝臣

君やそれありしつらさはたれなれば恨みけるさへ今は悔しき（悔しかるらむイ）

夢中契戀といへる心をよめる　參議俊憲

すがたこそ寐覺の床に見えずとも契りし事のうつつなりせば

百首の歌奉りける時戀の心をよめる　前參議教長

戀しさは逢ふを限と聞きしかどさてしもいとど思ひそひけり

左京大夫顯輔

よそにしてもどきし人にいつしかと袖の雫をとはるべきかな

待賢門院堀河

長からむ心もしらず黑髪のみだれて今朝はものをこそおもへ

上西門院兵衛

宵のまもまつに心やなぐさむと今來(こ)むとだにたのめおかなむ

待賢門院安藝

磯馴木(そなれぎ)のそなれそなれてむす苔のまほならずとも逢ひ見てしがな

後朝戀の心をよめる　從三位賴政

人はいさあかぬ夜床にとどめつる我が心こそわれを待つらめ

たのめこし野邊の道芝夏ふかしいづくなるらむもずの草ぐき

題しらず　　法性寺入道前太政大臣

冬の日を春よりながくなすものは戀ひつつくらす心なりけり

位の御とき皇太后宮はじめてまゐり給へりける後の朝につかはしける　　院御製

萬世を契りそめつるしるしにはかつがつ今日の暮ぞひさしき

おなじ御時忍びてはじめてまうのぼりて侍りける人に朝まつりごとの程まぎれさせ給ふことありて暮れにける夕つ方つかはされける

今朝とはぬつらさに物は思ひしれ我もさこそは恨みかねしか

花園左大臣につかはしける　　待賢門院加賀

かねてより思ひし事ぞふし柴のこるばかりなる歎きせむとは

の内侍にも遣しける（たりイ）と聞きてそねみたる歌を送りて侍りければ遣しける

大納言公實

みつ潮の末葉をあらふながれ（みだイ）芦の君をぞ思ふうきみしづみみ（しづみつつイ）

中將に侍りける時歌合し侍りけるに戀の歌とてよめる

權中納言俊忠

我が戀はあまのかる藻にみだれつつ乾くときなき波のした草

法性寺入道内大臣に侍りける時の歌合に尋失戀といへる心をよめる

藤原時昌

なほざりに三輪の杉とは教へおきて尋ぬる時はあはぬ君かな

法性寺殿にて五月の御供花の時をのこども歌よみ侍りけるに契後隱戀といへる心をよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

中納言師時

戀をのみしづのをだまきくるしきは逢はで年ふる思なりけり

源俊頼朝臣

痲手ほすあづまをとめの萱筵しきしのびても過ぐすころかな

中院の右大臣中將に侍りける時歌合し侍りけるによめる

修理大夫顯季

よともに行く方もなき心かな戀は道なきものにぞありける

旅の戀の心をよめる

僧都覺雅

旅衣なみだのいろのしるければ露にもえこそかこたざりけれ

堀河院の御時艶書の歌をうへのをのこどもによませさせ給ひて歌よむ女房のもとに遣しけるを

大納言公實は康資の王の母に遣しけるを又周防

を又の日心あるさまに人のいひ侍りければ遣しける

小大君

棚機にかしつと思ひしあふ事をその夜なき名の立ちにける哉

びはどのの皇太后宮にまゐりて侍りけるに辨のめのとのはかまのこしのいでたるを御まへなる硯を引きよせてそのこしに書きつけ侍りける

宇治前太政大臣

うらめしやむすほほれたる下ひものとけぬや何の心なるらむ

かへし

辨のめのと

下紐は人の戀ふるにとくなれば誰がつらきとか結ほほるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時戀の心をよめる

大納言公實

ひとり寐るわれにて知りぬ池水につがはぬをしのおもふ心を

千載和歌集　巻第十三

戀歌三

題しらず　　藤原實方朝臣

契りこし事の違ふぞたのもしきつらさもかくや變ると思へば

相模

知らじかしおもひも出でぬ心にはかく忘られずわれが(イ)嘆くとも

藤原長能

つれもなくなりぬる人の玉章(たまづさ)をうき思ひ出のかたみともせじ

やはらかに寐(ぬ)る夜もなくて別れぬる夜々の手枕いつか忘れむ

ふん月の七日の夜大納言朝光ものいひ侍りける

杣川の淺からずこそ契りしかなどこのくれをひきたがふらむ

皇太后宮大夫俊成

思ひきや榻（しぢ）のはしがきかきつめて百夜も同じまろねせむとは

戀しさをいかがはすべき思へども身は數ならず人はつれなし

女のもとに遣しける　　權大納言實國

戀ひしなば我(われ)故(ゆゑ)とだに思ひ出でよさこそはつらき心なりとも

左衛門督家通

一向(ひたすら)に恨みしもせじさきの世にあふまでこそは契らざりけめ(ろらイ)

思ひながら色には出でざりけるを女のもとにて

鏡をかりてその裏にかきつけ返し侍りける　　藤原公衡朝臣

増鏡こころもうつるものならばさりとも今はあはれとや見む

法住寺殿の殿上の歌合に臨期違約戀といへる心

をよめる　　權中納言通親

いましばしそらだのめにも慰めで(まイ)思ひたえぬる宵のたまづさ

藤原盛方朝臣

いたづらにしをるる袖をあさ露にかへる袂とおもはましかば

菅原是忠

戀ゆゑはさもあらぬ人ぞ恨しき我よそならばとはましものを

藤原親盛

思ひせく心のうちのしがらみも（はイ）堪へずなりゆく（ぬるイ）なみだ川かな

靜縁法師

おのづからつらき心もかはるやと待ち見むほどの命ともがな

むつましくは（もイ）ならで（くてイ）忘られにける人に遣しける　大江維順がむすめ

忘らるるうき名はさても立ちにけり心のうちは思ひわけども

晩風催戀といへる心をよめる　藤原顯家朝臣

よとともにつれなき人を戀草のつゆこぼれ増す秋のゆふかぜ

題しらず　源師光

かかりける歎は何のむくいぞと知る人あらば問はましものを
太宰大貳重家

戀ひ死なむことぞはかなき渡川逢瀬ありとは聞かぬものゆゑ
刑部卿範兼

妹が邊(あたり)ながるる川の瀬によらば泡となりても消えむとぞ思ふ

石清水の歌合とて人々よみ侍りける時寄松戀と

いへる心をよみ侍りける
權中納言經房

はかなしな心つくしにとしをへていつとも知らぬあふの松原

戀の歌とてよめる
寂蓮法師

思寐の夢だに見えで明けぬれば逢はでも鳥の音こそつらけれ
俊惠法師

夜もすがら物思ふ頃は明けやらぬ閨の隙さへつれなかりけり

潮たるる袖のひるまはありやともあはでの浦の蜑にとはばや

俊惠法師

思ひきや夢をこの世のちぎりにて覺むる別をなげくべしとは

藤原隆信朝臣

我ゆゑの涙とこれをよそに見ばあはれなるべき袖のうへかな

賀茂政平

逢ふことのかくかたければつれもなき人の心や岩木なるらむ

源光行

こひ死なむ涙のはてやわたり川深きながれとならむとすらむ

寄石戀といへる心を

二條院讚岐

我が袖は汐干に見えぬ沖の石のひとこそ知らね乾くまもなし（きイ）

題しらず

民部卿成範

契りおく其言の葉に身をかへて後の世にだに逢ひ見てしがな

大内にて月あかかりける夜人々あそびけるをほのかにみて心あくがるるよしいひて侍りける人の返事につかはしける　殷富門院尾張

誰ゆゑかあくがれにけむ雲間より見し月影はひとりならじを

戀爲後世妨といへる心をよめる　藤原家基

こえやらで戀路にまよふ逢坂や世を出ではてぬ關となるらむ

乍臥無實戀といへる心をよめる　西住法師

たまくらの上にみだるる朝寐髮したにとけずと人は知らじな

題しらず　從三位頼政

我が袖のしほのみちひる浦ならば涙のよらぬをりもあらまし　法印靜賢

など（ぞイ）やかくさも暮れ難き大空ぞ我が待つ事はありとしらずや

百首の歌の中に戀のこころを

式子内親王

袖のいろは人のとふまでなりもせよふかき思を君したのまば

契暮秋戀といへる心をよみ侍りける

左近中將良經

あきはをし契は待たるとにかくに心にかかるくれのそらかな

戀の歌とてよめる

藤原成家朝臣

戀をのみしぐるるそらの浮雲はくもりもあへず袖ぬらしけり

忍傳書戀といへる心をよめる

藤原家實

磯がくれかきはやれども藻鹽草たちくる波にあらはれやせむ

題しらず

藤原家隆

くれにとも契りてたれか歸るらむ思ひたえたるあけぼのの空

讀人しらず

あはれとも枕ばかりやおもふらむ涙たえせぬ夜半のけしきを

忍戀のこころをよみ侍りける　二條院内侍參河

ころも手におつる涙のいろなくば露とも人にいはましものを　殷富門院大輔

右大臣に侍りける時家に歌合し侍りける時戀の歌とてよみ侍りける

思ふこと忍ぶにいこど添ふものはかずならぬ身の嘆なりけり　攝政前右大臣

行きかへる心に人のなるればやあひ見ぬさきに戀しかるらむ

寄鄕戀といへる心をよめる　左衞門督家通

あふ事をさりともとのみ思ふかな伏見の里の名をたのみつつ

忍びて暮にまうのぼるべきよし侍りける人につかはしける　二條院御製

戀ひわびぬちぬの壯夫(ますらを)ならなくに生田の川に身をやなげまし

寂超法師

命をばあふにかへむと思ひしを戀ひ死ぬとだに知せてしがな

源師光

戀しともまたつらしとも思ひやる心いづれかさきにたつらむ

道因法師

逢ふならぬ戀慰めのあらばこそつれなしとても思ひたえなめ

顯昭法師

つれなさに今は思ひもたえなましこの世ひとつの契なりせば

源慶法師

うたたねの夢に逢ひ見て後よりは人もたのめぬ暮ぞまたるる

朝恵(怨イ)法師

大納言しげみち少將に侍りける時名の立つこと侍りけるをおなじくば誠になさばやといひ遣してければよみて遣しける　法性寺入道前太政大臣家參河

逢ひ見むとおもひなよりそ白波の立ちけむ名だに惜しき汀を

後三條内大臣家に歌合し侍りける時戀の歌とてよめる　道因法師

戀ひしなむ身は惜からず逢ふ事にかへむ程までと思ふばかりぞ

贈左大臣長實八條の家にて戀の心をよめる　左京大夫顯輔

今はさは逢ひ見むまではかたくとも命とならむ言の葉もがな

題しらず　平忠盛朝臣

ひとかたになびく藻鹽の烟かなつれなき人のかからましかば

藤原通經

せきかぬる涙の川の早き瀬は逢ふよりほかのしがらみぞなき　藤原顯方

我が戀は年ふるかひもなかりけりうらやましきは宇治の橋守　道因法師

なれてのちしなむ別のかなしきに命に（なイ）かへぬ逢ふこともがな　賀茂重保

錦木のちつかに限なかりせばなほこりずまに立てましものを

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる　前參議敎長

いかばかり戀路は遠きものなれば年はゆけども逢瀨なからむ

時々物申しかはしける人に名（なき名イ）のたつは知らぬかと人のつげければよめる　三のみこの家越後

なれて後つらからましにくらぶればなき名は事の數ならぬ哉

戀ひわぶる今日の涙にくらぶればきのふの袖はぬれし數かは

題しらず　右大臣

朝まだき露をさながら笹めかる賤がそでだにかくは濡れじを

権大納言實國

潮たるるいせをの蜑や我ならむさらばみるめをかる由もがな

權大納言實家

よしさらば逢ふとみつるに慰まむさむる現もゆめならぬかは

右衞門督頼實

いかばかり思ふと知りてつらからむあはれ涙の色を見せばや

俊惠法師

戀ひしなむ命を誰にゆづり置きてつれなき人の果をみせまし

從三位頼政

いかで我がつれなき人に身をかへて戀しき程を思ひしらせむ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の歌合に戀の心をよめる　　源　雅光

玉藻かる野島の浦のあまだにもいとかく袖は濡るるものかは

あふことをその年月とちぎらねば命やこひのかぎりなるらむ　　藤原重基

中院入道右大臣中將に侍りける時歌合し侍りけるに戀の歌とてよめる　　藤原宗兼朝臣

戀ひわたる涙の川に身をなげむこの世ならでも逢瀬ありやと

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる　　前參議親隆

陸奥の十綱のはしにくるつなの絶えずも人にいひわたるかな

逐日增戀といへる心をよませ給ひける　　院御製

の歌よみ侍りけるによめる　　前中納言雅兼

かかりける涙と人も見るばかりしぼらじ袖よ朽ちはてねただ

權中納言俊忠家に戀の十首の歌よみ侍りける時

いのれども不逢戀といへる心を　　源俊頼朝臣

うかりける人を初瀬の山おろしよ烈しかれとは祈らぬものを

おなじ十首の中に誓ふ戀といへる心をよめる　　修理大夫顯季

うれしくは後の心を神もきけ引くしめなはの絶えじとぞ思ふ（おもへばイ）

乍臥無實戀　　藤原顯仲朝臣

結びおくふしみのさとの草枕とけで止みぬる戀にもあるかな

來不留戀　　權中納言俊忠

戀ひ戀ひてかひもなぎさに沖つ波よせては軈て立ち歸れとや

女につかはしける　　徳大寺左大臣

千載和歌集　巻第十二

戀歌二

堀河院の御時百首の歌奉りける時戀の心をよみ
侍りける　　大納言公實

思ひあまり人にとはばや水無瀬川むすばぬ（わたらばイ）水に袖はぬるやと

題しらず　　花園左大臣

はかなくも人に心をつくすかな身のためにこそ思ひそめしか

二條太皇太后宮大貳

戀ひそめし人はかくこそつれなけれ我が涙しも色かはるらむ

白河院三條殿におはしましける時をのこども戀

よそ人にとはれぬるかな君にこそ見せばやとおもふ袖の雫を
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤原伊綱

つれなくぞ夢にも見ゆるさよ衣うらみむとては返しやはせし
　　攝政右大臣の時家の歌合に戀の歌とてよめる　　藤原季經朝臣

思ひ出づるその慰めもありなまし逢ひ見て後のつらさ思へば
　　おなじ家に百首の歌よみ侍りける時初戀の心を
　　よみ侍りける　　　　　　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成

照射する端山がすそのした露やいるより袖はかくしをるらむ
　　忍戀

いかにせむ室の八島にやどもがな戀のけぶりを空にまがへむ

あさましやおさふる袖の下くぐる涙のすゑをひとや見つらむ

皇嘉門院別當

忍びねの袂は色に出でにけりこころにも似ぬわがなみだかな

女のなき名たつよし恨みて侍りければ遣しける

左兵衛督隆房

同じくば重ねてしほれぬれ衣さてもほすべきなき名ならじを

かへし

讀人しらず

流れてもすすぎやするとぬれ衣人はきすとも身にはならさじ

戀の歌とてよみ侍りける

大納言宗家

人目をばつつむと思ふにせきかねて袖にあまるは涙なりけり

右京大夫季能

つれなさにいはで絶えなむと思ふこそあひ見ぬ先の別なりけれ

法眼實快

祐盛法師

いろ見えぬこころのほどを知らするは袂を染むる涙なりけり

大中臣定雅

わが床は信夫の奥のますげ原つゆかかるとも知るひとのなき

祝部宿禰成仲

君こふる涙しぐれと降りぬればしのぶのやまも色づきにけり

一條院前皇后宮常陸

いかにせむ忍ぶの山のした紅葉しぐるるままに色のまさるを

賀茂重延

いつしかと袖に時雨のそそぐかな思ひは冬のはじめならねど

攝政右大臣の時百首の歌の中に忍戀の心をよみ侍りける

從三位賴政

藤原惟規

頼めとやいなとやいかにいな舟の暫しと待ちし程も經にけり

賢智法師

かくばかり色に出でじと忍べども見ゆらむ物をたへぬ氣色(けしき)は

夏にいりて戀まさるといへる心をよめる

賀茂重保

人しれずおもふ心はふかみ草はなさきてこそいろに出でけれ

題しらず

津守國基(イ光)

日を經つつしげさはまさる思草あふ言の葉のなどなかるらむ

大中臣清文

おつれども軒にしられぬ玉水は戀のながめのしづくなりけり

源季貞

ひとしれずおもひそめてし心こそいまは涙のいろとなりけれ

ことの音にかよひそめぬる心かな松吹く風にあらぬ身なれど（わが身もイ）

百首の歌よみ給ひ（侍りイ）ける時戀の歌　　式子内親王

はかなしや枕さだめぬうたた寐にほのかにまよふゆめの通路

百首歌よみ侍りけるとき戀の心をよみはべりける　　右大臣

さきにたつ涙とならば人しれず（ぬイ）戀路にまどふみちしるべせよ

題しらず　　刑部卿頼輔

ながらへばつらき心も變るやとさだめなき世を頼むばかりぞ

源有房

もらさばや忍びはつべき涙かは袖のしがらみかくとばかりは

源師光

戀しさを憂身なりとてつつみしはいつまでありし心なるらむ

我が戀はをばな吹きこす秋風の音にはたてじ身にはしむとも

横川のふもとなる山寺にこもりゐける時いとよ（て侍りけるイ）ろしきわらはの侍りければよみて遣しける

仁昭法師

世をいとふはしと思ひし通路にあやなく人を戀ひわたるかな

題しらず

花園左大臣

たよりあらば蜑の釣船ことづてむ人をみるめに求めわびぬと

大宮前太政大臣

またもなくただ一すぢに君を思ふ戀路に迷ふわれやなになる

前中納言伊房

君こふる身はおほ空にあらねども月日をおほく過しつるかな

きさいの宮にはじめてまゐりける女房ことひくを聞かせ給うてよみてたまひける

二條院御製

戀ひ死なば世の果(はか)なきにいひなし(おきイ)てなき後(あと)までも人にしられじ

顯昭法師

ひとしれぬ涙の川のみなかみやいはでの山のたにのしたみづ

題しらず　讀人しらず

いかにせむ御垣が原につむ芹のねにのみ泣けど(くとイ)しる人のなき

戀の百首の歌よみ侍りける時寄霞戀といへる心
をよめる　賀茂重保

つれもなき人の心やあふ阪のせき路へだつるかすみなるらむ

戀の歌とて(ここにイ)よめる　藤原清輔朝臣

涙川うきねのとりとなりぬれど(ばイ)人にはえこそみなれざりけれ

二條院の御時うへのをのこども百首(これかれイ)の歌たてま
つりける時よめる　源のみちよしの朝臣

百首の歌よみ侍りけるとき戀の歌とてよみ侍りける　　右大臣

人しれぬ木の葉の下のうもれみづ思ふこころをかき流さばや

題しらず　　久我内大臣

こひしとも言はぬにぬるる袂かなこころをしるは涙なりけり

従三位頼政

思へどもいはでしのぶのすりごろも心のうちにみだれぬる哉

寂然法師

陸奥のしのぶもぢずり忍びつついろには出でじ亂れもぞする

藤原清輔朝臣

難波女のすくもたく火の下焦れ上はつれなきわが身なりけり

歌合し侍りける時忍戀のこころをよめる　　刑部卿頼輔

思ふことといは間にまきし松の種千代とちぎらむ今はねざせよ
うるまの島の人ここにはなたれ來てここの人の
物いふを聞きも知らでなむあるといふ比かへり
事せぬ女につかはしける　前大納言公任
おほつかなうるまの島の人なれやわが言の葉をしらず顏なる
雨のふる日しのびたる人につかはしける　堀河右大臣
人しれずものおもふころの袖見れば雨も涙もわかれざりけり
權中納言としただかつらの家にてなき名たつ戀
といへる心をよみ侍りける　源俊頼朝臣
たちしより晴れずも物を思ふかなくなき名や野邊の霞なるらむ
戀の歌とてよめる　源明賢朝臣
歎き餘り知せそめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる　　大炊御門右大臣

おほかたの戀する人にききなれて世のつねのとや君思ふらむ

左京大夫顯輔

思へどもいはでの山に年を經て朽ちやはてなむ谷のうもれ木

高砂のをのへの松にふく風のおとにのみやは聞きわたるべき

待賢門院堀河

荒磯のいはにくだくる波なれやつれなき人にかくるこころは

上西門院兵衛

岩間ゆくやました水をせきわびてもらす心のほどを知らなむ

權中納言俊忠の家の歌合に戀の歌とてよめる　　藤原基俊

みこもりに言はでふるやの忍草忍ぶとだにも知らせてしがな

人につかはしける　　藤原長能

に初戀の心をよめる　後二條關白家筑前

思ふよりいつしか濡るるたもとかな涙ぞ戀のしるべなりける

女につかはしける　藤原長能

藻くづ火のいそまを分くる漁船(いさりぶね)ほのかなりしに思ひそめてき

題しらず　輔仁親王

いかにせむ思ひを人にそめながら色にいでじと思ふこころを

德大寺左大臣

ひとめ見し人は(をイ)たれともしら雲のうはの空なる戀もするかな

中院右大臣

つつめども涙にそでのあらはれて戀すと人にしられぬるかな

大納言成通

つつめどもたへ(えイ)ぬ思になりぬれば問はず語りのせまほしき哉

千載和歌集 卷第十一

戀歌一

堀河院の御時百首の歌たてまつりける時初戀の心をよめる

源俊頼朝臣

難波江の藻に埋(うつも)るるたまかしはあらはれてだに人をこひばや

二條太皇太后宮肥後

まだしらぬ人をはじめて戀ふるかなおもふ心よ道しるべせよ

前齋宮河内

わりなしや思ふ心の色ならばこれぞそれとも見せましものを

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りける

同じ御時大嘗會主基方稻春歌丹波國雲田村をよめる

刑部卿範兼

天地(あめつち)のきはめも知らぬみ代なれば雲田の村のいねをこそつめ

高倉院御時仁安三年大嘗會悠紀方の御屏風の歌

宮内卿永範

霜ふれどさかえこそませ君が代にあふさか山のせきの杉むら

今上の御時元暦元年大嘗會悠紀方の風俗の歌三

神山をよめる

藤原季經朝臣

ときはなるみ神のやまの杉むらや八百萬代のしるしなるらむ

に備中國長田山の麓に琴ひき遊びたる所をよめる

善滋爲政朝臣

千代とのみおなじことをぞしらぶなる長田の山のみねの松風

白河院の御時承保元年大嘗會主基方の稻春歌神田の鄕をよめる

前中納言匡房

千はやぶる神田の里のいねなれば月日とともに久しかるべし

院の御時の久壽二年大嘗會悠紀方の風俗歌近江國わか松の森をよめる

宮内卿永範

すべらぎのすゑ榮ゆべきしるしには木だかくぞなる若松の森

平治元年大嘗會悠紀方の風俗歌近江國千坂の浦をよめる

參議俊憲

君が代のかずにはしかじかぎりなき千坂の浦の眞砂なりとも

の日女房の中に申し侍りける　右大臣

笛のねの萬代までときこえしを山もこたふるここちせしかな

入道右大臣はじめて中院の家に住み侍りける時祝の心をよめる　修理大夫顯季

群れてゐるたづのけしきにしるきかな千年すむべき宿の池水

橘俊綱朝臣の伏見の家にかつらをほりうゑさせ給ひけるによめる　賀茂成助

みづがきの桂をうつすやどなれば月見むことぞ久しかるべき

俊綱朝臣さぬきの守にまかりけるとき祝の心をよめる　藤原孝善

君が代にくらべていはば松山の松の葉かずはすくなかりけり

後一條院の御時長和五年大嘗會主基方の御屛風

百千たび浦島が子はかへるともはこやの山はときはなるべし

二條院の御時大炊御門高倉の内裏に侍りけるに同じ西のまちの家にてはじめて詩歌講じ侍りけるに鶴契遐年といへる心をよみ侍りける

大炊御門右大臣

幾千代とかぎらぬたづの聲すなり雲井のちかき宿のしるしに

閑院の家にてはじめて對松爭齡といへる心をよみ侍りける

入道前關白太政大臣

千年ふるをのへの小松うつしうゑて萬代までの友とこそ見め

源通能朝臣

萬代もすむべきやどに植ゑつれば松こそ君がかげをたのまめ

高倉院の御時内裏にまゐり侍りけるにうへの御笛に萬歳樂ふかせ給ひけるをはじめて承りて又

百首の歌めしける時祝の心をよませ給うける　崇德院御製（歌イ）

吹く風も木々の枝をばならさねど山は久しきこゑぞきこゆる

二條院の御時大内におはしましてて初めて花有喜色といへる心をよませ給ひけるによみ侍りける　左（右イ）大臣

千代ふべきはじめの春と知りがほにけしきことなる初（花イ）櫻かな

うへのをのこども百首の歌奉りける時祝の心をよませ給うける　二條院御製

白雲にはねうちかけて飛ぶつる（たづイ）の遙に千代のおもほゆるかな

百首の歌よみ給ひ（ませイ）ける時の祝の歌　式子内親王

動きなきなほ萬代ぞたのむべきはこやの山のみねのまつかぜ

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ給ひけ（侍りイ）るに祝の歌五首が中によみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

堀河院の御時百首の歌奉りける時子の日の心を
よめる
二條太皇太后宮肥後
行末をまつぞ久しき君がへむ千代のはじめの子の日と思へば
祝の心をよめる
藤原基俊
奥山のやつをのつばき君が代にいくたび蔭をかへむとすらむ
保延二年法金剛院に行幸ありて菊契多秋といへ
る心をよみ侍りける
法性寺入道前太政大臣
君が代をながながし月にしも白菊の咲くや千とせのしるしなるらむ
花園左大臣
八重菊のにほひにしるし君が代は千とせの秋を重ぬべしとは
八條前太政大臣
千はやぶる神代のことも人ならばとはましものを白菊のはな

堀河院御時鳥羽殿に行幸の日池上花といへる心をよみ侍りける　權中納言俊忠

千とせすむ池のみぎはの八重櫻かげさへ底にかさねてぞ見る

白河院鳥羽殿におはしましける時松契遐年といふ心をよめる　源俊頼朝臣

神代よりひさしかれとやうごきなき岩根に松の種をまきけむ

京極の前のおほきおほいまうち君の高陽院の家の歌合に祝の心をよみ侍りける

落ちたぎつやそ宇治川の早き瀨に岩こす波は千代のかずかも

二條太皇太后宮賀茂のいつきと申しける時本院にて松映水といへる心をよみ侍りける　京極前太政大臣

ちはやぶるいつきの宮のありす川松とともにぞ影はすむべき

わがともと君がみかきの吳竹は千よに幾よのかげをそふらむ

大宮前太政大臣

祝の心をよみ侍りける

君が代は天のかこ山出づる日のてらむ限りは盡きじとぞ思ふ

堀河院の御時立春の朝に今日の心つかうまつる

べきよし侍りければ奏し侍りける

源俊頼朝臣

君がためみたらし川を若水にむすぶや千代のはじめなるらむ

同じ御時后の宮にて花契遐年といへる心を上の

をのこどもつかうまつりけるによませ給うける

堀河院御製

千年までをりて見るべき櫻花こずゑはるかに咲きそめにけり

鳥羽院位おりさせ給うての頃庭花年久といへる

心をかれこれつかうまつりけるによみ侍りける

大納言忠教

ほり植ゑし若木の梅にさく花は年もかぎらぬにほひなりけり

千載和歌集　巻第十

賀歌

みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給へりける頃八條院内親王と申しける時かの御かたにて竹遐年友といへる心を講ぜられけるによませ給うける

院御製

幾千代とかぎらざりける呉竹や君がよはひのたぐひなるらむ

後三條内大臣

うゑて見る籬の竹のふしごとにこもれる千よは君ぞかぞへむ

皇太后宮大夫俊成

かへし

この世にてまたあふまじき悲しさにすすめし人ぞ心みだれし

圓位法師

父の中納言顯長が墓所の堂深草の里に侍りける
にまかりてよめる　法眼長眞

山の端にたなびく雲やゆくへなくなりし煙のかたみなるらむ

母の身まかりにける時よめる　顯昭法師

としをへて昔をしのぶ心のみうきにつけてもふかくさのさと

たらちめやとまりて我を惜ままましかはるにかふはイる命なりせば

同行の上人西住秋の頃わづらふ事ありてかぎり
に見え侍りければよめる　圓位法師

もろともに眺めながめて秋の月ひとりにならむことぞ悲しき

西住法師身まかりける時をはり正念なりけるよ
し聞きて圓位法師の許につかはしける　寂然法師

亂れずとをはり聞くこそ嬉しけれさても別はなぐさまねども

供養し侍りける時笛にそへて侍りける　法印成清

思ひきや今日うちならす鐘の音に傳へし笛の音を添へむとは

わづらふこと侍りける時母にさきだたむことを歎き思ひ侍りけるをそのたびおこたりて後また母身まかりにける時よめる　靜縁法師

さきだたむ事をうしとぞ思ひしに後れてもまた悲しかりけり

周防の國に父のまかりくだりけるがかの國にて身まかりにけると聞きて急ぎ下りける時よめる　藤原親盛

待つらむと思はばいかにいそがまし跡を見るだにまよふ心を

仁和寺法親王蓮花門院にてかくれ侍りける後月忌の日かの墓所にまかりけるに山に雲かかりて心ぼそく侍りければよめる　覺蓮法師

三年まで馴れしは夢の心地して今日ぞうつつの別れなりける

後入道法親王かくれ侍りて後いりがたまで月を見てよみ侍りける

僧都印性

入りぬるか飽かぬわかれの悲しさを思ひしれとや山の端の月

親の墓にまかりて侍りけるに知らぬつかどもの多く見え侍りければよめる

左京大夫脩範

野邊みれば昔の跡やたれならむその世もしらぬ苔のしたかな

奈良に侍從と申しけるわらはのいづみ川に身をなげて侍りければよめる

僧都範玄

何事のふかきおもひにいづみ川そこの玉藻としづみはてけむ

花園の左大臣の家に童にて侍りけるを笙を教へ侍るとて給へりける笛を年經て後かのために佛

る　　法印澄憲
常に見し君がみゆきを今日とへばかへらぬ旅ときくぞ悲しき
大炊御門の右大臣身まかりて後かのしるしおきて侍りける私記(日イ)どもの侍りけるを見てよみ侍りける　　右大臣
敎へおくその言の葉を見るたびにまたとふ方のなきぞ悲しき
母の二位身まかりて後よみ侍りける　　民部卿成範
鳥部山おもひやるこそ悲しけれひとりや苔のしたに朽ちなむ
母の服に侍りける程に又紀伊三位身まかりにける時よみ侍りける　　藤原貞憲朝臣
かぎりありて二重はきねど(ばイ)藤衣なみだばかりを重ねつるかな
忍びて物申しける女身まかりにける時よめる　　左京大夫秀能

大納言公實身まかりて後かの遠忌の日よみ侍りける

花園左大臣の室

かぞふれば昔がたりになりにけりわかれは今の心地すれども

大炊御門の右大臣かくれ侍りて後七月七日母の三位の許に消息のついでに遣し侍りける

權大納言實家

棚機(たなばた)にことしはかさぬ椎柴のそでしもことにつゆけかりけり

かへし

三位

椎柴のつゆけきそでは棚機もかさぬにつけてあはれとや見む

待賢門院かくれさせ給ひて後法金剛院にて郭公の鳴き侍りけるに

仁和寺入道法親王

故郷にけふ來ざりせばほとゝぎすたれと昔をこひてなかまし

二條院かくれさせ給ひて御わざの夜よみ侍りけ

袈裟を忘れてとりに遣したりけるに遣すとて　天台座主勝範

墨染の色はいづれもかはらぬを濡れぬや君がこころもなるらむ

わづらはせ給うけるとき鳥羽殿にて郭公の鳴きけるを聞かせ給うてよませ給うける　鳥羽院御製

つねよりもむつましきかな郭公しでの山路のともとおもへば

美福門院の御服にて侍りけるを宣旨にてぬぎ侍るとてよめる　久我内大臣

こころざし深くそめてし藤衣きつる日かずの淺くもあるかな

中納言伊實六條の家にて身まかりにけるを後のわざなどはてて九條の堂に歸り侍りける時柱にかきつけ侍りける　大宮前太政大臣

たぐひなく憂き事見えし宿なれどそも別るるは悲しかりけり

侍りければよみ侍りける　慶範法師

うちならす鐘の音にや長き夜も明けぬなりとは思ひしるらむ

待賢門院かくれさせ給うて後御いみはててかた

がたにかへらせ給ひける日　崇德院御製

かぎりありて人はかたがた別るとも涙をだにも止めてしがな

御かへし　上西門院兵衛

ちりぢりに別るる今日の悲しさに涙しもこそとまらざりけれ

語らひけるわらはの思はずにうとく成りにける

後なくなりにけるを人のとぶらひて侍りければ

よめる　靜嚴法師

悲しさをこれよりけにや思はましかねて習はぬ別れなりせば

服に侍りける時ある上人の來れりけるが墨染の

菖蒲草うきねを見ても涙のみかからむそでをおもひこそやれ

女におくれて歎き侍りけるころ肥後がもとより

とひ侍りけるに遣しける　藤原基俊

思ひやれむなしき床をうちはらひ昔をしのぶそでのしづくを

贈皇后茨子かくれ侍りにける後硯の箱など取り

したためけるに物に書きつけておかれ侍りける

歌

胸にみつおもひをだにもはるかさで煙とならむことぞ悲しき

あひ知れりける女身まかりにける時月を見てよ

める　藤原有信朝臣

もろともに有明の月を見しものをいかなる闇に君まよふらむ

人のわざしける導師にて諷誦文よみけるに歌の

もろともに春の花をば見しものを人におくるる秋ぞかなしき

右衞門督基忠かくれ侍りて後かの家につかはしける（右 イ左）

前中納言匡房

花と見し人は程なくちりにけり我が身も風を待つとしらなむ

後三條院かくれさせ給うて諒闇のころよみ侍りける

藤原顯綱朝臣

かわく世もなき墨染の袂かな朽ちなばなにをかたみにもせむ

少將に侍りける時大納言忠家かくれ侍りける後（忠 イ長）五月五日中納言國信中將に侍りける時消息して侍りけるついでに遣しける

權中納言俊忠

墨染の袂にかかるねを見ればあやめも知らぬなみだなりけり

かへし

中納言國信

年をへてきみが見なれします鏡むかしの影はとまらざりけり

上東門院に參りて侍りけるに一條院（にイ）の御事など
おぼし出でたる御氣色なりける朝奉りける　赤染衛門

つねよりもまた濡れそひし袂かなむかしをかけて落ちし涙に

御かへし（返事イ）　上東門院

現とも思ひわかれで過ぐるまに見し世の夢をなにかたりけむ（るらイ）

あがたに侍りけるほどに京なる女身まかりぬと
聞きていそぎのぼり侍りける道にてよめる　源實基朝臣

都へと思ふにつけてかなしきはたれかは今はわれを待つらむ

藏人に侍りけるとき親（母イ）のおもひになりにける秋
うへのをのこども嵯峨野に花見にゆくと聞きて
つかはしける　平雅康

同じ年の冬御禊大嘗會など過ぎて十二月つごもり大納言長家二條院の一品内親王と申しける時まゐりて侍りけるによみ侍りける　　前中宮宣旨

うきもののさすがに惜しき今年かな遠ざかりなむ君が別れに

かへし　　大納言長家

悲しさはいとど增る別れにし今年もけふをかぎりと思へば

遠き所に行きにける人のなくなりにけるを親はらからなど都に歸り來て悲しき事いひたるにつかはしける　　紫式部

いづかたの雲路としらばたづねましつら離れけむ（たるイ）雁のゆく末（へをイ）

恒德公かくれ侍りて後かの常に見侍りける鏡の物の中に侍りけるを見てよみける　　藤原道信朝臣

遣しける　　　　　　　　　　　大貳三位

悲しさをかつは思ひも慰めよたれもつひにはとまるべきかは

かへし　　　　　　　　　　　大納言長家

誰も皆とまるべきには有らねども後るるほどはなほぞ悲しき

一條院かくれさせ給へりける年の秋月を見てよみ侍りける　　　　　　　　　　　承香殿女御

おほかたにさやけからぬか月影はなみだ曇らぬ人に見せばや

後一條院四月にかくれさせ給ひける年の九月に中宮又かくれ給ひにける四十九日末つかた宮々上東門院に渡り給ひ侍りける日人々別をしみけるによみ侍りける　　　　　　　　　　　小辨命婦

悲しさにそへてもものの悲しきは別のうち（のイ）のわかれなりけり

一聲も君につげなむほととぎすこのさみだれは闇にまよふ（どイ）と

枇杷殿の皇太后宮わづらひ給ひける時所をかへて試むとて外にわたり給へりけるをかくれたまひてのち陽明門院一品親王と申しける枇杷殿にかへり給へりけるにふかき御帳のうちに菖蒲くすだまなどの枯れたるが殘りたる（侍りけるイ）を見てよみ侍りける　　辨乳母

菖蒲草涙のたまにぬきかへてをりならぬねをなほぞ掛けつる

かへし　　江侍從

玉ぬきし菖蒲の糸（草イ）はありながらよどのはあれむ（ぬイ）物とやはみし

大納言長家大納言齊信の女にすみ侍りけるを女身まかりける頃法住寺にこもりゐて侍りけるに

思ひかねきのふの空を眺むれば（どイ）それかと見ゆる雲だにもなし

世のはかなき事を（思ひてイ）よませ給うける　花山院御製

現とも夢ともえこそわき果てねいづれの時をいづれとかせむ

一條院かくれ給うてのまたの年彼の院の花を見てよめる　源道濟

櫻花見るにも悲しなかなかにことしの春は咲かずぞあらまし

親しかりける人身まかりけるによめる　道命法師

おくれじと思へど死なぬ我が身かな獨やしらぬ道をゆくらむ

花山院かくれさせ給うての頃よみ侍りける　藤原長能

おいらくの命のあまり長くして君にふたたびわかれぬるかな

後一條院かくれさせ給うての年郭公のなきけるによませ給うける　上東門院

主なき家の櫻を見てよめる　藤原範永朝臣

うゑおきし人のかたみと見ぬだにも宿の櫻をたれかをしまぬ

彈正尹爲尊のみこにおくれ侍りてよめる　和泉式部

をしきかな形見にきたる藤衣ただこのごろに朽ちはてぬべし

煩ひ侍りけるがいとどよわくなりにけるに如何なるかたみにか有りけむ山吹なるきぬをぬぎて女につかはしける　藤原道信朝臣

口なしの園にやわが身入りにけむ思ふ事をもいはでやみぬる

又云ふ身まかりてのち女の夢にみえてかく詠みはべりけるとも

中將道信朝臣身まかりにけるを送りをさめての朝によめる　藤原賴孝

千載和歌集　卷第九

哀傷歌

花のさかりに藤原爲頼などともにて石藏にまかれりけるを中將宣方朝臣などかかくと侍らざりけむ後の度には必ず侍らむと聞えけるを其年中將も爲頼も身まかりにけるまたの年彼の花を見て大納言公任の許(にイ)につかはしける

中務卿具平のみこ

春くれば散りにし花も咲きにけりあはれ別のかからましかば

かへし

前大納言公任

行きかへる春やあはれと思ふらむちぎりし(りにイ)人の又もあはねば

あづま路も年も末にやなりぬらむ雪ふりにけるしらかはの關

圓位法師がよませける百首の歌の中に旅の歌とてよめる　寂蓮法師

いはねふみ峯の椎柴をりしきて雲にやどかるゆふぐれのそら

かくしつつつつひにとまらむ蓬生（よもぎふ）の思ひしらるる草まくらかな

旅の歌とてよめる　權律師覺辨

旅寐する木のしたつゆの袖にまたしぐれ降るなり小夜の中山

攝政右大臣の時家の歌合に旅の歌とてよめる　藤原資忠

旅寐するいほりをすぐる村時雨なごりまでこそ袖はぬれけれ

旅の歌とてよめる　大中臣親宗

霞もる不破の關屋にたびねして夢をもえこそとほさざりけれ

心のほかなる事ありて知らぬ國に侍りける時よめる　平康頼

かくばかり憂身のほどもわすられてなほ戀しきは都なりけり

さつまがた沖の小島にわれはありと親にはつげよ八重の潮風

羇中歳暮といへる心をよめる　僧都印性

旅宿の心をよみ侍りける　　二品親王

よしさらば磯のとまやに旅寐せむ波かけずとて濡れぬ袖かは

旅の歌とてよみ侍りける　　法印慈圓

旅の世にまた旅寐して草まくら夢のうちにもゆめを見るかな

右兵衛督隆房

草まくらかりねの夢にいくたびか馴れし都にゆきかへるらむ

關路曉月といへる心をよめる　　法眼兼覺

いつもかくあり明の月のあけがたはものや悲しき須磨の關守

百首の歌よみ侍りける時旅の歌とてよめる　　藤原家隆

旅寐する須磨の浦路のさよ千鳥こゑこそそでの波はかけけれ

修行にまかりありきけるに野中に宿して侍りけ
る夜旅の枕の露けく侍りけるによめる　　圓玄法師

もしほ草しきつの浦の寐覺にはしぐれにのみや袖はぬれける

源　仲　綱

玉藻ふく磯屋がしたにもる時雨たびねの袖もしほたれよとや

太皇太后宮小侍従

草枕おなじたびねのそでにまた夜半の時雨も(のイ)やどはかりけり

家に百首の歌よませ侍りける時旅の歌とてよみ
侍りける

攝政前右大臣

はるばるとつもりの沖をこぎゆけば岸の松風とほざかるなり

刑部卿頼輔

わたの原しほぢ遙に見わたせばくもと波とはひとつなりけり

皇太后宮大夫俊成

あはれなる野島が崎のいほりかな露おくそでに波もかけけり

月見ればまづ都こそ戀しけれ待つらむとおもふ人はなけれど

夜逢坂の關を過ぐるとてよめる　祝部成仲

逢坂のせきには人もなかりけりいはまの水のもるにまかせて

中院の右大臣の家にて獨行關路といへる心をよみ侍りける　大納言定房

こえて行くともやなからむ逢坂の關のしみづの影はなれなば

客衣露重といへる心をよみ侍りける　前大僧正覺忠

旅衣あさたつ小野の露しげみしぼりも敢へずしのぶもぢずり

住吉の社の歌合とて人々よみ侍りけるとき旅宿時雨といへる心をよみ侍りける　右近大將實房

風のおとにわきぞかねまし松が根の枕にもらぬ時雨なりせば　俊惠法師

さだめなきうき世の中としりぬれば何處も旅の心地こそすれ

下野國にまかりける時尾張國なるみといふ所に
てよみ侍りける　　前中納言師仲

おぼつかないかになるみの果ならむ行方もしらぬ旅の悲しさ（空かなイ）

あづまの方にまかりける時ゆくさき遙におぼえ
侍りければよめる　　左京大夫脩範

日をへつつ行くにはるけき道なれどすゑを都と思はましかば

海邊時雨といへる心をよみ侍りける　　讀人しらず

かくまでは哀ならじをしぐるとも磯の松が根まくらならずば

尾張國にしるよしありてしばし侍りける頃人の
許より都のことは忘れぬるといひて侍りければ
遣しける　　道因法師

藤原季通朝臣

さらしなやをばすて山に月みむと都にたれかわれを知るらむ

待賢門院堀河

道すがら心もそらにながめやるみやこの山のくもがくれぬる

同院安藝

ささの葉をゆふ露ながら折りしけば玉ちる（しくイ）旅の草まくらかな

皇太后宮大夫俊成

浦づたふいそのとまやのかぢ枕ききもならはぬ波のおとかな

世をそむきて後修行し侍りけるに海路にて月を見てよめる

圓位法師

わたの原はるかになみをへだて來て都にいでし月を見るかな

高野にまうで侍りける道にてよみ侍りける

高野法親王覺法

ことまだしとてとゞめければよめる　津守有基

住の江の（にィ）まつらむとのみ歎きつつ心つくしにとしを經るかな

天仁元年齋宮群行の時忘井といふ所にてよめる　齋宮甲斐

別れゆく都のかたの戀しきにいざむすび見むわすれ井のみづ

法性寺入道内大臣の時に歌合に旅宿雁といへる心を　源雅光

小夜ふかきくもるの（にィ）雁もおとすなり我ひとりやは旅の空なる

百首の歌めしける時旅の歌とてよませ給うける　崇德院御製

かり（らィ）ころも袖の涙にやどる夜は月もたびねのここちこそすれ

松が根の枕もなにかあだならむたまの床とてつねのとこかは

大炊御門右大臣

花咲きし野邊のけしきも霜がれぬこれにてぞ知る旅の日數を

める　　　　　　　　　中納言國信

波の上に有明の月を見ましやは須磨の關屋にやどらざりせば

行路雪（初雪イ）といへる心をよみ侍りける　　八條前太政大臣

夜な夜なの旅寐のとこに風さえてはつ雪ふれるさやの中やま

海づらに船ながらあかしてよみ侍りける　　和泉式部

水の上に浮寐をしてぞ思ひしる斯れば鴛は鳴くにぞありける

丹後國にまかりける時よめる　　赤染衛門

思ふことなくてや（ぞイ）見ましよさのうみ（のイ）天の橋立みやこなりせば

攝津國に住み侍りけるを美濃國にくだる事あり
てあづさの山にてよみ侍りける　　能因法師

宮木引くあづさの杣をかきわけて難波の浦をとほざかりぬる

大隅の任はてて上らむとしけるを大貳さたする

千載和歌集　卷第八

羇旅歌

題しらず　　藤原範永朝臣

ありあけの月も淸水にやどりけりこよひは越えじ逢坂のせき（やまイ）

法性寺入道太政大臣内大臣に侍りける時關路月

といへる心をよみ侍りける　　中納言師俊

播磨路や須磨の關屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ

月前旅宿といへる心をよめる　　藤原基俊

あたら夜を伊勢の濱荻をりしきて妹戀ひしらに見つる月かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時旅の歌とてよ

百首の歌よみ侍りけるとき別の心を　　藤原定家

わかれても心へだつなたびごろも幾重かさなる山路なりとも

夏の頃こしの國にまかりける人の秋は必ずのぼりなむ待てといひけるが冬になるまでのぼりまうでこざりければ遣しける

西住法師

待てといひて頼めし秋も過ぎぬれば歸る山路の名ぞかひもなき

源惟盛年頃侍ふ者にて箏の琴などをしへ侍りけるを土佐國にまかりける時川尻まで送りにまうで來りけるに青海波の祕曲の琴柱たつること教へ侍りてその曲の譜かきて給ふとて奥に書き付けて侍りける

入道前太政大臣

をしへ置くかたみをふかく忍ばなむ身は青海の波にながれぬ（しづみぬイ）

人に餞し侍りける曉よみ侍りける

右衛門督頼實

わするなよ姨捨山の月見てもみやこを出づるありあけの空

永らへて有るべき身とし思はねば忘るなとだに（もイ）えこそ契らね

筑紫にまかれりける男京に上るとてかどでの所より女の許にのぼるべき心地なむせぬなど言へりける返しに遣しける　讀人しらず

あはれとし思はむ人はわかれ（ところイ）しを心は身よりほかのものかは

離れける男の遠きほどにゆくをいかが思ふといひて侍りければ遣しける　和泉式部

別れてもおなじ都にありしかばいとこのたびの心地やはせし

成尋法師入唐し侍りける時よみ侍りける　成尋法師母

忍べどもこのわかれ路を思ふにはからくれなゐの涙こそふれ

百首の歌よみ侍りける時わかれの心をよめる　僧都覺雅

心をも君をも宿にとめ（どとめイ）置きてなみだとともに出づるたびかな

限あらむ道こそあらめこの世にて別るべしとは思はざりしを

　參議資通大貳はてての ぼりけるに筑前守にて侍
　る時つかはしける　　　　　　　　　　藤原經衡

行く君をとどめまほしく思ふかな我も戀しきみやこなれども

　かへし　　　　　　　　　　　　　　　太宰大貳資通

年へ（つもイ）たる人のこころをおもひやれ君だに戀ふる花のみやこを

　修行に出でて熊野にまうで侍りける時人につか
　はしける　　　　　　　　　　　　　　道命法師

もろともに行くひともなき別路に涙ばかりぞとまらざりける

　人の法會行ひける導師に越前國にまかりて上り
　なむとする時彼の國の願主わかれ惜みけるによ
　める　　　　　　　　　　　　　　　　天台座主源心

侍りける　大納言公實

かへりこむほどもさだめぬ別路は都の手ぶりおもひでにせよ

前中納言匡房

行末をまつべき身こそ老いにけれわかれは道の遠きのみかは

源俊頼朝臣

忘るなよかへる山路におとたえて日數は雪のふりつもるとも

修業に出で立ち侍る時いつほどにか歸りまうで

來べきと人のいひ侍りければよめる　大僧正行尊

歸り來む程をばいつといひおかじ定めなき身（世イ）は人だのめなり

百首の歌奉りける時わかれの心を　左京大夫顯輔

たのむれど心かはりてかへり來ばこれぞやがての別なるべき

上西門院兵衞

千載和歌集　卷第七

離別歌

宇佐の使の餞しける所にてよみ侍りける　藤原實方朝臣

むかし見し心ばかりをしるべにておもひぞおくるいきの松原

有國大貳になりて下りける時よみ侍りける　前大納言公任

別よりまさりて惜しき命かな君にふたたび逢はむとおもへば

遠所にまかりける人のまうで來て曉歸りけるに　紫式部

九月盡くる日蟲の音あはれなりければ

なきよわるまがきの蟲もとめがたき秋の別やかなしかるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時別の心をよみ

み侍りける　民部卿親範

都にて送り迎ふといそぎしを知りてやとしの今日はくるらむ
知らでや今日のとしはくれなむ

籠り居て侍りける年の暮によめる　前左衛門督公光

さりともと歎き歎きてすごしつる年も今宵にくれはてにけり

年の暮の心をよめる　相模

哀にも暮れゆく年の日數かなかへらむことは夜の間と思ふに

歳暮述懷のこころをよめる　惟宗廣言

數ならぬ身には積らぬ年ならば今日のくれをも歎かざらまし

源光行

をしめどもはかなく暮れてゆく年の忍ぶ昔にかへらましかば

歳暮の心をよみ侍りける　前律師俊宗

一年ははかなき夢の心地して暮れぬる今日ぞおどろかれぬる

かしらおろして後大原に籠りゐて侍りけるに閑中歳暮といへる心を上人どもよみ侍りけるによ

題しらず　坂上明兼

吳竹のをれふすおとのなかりせばよ深き雪をいかで知らまし

雪の歌とてよめる　藤原爲季

眞柴かる小野の細道あとたえてふかくも雪のなりにけるかな

俊惠法師

雪ふれば木々の梢にさきそむるえだよりほかの花もちりけり

關路滿雪（雪イ）といへる心をよみ侍りける　內大臣

ふるままに跡たえぬれば鈴鹿山ゆきこそ關のとざしなりけれ

年內に梅の花の咲けるを見てよみ侍りける　天台座主明快

山里のかきねの梅はさきにけりかばかりこそは春もにほはめ

雪中歲暮といへる心をよみ侍りける　前大納言實長

かきくらし越路も見えずふる雪にいかでか年の歸りゆくらむ

あともたえしをりも雪に埋れてかへる山路にまよひぬるかな
従三位頼政

こえかねて今ぞ越路をかへる山雪ふる時の名にこそありけれ
顯昭法師

波間より見えしけしきぞかはりぬる雪ふりにけり松がうら嶋
攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけ
る時雪の歌とてよめる
藤原良清

ふぶきするながらの山を見渡せばをのへをこゆる志賀の浦波
醍醐の淸瀧のやしろに歌合し侍りける時よめる　讀人しらず

ふる雪にのきばの竹もうづもれて友こそなけれ冬のやまざと
行路雪といへる心をよめる
西住法師

駒のあとはかつ降る雪に埋れておくるる人やみちまどふらむ

藤原顯綱朝臣

外山にはしばの下葉もちりはててをちの高嶺に雪降りにけり

源俊頼朝臣

うへのをのこども百首の歌奉りける時雪の歌とてよませ給うける

ふる雪に谷のかけはしうづもれてこずゑぞ冬の山路なりける

二條院御製

雪つもるみねにふぶきや渡るらむこしのみ空にまよふしら雲

二品法親王

遍昭寺にて池邊雪といへる心をよみ侍りける

波かけばみぎはの雪もきえなましこころありても氷る池かな

右大臣

雪の歌とてよみ侍りける

山里のかきねは雪にうづもれて野邊とひとつになりにける哉

右近大將實房

さえ渡る夜半のけしきに深山べの雪のふかさを空にしるかな

藤原清輔朝臣

消ゆるをや都の人はをしむらむ今朝やまざとにはらふしら雪

藤原資隆朝臣

雪の歌とてよめる

霜がれのまがきのうちの雪見れば（に雪ふれイ）菊よりのちの花もありけり

題しらず

仁和寺後入道法親王

たとへても言はむかたなし月影に薄雲かけて降れるしらゆき

前參議教長

みやま路はかつちる雪に埋れていかでか駒のあとをたづねむ

京極前太政大臣の高陽院の家の歌合に雪の歌とてよめる

治部卿通俊

おしなべて山のしら雪つもれどもしるきは越の高嶺なりけり

月のすむそらには雲もなかりけりうつりしみづは氷へだてて

百首の歌めしける時氷の歌とてよませ給うける　崇德院御製

つららゐてみがける影の見ゆるかなまことにいまや玉川の水

皇太后宮大夫俊成

月さゆるこほりのうへに霰ふりこころくだくる玉がはのさと

閑居聞霰といへる心をよみ侍りける　左近中將良經

さゆる夜のまきのいたやの獨寐にこころくだけと霰ふるなり

山家雪朝といへる心をよめる　大納言經信

あさどあけて見るぞさびしき片岡のならの廣葉にふれる白雪

百首の歌の中に雪の歌とてよませ給うける　崇德院御製

夜をこめて谷の戸ぼそに風さむみかねてぞしるき嶺のはつ雪

藤原季通朝臣

鴨のゐる入江の葦はしもがれておのれのみこそ青ばなりけり
賀茂重保

おく霜を拂ひかねてやしをれ伏すかつみが下に鴛のなくらむ
月前水鳥といへる心をよめる
前左衛門督公光

芦がものすだく入江の月かげはこほりぞ波のかずにくだくる
冬月といへる心をよめる
平實重

夜をかさねむすぶ氷のしたにさへ心ふかくもすめるつきかな
氷の歌とてよめる
左京辨親宗

いづくにか月はひかりをとどむらむやどりし水も氷ゐにけり
藤原成家朝臣

冬くればゆくてに人はくまねども氷ぞむすぶやまの井のみづ
道因法師

かたみにや上毛の霜をはらふらむともねの鴛のもろ聲になく

題しらず　紫式部

水鳥を水の上とやよそに見むわれもうきたる世をすぐしつつ

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　前中納言匡房

みづどりの玉藻のとこのうき枕ふかきおもひは誰かまされる

百首の歌めしける時よませ給うける　崇德院御製

このころのをし（はイ）のうきねぞ哀なる上毛のしもよ下のこほりよ

左京大夫顯輔

難波がた入江をめぐるあしがもの玉藻の床のうきねすらしも

氷初結といへることを　權中納言經房

をし鳥のうきねの床やあれぬらむつららゐにけり昆陽（こや）（ゐイ）の池水

水鳥の歌とてよめる　道因法師

妹許と佐保の川邊をわけゆけば小夜か更けぬる千鳥鳴くなり

千鳥をよめる　皇太后宮大夫俊成

須磨の關あり明の空になく千鳥かたぶく月はなれもかなしき

道因法師

岩こゆるあらいそ波にたつ千鳥こころならずや浦づたふらむ

右大臣

あかつきになりやしぬらむ月影のきよき河原に千鳥なくなり

法印靜賢

霜さえて小夜もながゐの浦寒み明けやらずとや千鳥なくらむ

賀茂成保

霜がれの難波の芦のほのぼのと明くるみなとに千鳥鳴くなり

水鳥をよめる　源親房

中納言定頼世をのがれてのち山里に侍りける頃
遣し侍りける　　中納言定頼女母イ
都だにさびしさまさるこがらしに嶺のまつかぜ思ひこそやれ
宇治にまかりて侍りける時よめる　　中納言定頼
朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木
堀河院の御時百首の歌奉りける時鷹狩をよめる　　藤原仲實
矢形尾の目白の鷹を引きすゑて宇陀の鳥立を狩りくらしつる
　　隆源法師
ふる雪にゆくへも見えずはし鷹のをぶさの鈴の音ばかりして
　　源俊頼朝臣
ゆふまぐれ山かたつきて立つ鳥の羽音に鷹をあはせつるかな
傅大納言道綱家の歌合に千鳥をよめる　　藤原ながたふ

ふりはへて人もとひこぬ山里は時雨ばかりぞ過ぎがてにする

圓位法師人々にすゝめて百首の歌よませ侍りけるとき時雨の歌とてよめる　藤原定家

しぐれつるまやの軒端の程なきにやがてさしいる月の影かな

讀人しらず

たまづさに涙のかかるここちしてしぐるる空に雁のなくなり

山家時雨といへる心を　源仲頼

嶺ごえに楢の葉つたひ音づれてやがて軒端にしぐれ來にけり

題しらず　紀康宗

曉のねざめに過ぐるしぐれこそ漏らでも人のそで濡らしけれ

落葉の心をよめる　藤原盛雅

散りはてて後さへ風をいとふかな紅葉をふけるみやまべの里

うたたねの夢や現にかよふらむ覺めてもおなじ時雨をぞ聞く　前右京權大夫

時雨の歌とてよめる　從三位頼政

山めぐり雲のしたにやなりぬらむすそ野の原に時雨すぐなり（ろイ）

源師光

しぐれゆく遠（をち）の外山の峯つづきうつりもあへず雲かかるらむ（へイ）

道因法師

嵐ふく比良のたかねのねわたしにあはれしぐるる神無月かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時の時雨の歌（時雨をよめるイ）　中納言國信

深山べのしぐれてわたる數ごとにかごとがましき玉かしは哉

源俊頼朝臣

木の葉のみ散ると思ひし時雨には涙もたへぬ物にぞありける

二條太皇太后宮肥後

寐覺して誰かきくらむこの頃の木の葉にかはるよはの時雨を

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の

歌合に時雨をよめる

源　定　信

おとにさへ袂をぬらすしぐれかなまきの板屋の夜半の寐覺に

崇徳院に百首の歌奉りけるとき落葉の歌とてよ

める

皇太后宮大夫俊成

まばらなる槇の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらむ

時雨の歌とてよめる

仁和寺後入道法親王

木の葉ちるとばかり聞きてやみなましもらで時雨の山巡りせば

曉更時雨といへる心をよみ侍りける

攝政前右大臣

ひとりねの涙やそらにかよふらむ時雨にくもるありあけの月

藤原隆信朝臣

外山ふく嵐のかぜのおと聞けばまだきに冬のおくぞ知らるる

百首の歌奉りける時初冬の歌とてよみ侍りける　大炊御門右大臣

はつしもや置きはじむら（めけイ）む曉の鐘のおとこそほのきこゆなれ

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　前中納言匡房

高砂のをのへの鐘のおとすなりあかつきかけて霜やおくらむ

藤原基俊

楸（ひさぎ）生ふる小野の淺茅におく霜の白きをみれば夜やふけぬらむ

冬の初の歌とて　藤原定家

冬來ては一夜ふたよを玉笹の葉わけのしものところせきまで

題しらず　藤原もとし

霜さえて枯れゆく小野の岡べなる楢の廣葉にしぐれ降るなり

馬内侍

ひまもなく散るもみぢ葉に埋れて庭のけしきも冬ごもりけり　大炊御門右大臣

さまざまの草葉も今は霜がれぬ野邊より冬はたちて來つらむ　大納言隆

すむ水を心なしとはたれかいふこほりぞ冬のはじめをも知る　前參議敎長

秋のうちは哀しらせし風の音のはげしさ添ふる冬は來にけり（もイ）　花園左大臣家小大進

わぎもこ（わがせイ）が上裳の裾の水なみにけさこそ冬はたちはじめけれ

山家初冬をよめる　藤原孝善

いつのまに筧のみづのこほるらむさこそ嵐のおとのかはらめ

題しらず　和泉式部

千載和歌集 卷第六

冬歌

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき初冬の心を
よみ侍りける　大納言公實

昨日こそ秋はくれしかいつの間に岩間のみづのうすこほるらむ

源俊頼朝臣

いかばかり秋のなごりを眺めましけさは木の葉に嵐ふかずば

藤原仲實朝臣

いづみ川水のみわたのふしつけに岩[柴イ]間の[もイ]こほる冬は來にけり

百首の歌めしける時初冬の心をよませ給うける　崇德院御製

あけぬともなほ秋風は音づれて野邊のけしきよ面がはりすな

承暦二年内裏の歌合に紅葉をよめる　前中納言匡房

龍田山ちるもみぢ葉を來てみればあきは麓にかへるなりけり

百首の歌奉りける時九月盡の心をよめる　花園左大臣家小大進

今宵まで秋はかぎれとさだめける神代もさらに恨めしきかな

散りかかる谷の小川の色づけば木の葉（もみぢイ）や水（秋イ）のしぐれなるらむ

落葉浮水といへる心をよみ侍りける　後三條内大臣

くれてゆく秋をばみづやさそふらむ紅葉ながれぬ山川ぞなき

百首の歌めしけるとき九月盡の心をよませ給う
ける　崇德院御製

もみぢ葉のちりゆく方を尋ぬれば秋もあらしの聲のみぞする

山寺秋暮といへる心をよみ侍りける　前大僧正覺忠

さらぬだに心ぼそきを山ざとのかねさへ秋のくれを告ぐなり

雲居寺の結緣經の後宴に歌合し侍りけるに九月
盡の心をよみ侍りける　贍西上人

からにしき幣（ぬさ）にたちもてゆく秋もけふや手向の山路こゆらむ

源俊賴朝臣

賀茂成保

吹きみだるはは(そ)が原を見渡せばいろなき風も紅葉しにけり

松間落葉といへる心をよめる　藤原朝仲

色かへぬ松ふくかぜの音はして散るははそ(の)紅葉なりけり

故郷落葉といへる心をよめる　惟宗廣言

ふるさとの庭は木の葉にいろかへてかはらぬ松ぞ緣なりける

題しらず　法橋慈辨

ちりつもる木の葉も風にさそはれて庭にも秋のくれにける哉

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　源俊頼朝臣

秋の田に紅葉ちりける山ざとをこともおろかに思ひけるかな

百首の歌よませ侍りけるとき紅葉の歌とてよみ侍りける　攝政前右大臣

題しらず　覺盛法師

秋といへば岩田のをののははそ原時雨もまたず紅葉しにけり

近衛院の御時禁庭落葉といへる心をよめる　藤原公重朝臣

庭のおもに散りてつもれるもみぢ葉は九重にしく錦なりけり

大井川に紅葉見にまかりてよめる　俊惠法師

今日みれば嵐の山は大井川紅葉吹きおろす名にこそありけれ

道因法師

大井川ながれておつる紅葉かなさそふは峯のあらしのみかは

百首の歌の中に紅葉をよめる　藤原淸輔朝臣

今ぞしる手向の山は紅葉のぬさと散りかふ名にこそありけれ

落葉の心をよめる　祝部成仲

龍田山ふもとのさとはとほけれど嵐のつてにもみぢをぞ知る

大納言實房

清見がたせきにとまらでゆく船は嵐のさそふ木の葉なりけり

權中納言實守

もみぢ葉を關もる神に手向けおきて逢坂山をすぐる木がらし

左大辨親宗

もみぢ葉のみな紅にちりしより名のみなりけりしらかはの關

從三位賴政

都にはまだあを葉にて見しかどももみぢ散りしく白川のせき

湖上落葉といへる心をよめる

刑部卿範兼

ささ波や比良の高嶺の山おろしに紅葉を海のものとなしつる

百首の歌奉りける時よめる

藤原清輔朝臣

龍田山松のむらだち無かりせばいづくか殘るみどりならまし

宇治の前太政大臣紅葉見侍りけるによめる　小　辨

君見むとこころやしけむ龍田姫もみぢのにしき色をつくせり

紅葉留客といへる心をよめる　素　意　法　師

故鄕にとふ人あらばもみぢ葉のちりなむ後をまてとこたへよ

歌合し侍りける時紅葉の歌とてよめる　左京大夫顯輔

山姫にちへの錦を手向けても散るもみぢ葉をいかにとどめむ

月照紅葉といへる心ををのこどもつかうまつりける時よませ給うける　院　御　製

もみぢ葉につきの光をさしそへてこれやあかぢの錦なるらむ

嘉應二年法住寺殿の殿上の歌合に關路落葉といへる心をよみ侍りける　右のおほいまうち君

山おろしに浦づたひする紅葉かないかがはすべき須磨の關守

ことごとに悲しかりけりむべしこそあきの心を愁といひけれ

贍西上人雲居寺にて結縁經の後宴に歌合し侍りけるに野風の心をよめる　藤原基俊

秋にあへずさこそは葛の色づかめあな恨めしの風のけしきや

紅葉の心をよみ侍りける　仁和寺後入道法親王覺性

初時雨ふるほどもなくしもとゆふかつらぎ山は色づきにけり

覺延法師

村雲のしぐれて染むるもみぢ葉は薄く濃くこそ色も見えけれ

秋の歌とてよめる　藤原定家

しぐれ行くよものこずゑの色よりも秋は夕のかはるなりけり

題しらず　道命法師

おほろけの色とや人の思ふらむをぐらの山をてらすもみぢ葉

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の
歌合に殘菊をよめる　藤原基俊
今朝見ればさながら霜をいただきておきなさびゆく白菊の花
月照菊花といへる心をよみ侍りける　内大臣
白菊の葉におくつゆにやどらずば花とぞ見ましてらす月かげ
籬菊如雪といへる心をよみ侍りける　前大僧正行慶
雪ならばまがきにのみは積らじと思ひとくにぞしらぎくの花
菊の歌とてよめる　祐盛法師
朝な朝なまがきの菊のうつろへば露さへ色のかはりゆくかな
百首の歌よみ侍りける時菊の歌とてよめる　藤原家隆
冴えわたる光を霜にまがへてや月にうつろふしらぎくのはな
崇德院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる　藤原季通

まつかぜの音だにあきはさびしきに衣うつなりたまがはの里　源俊頼朝臣

たがために如何にうてばか唐衣ちたびやちたび聲のうらむる　藤原基

旅宿擣衣といへる心をよめる　俊盛法師

衣うつ音をきくにぞ知られぬる里とほからぬくさまくらとは

霧の歌とてよめる　法師宗圓

夕霧や秋のあはれをこめつらむ分け入るそでに露のおきそふ

暮尋草花といへる心をよませ給うける　崇德院御製

秋ふかみたそがれ時のふぢばかま匂ふは名のる心地こそすれ

百首の歌奉りける時よめる　前參議親隆

如何にしていはまも見えぬ夕霧にとなせの筏おちてきつらむ

式子内親王

草も木も秋のすゑ葉は見えゆくに月こそ色はかはらざりけれ

後冷泉院の御時九月十三夜月宴侍りけるによみ侍りける

大宮の右のおほいまうち君

すむ水にさやけき影のうつればや今宵の月の名にながるらむ

十三夜の心をよめる

讀人しらず

秋の月ちぢに心をくだき來てこよひ一夜にたへずもあるかな

月前擣衣といへる心を

仁和寺入道法親王覺性

さ夜ふけてきぬたの音ぞたゆむなる月を見つつや衣うつらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時擣衣の心をよみ侍りける

大納言公實

戀ひつつや妹がうつらむ唐衣きぬたのおとのそらになるまで

秋の夜のあはれは誰もしるものを我のみとなくきりぎりす哉

蟲聲非一といふ心をよみ侍りける　　左近中將良經

さまざまのあさぢが原の蟲のねを哀ひとつに聞きぞなしつる

百首の歌奉りける時よみ侍りける　　大炊御門右大臣

夜をかさね聲よわりゆく蟲のねに秋のくれぬる程をしるかな

蛬の近くなきけるをよませ給うける　　花山院御製

秋深くなりにけらしなきりぎりす牀のあたりに聲きこゆなり

保延のころほひ身を恨むる百首の歌よみ侍りける時蟲の歌とてよめる

さりともとおもふ心も蟲の音もよわり果てぬる秋のくれかな

題しらず　　道性法親王

蟲の音もまれになり行くあだし野にひとり秋なる月の影かな

さびしさを何にたとへむを鹿なく深山のさとの明がたのそら

長覺法師

いかばかり露けかるらむさを鹿の妻こひかぬる小野の草ぶし

寂蓮法師

をのへより門田にかよふ秋風にいな葉をわたるさを鹿のこゑ

題しらず　讀人しらず

おどろかす音こそよるの小山田は人なきよりも寂しかりけれ

源兼昌

我が門のおくてのひたに驚きてむろのかり田に鳴ぞたつなる

寂蓮法師

蟲のねは淺茅がもとにうづもれて秋は末葉の色にぞありける

藤原兼實朝臣

さを鹿のつまとふ聲もいかなれや夕はわきてかなしかるらむ

右イ 左京大夫秀能

聞くままにかたしく袖のぬるるかな鹿の聲にも露やそふらむ

法印慈圓

山ざとの曉がたのしかの音は夜半のあはれのかぎりなりけり

俊惠法師

外(よそ)にだに身にしむ暮の鹿の音をいかなる妻かつれなかるらむ

道因法師

夕まぐれさてもや秋はかなしきと鹿の音きかぬ人にとはばや

賀茂政平

つねよりも秋の夕をあはれとは鹿の音にてやおもひそめけむ

惟宗廣言

さらぬだに夕さびしきやまざとの霧のまがきにを鹿なくなり　刑部卿範兼

夜泊鹿といふ心をよめる

みなと川うきねのとこに聞ゆなりいく田のおくのさを鹿の聲　藤原隆信朝臣

うきねする猪名のみなとにきこゆなり鹿の音おろす峯の松風　俊恵法師

夜をこめて明石のせとを漕ぎ出れば遙におくるさを鹿のこゑ　道因法師

みなと川夜船こぎいづる追風にしかの聲さへせとわたるなり（かなイ）

鹿聲兩方といふ心を　覺延法師

宮城野の小萩が原をゆくほどは鹿の音をさへわけて聞くかな

鹿の歌とてよめる　左京大夫修範

露さむみうらがれもてく秋の野にさびしくもある風の音かな

承暦二年内裏の歌合によめる　藤原正家朝臣

夕されば小野の萩原ふく風にさびしくもあるか鹿の鳴くなる

堀河院の御時百首の歌奉りける時　一條太皇太后宮肥後

みむろやまおろす嵐のさびしきにつまとふ鹿の聲たぐふなり

大納言公實

そまがたに道やまどへるさを鹿の妻とふ聲のしげくもある哉

題しらず　輔仁のみこ

秋の夜はおなじ尾上になく鹿のふけゆくままに近ぐなるかな

田上の山里にて鹿のなくを聞きてよみ侍りける　源俊頼朝臣

さを鹿の鳴く音は野邊に聞ゆれど涙は床のものにぞありける

百首の歌奉りける時よめる　待賢門院堀河

千載和歌集　巻第五

秋歌下

題しらず　大貳三位

はるかなるもろこしまでも行く物は秋のねざめの心なりけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　藤原仲實朝臣

山ざとはさびしかりけりこがらしの吹く夕暮のひぐらしの聲

崇德院に百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる　藤原季通朝臣

秋の夜は松をはらはぬ風だにも悲しきことの音をたてずやは

法性寺入道前太政大臣前内大臣に侍りける時の家の歌合に野風といへる心をよめる　藤原時昌

心をよみ侍りける　源俊頼朝臣

てる月の旅寐のとこやしもとゆふかつらぎ山のたにがはの水

てる月のかげさえぬれば淺茅原ゆきのしたにも蟲はなくなり

月照草露といへる心をよめる　藤原親盛

あさぢ原葉末にむすぶ露ごとにひかりを分けてやどる月かな

題しらず　藤原淸輔朝臣

ふけにける我がよの秋ぞ哀なるかたぶく月はまたもいでなむ

刑部卿頼輔

身のうさの秋はわするるものならば涙くもらで月は見てまし

紫式部

おほかたの秋のあはれをおもひやれ月に心はあくがれぬとも

前大納言成通

類なくつらしとぞおもふ秋の夜の月を殘して明くるしののめ

法性寺入道前太政大臣の家にて澗底月といへる

る　　　　右衛門督頼實

つねよりも身にぞしみける秋の野に月すむ夜半の荻のうは風

海邊月といへる心をよめる　　　　俊惠法師

ながめやる心のはてぞなかりけるあかしのおきにすめる月影

賀茂社の後番の歌合とて神主重保歌よませ侍りける時よめる　　　　權中納言長方

やほかゆく濱の眞砂をしきかへて玉になしつるあきの夜の月　　　　藤原公時朝臣

岩間ゆくみたらしがはの音さえて月やむすばぬこほりならむ

湖上月といへる心をよめる　　　　藤原顯家朝臣

月かげはきえぬ氷と見えながらさざなみよする志賀のから崎

月前蟲といへる心をよめる　　　　賴圓法師

しほがまの浦ふく風にきりはれて八十嶋かけてすめる月かげ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りけるとき月

毎秋友といへる心をよませ侍りける時よめる　源俊頼朝臣

思ひぐまなくても年のへぬるかなものいひかはせ秋の夜の月

藤原基俊

山の端にますみの鏡かけたりと見ゆるは月の出づるなりけり

藤原道經

秋の夜や天の川瀬はこほるらむ月のひかりの冴えまさるかな

法性寺入道前太政大臣の家に月の歌よませ侍りける時よめる　太宰大貳重家

遠ざかるおとはせねども月きよみ氷とみゆる志賀のうらなみ

百首の歌よみ侍りける時月の歌とてよみ侍りけ

て遣しける中に月の歌　右大臣

月みればはるかに思ふさらしなの山も心のうちにぞありける

権中納言俊忠の桂の家にて水上月といへる心を

よみ侍りける　源俊頼朝臣

あすもこむ野路の玉川はぎこえていろなる波に月やどりけり

百首の歌の中に月の歌とてよませ給うける　崇徳院御製

玉よする浦わのかぜに空はれてひかりをかはす秋の夜のつき

大炊御門右大臣

さ夜ふけて富士のたかねにすむ月は烟ばかりや曇るなるらむ

皇太后宮大夫俊成

石ばしる水のしらたまかず見えてきよたき川にすめる月かな

藤原清輔朝臣

月の歌三十首よませ侍りける時よみ侍りける　法性寺入道前太政大臣

秋の月たかねの雲のあなたにて晴れゆく空のくるる待ちけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　源俊頼朝臣

こがらしの雲ふき拂ふ高嶺よりさえても月のすみのぼるかな

隆源法師

いづこにも月はわかじを如何なればさやけかるらむ更科の山

攝政右大臣家に百首の歌よませ侍りける時月の歌とてよめる　藤原隆信朝臣

いでぬより月見よとこそさえにけれ姨捨山のゆふぐれのそら

月の歌とてよみ侍りける　前中納言雅頼

くまもなきみ空に秋の月すめばにはにはには冬のこほりをぞしく

皇太后宮大夫俊成十首の歌よみ侍りける時よみ

時しもあれ秋ふる里にきてみれば庭は野邊ともなりにける哉

住み侍りける山里をしばし外に侍りて歸りたりけるに前栽のいたくしをれたりければよめる　小辨

宿かれて幾日もあらぬに鹿のなく秋の野邊ともなりにける哉

思野花といへる心をよめる　藤原伊家

今はしもほに出でぬらむ東路(あづまぢ)の岩田の小野のしののをずすき

秋の歌とてよみ侍りける　攝政前右大臣

夕されば小野のあさぢふたまちりて心くだくる風のおとかな

前大僧正覺忠

ときはなる青葉の山も秋くれば色こそかへねさびしかりけり

月の歌あまたよみ侍りける時よめる　權大納言實家

あきの夜の心をつくすはじめとてほのかに見ゆる夕月夜かな

はかなさを我が身の上によそふれば袂にかかる秋のゆふつゆ
藤原清輔朝臣

龍田姫かざしの玉の緒をよわみ亂れにけりと見ゆるしらつゆ
題しらず
藤原季經朝臣

ゆふまぐれ荻ふく風のおときけば袂よりこそつゆはこぼるれ
圓位法師

おほかたの露には何のなるならむ袂におくはなみだなりけり
法輪寺にまうで侍りけるにさが野の花をみてよめる
道命法師

はなすすき招くはさがと知りながら止まるものは心なりけり
ひさしく住まず侍りける所に秋頃まかりわたりてよみ侍りける
前大納言公任

野分する野邊のけしきを見わたせば（見るときはイ）心なき人あらじとぞ思ふ

皇太后宮大夫俊成

夕されば野邊のあきかぜ身にしみて鶉なくなりふかくさの里

題しらず　源俊頼朝臣

何となくものぞかなしき菅原やふしみのさとの秋のゆふぐれ

百首の歌よませ侍る時草花の心を（歌とてイ）よみ侍りける　攝政前右大臣

さまざまの花をば宿にうつしうゑつ鹿の音さそへ野邊の秋風

野花露といへる心をよみ侍りける　二品親王

秋の野の千草のいろにうつろへば花ぞかへりて露をそめける

題しらず　法印慈圓

草木まで秋のあはれをしのべばや野にも山にも露こぼるらむ

崇德院に百首の歌奉りける時よめる　待賢門院堀河

歎くこと侍りける時女郎花をみてよみ侍りける　前左衛門督公光

をみなへし涙に露やおきそふる手折ればいとど袖のしをるる

題しらず　藤原行家

吹く風にをれふしぬれば女郎花まがきぞ花のまくらなりける

攝政前右大臣家に歌合し侍りけるとき野徑秋夕

といへる心をよめる　藤原盛方朝臣

夕されば萱がしげみになき交す蟲のねをさへ分けつつぞゆく

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　源俊頼朝臣

さまざまに心ぞとまる宮城野のはなのいろいろ蟲のこゑごゑ

野花留客といへる心をよめる

秋くれば宿にとまるを旅寐にて野邊こそ常のすみかなりけれ

百首の歌奉りける時秋の歌とて詠める　藤原季通朝臣

人もがな見せもきかせも萩がはな咲く夕かげのひぐらしの聲
藤原伊家

秋山のふもとをこむるうす霧はすそのの萩のまがきなりけり
藤原基俊

宮城野のはぎやをじかの妻ならむ花さきしよりこゑの色なる
長覺法師

心をば千草のいろに染むれどもそでにうつるは萩がはなずり
堀河院の御時百首の歌奉りける時よみ侍りける
大納言師頼

露しげきあしたのはらの女郎花ひとえだ折らむ袖はぬるとも
法性寺入道前太政大臣の家にて女郎花隨風といへる心をよめる
前中納言雅兼

をみなへし靡くを見れば秋風のふきくる末もなつかしきかな

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき刈萱をよみ
侍りける　大納言師頼
秋くればおもひみだるるかるる萱の下葉や人のこころなるらむ
題しらず　親王家甲斐
おしなべて草葉のうへをふく風にまづしたをるる野邊の刈萱
雲居寺瞻西上人房にて歌合し侍りける時よめる　藤原道經
ふみしだき朝ゆく鹿や過ぎぬらむしどろに見ゆる野路(邊イ)の刈萱
草花告秋といへる心をよめる　法印靜賢
秋きぬと風もつげてし山ざとになほほのめかす花すすきかな
題しらず　讀人しらず
いかなれば上葉をわたる秋風に下をれぬらむ野邊のかるかや
和泉式部

百首の歌奉りける時七夕の心をよめる　大納言隆季

棚機の天つひれ吹くあき風に八十のふなつを御ふねいづらし

堀河院の御時百首の歌奉りける時よみ侍りける　二條太皇太后宮肥後

たなばたのあまの羽衣かさねてもあかぬ契やなほむすぶらむ

前齋宮河内

戀ひ戀ひてこよひばかりや棚機の枕にちりのつもらざるらむ

七夕の心をよめる　源俊頼朝臣

七夕のあまの河原のいはまくら交しもはてず明けぬこの夜は

百首の歌の中に七夕の心をよませ給うける　崇德院御製

たなばたに花ぞめ衣ぬぎかせばあかつき露のかへすなりけり

七夕後朝の心をよみ侍りける　土御門右大臣

天の川こころをくみて思ふにも袖こそ濡るれあかつきのそら

初秋の心をよめる　寂然法師

秋はきぬ年はなかばにすぎぬとや荻ふく風のおどろかすらむ

讀人しらず

木の葉だにいろづくほどはあるものを秋風ふけばちる涙かな

社頭立秋といへる心をよめる　賀茂重政

神山のまつ吹く風もけふよりは色はかはらでおとぞ身にしむ

郁芳門院の前栽合に荻をよめる　大藏卿行宗

物ごとに秋のけしきはしるけれどまづ身にしむは荻の上かぜ

初秋の心を　源俊頼朝臣

秋風や涙もよほすつまならむおとづれしよりそでのかわかぬ

七夕の心をよみ侍りける　攝政前右大臣

たなばたの心のうちやいかならむ待ち來し今日の夕暮のそら

千載和歌集　巻第四

秋歌上

秋立日よみ侍りける　　侍從の乳母

秋たつと聞きつるからにわが宿の萩の葉風のふきかはるらむ（かなイ）

二品法親王

淺ぢふの露けくもあるか秋來ぬと目にもさやかに見えける物を

百首の歌奉りける時秋立心をよめる　　待賢門院堀河

秋の來るけしきの森の下風にたちそふものはあはれなりけり

皇太后宮大夫俊成

八重葎さしこもりにし蓬生にいかでかあきの分けてきつらむ

秋風はなみとともにや越えぬらむまだきすずしき末のまつ山

刑部卿賴輔歌合し侍りけるに納涼の心をよみ侍りける　前參議敎長

岩たたく谷のみづのみおとづれて夏にしられぬみやまべの里　藤原盛方

岩まより落ちくる瀧のしら糸はむすばで見るも涼しかりけり

百首の歌奉りける時みな月のみそぎをよめる　藤原季通朝臣

今日くれば麻の立枝にゆふかけてなつみなづきの祓(禊イ)をぞする　皇太后宮大夫俊成

いつとても惜しくやはあらぬ年月をみそぎにすつる夏の暮哉

みな月祓をよめる　讀人しらず

みそぎする川瀨にさ夜やふけぬらむかへる袂に秋かぜぞふく

夏夜曉月といへる心をよめる　藤原經家朝臣

我ながら程なき夜半やをしむらむなほ山の端にありあけの月

夏月をよめる　祝部宿禰成仲

夏の夜の月の光はさしながら如何にあけぬるあまの戸ならむ

雨後月明といへる心をよめる　俊惠法師

ゆふ立のまだ晴れやらぬ雲間よりおなじ空ともみえぬ月かな

大宮の前太政大臣の家にて夏月如秋といへる心をよめる　藤原敦仲

小萩はらまだ花さかぬみやぎ野の鹿やこよひの月に鳴くらむ

草花先秋といへる心をよめる　顯昭法師

夏ごろもすそ野の原をわけゆけばをりたがへたる萩が花ずり

松風秋近といへる心をよめる　藤原親盛

百首の歌奉りける時氷室の歌とてよみ侍りける　大炊御門右大臣

あたりさへ涼しかりけり氷室山まかせしみづの氷るのみかは

題しらず　法印慈圓

山かげや岩もるしみづおとさえて夏のほかなるひぐらしの聲

藤原道經

ゆふされば玉ゐるかずも見えねども關の小川のおとぞ涼しき

俊惠法師

岩間もる淸水を宿にせきとめてほかより夏をすごしつるかな

顯昭法師

さらぬだに光すずしき夏の夜の月をしみづにやどしつるかな（てぞみるイ）

泉邊納涼といへる心をよめる　法眼實快

せきとむる山下水にみがくれてすみけるものを秋のけしきは

哀にもみさをにもゆる螢かな聲たてつべきこの世とおもふに
あさりせし水のみさびに閉ぢられてひしの浮葉に蛙なくなり
水草隔船といへる心をよみ侍りける　法性寺入道前太政大臣
夏ふかみ玉江にしげる葦の葉のそよぐや船のかよふなるらむ
百首の歌の中に鵜川の心をよませ給うける　崇德院御製
早瀨川みをさかのぼる鵜飼舟まづこの世にもいかがくるしき
撫子の花のさかりなりけるを見てよめる　和泉式部
見るになほこの世の物とおぼえぬは唐撫子の花にぞありける
松下逐涼といへる心をよみ侍りける　中務卿具平親王
とこなつの花もわすれて秋風をまつの蔭にて今日はくれぬる
氷室をよみ侍りける　仁和寺後入道法親王覺性
春秋ものちのかたみはなきものを氷室ぞ冬のなごりなりける

權中納言俊忠中將に侍りける時歌合し侍りける
に照射の歌とてよめる　藤原顯綱朝臣
五月やみしげき端山にたつ鹿はともしにのみぞ人にしらるる
ともしの歌とてよめる　大藏卿行宗
ともしするほぐしの松もももえつきて歸るに迷ふしもつ闇かな
讀人しらず
山ふかみほぐしの松はつきぬれど鹿におもひは猶かくるかな
賀茂重保
ともしする火串(ほぐし)を妻と思へばやあひ見て鹿の身をこがすらむ
百首の歌奉りける時螢の歌とてよめる　藤原季通朝臣
昔わがあつめし物をおもひ出でてみなれがほにも來る螢かな
題しらず　源俊頼朝臣

古をこひつつひとり越えくればなきあふ山のほととぎすかな

瞻西上人雲居寺の房にて未飽郭公といへる心をよみ侍りける　源俊頼朝臣

などてかく思ひそめけむほととぎす雪のみ山の法のこゑかは

堀河院の御時きさいの宮にて閏五月郭公といへる心をよみ侍りける　權中納言俊忠

さつきやみふたむらやまの郭公みねつづきなく聲をきくかな

同じ御時百首の歌奉りける時照射の心をよみ侍りける　前中納言匡房

照射する宮城が原のした露にしのぶもぢずりかわくまぞなき　修理大夫顯季

五月やみさやまの峯にともす火はくもの絶間の星かとぞ見る

るに五月雨の心をよめる　源行頼朝臣

五月雨に室のやしまを見わたせば煙はなみのうへよりぞ立つ

旅泊五月雨といへる心をよめる　源仲正

五月雨はとまの雫にそで濡れてあなしほとけ(たれイ)の波のうきねや

月前郭公といへる心をよめる　賀茂成保

五月雨のくものたえまに月さして山ほとゝぎす空になくなり

雨中郭公といへる心をよみ侍りける　按察使資賢

をちかへり濡るともきなけ郭公いまいくかかはさみだれの空

關路郭公といへる心をよめる　中納言師時

あふ坂のやまほとゝぎす名のるなり關もる神や空にとふらむ

後一條院の御八講に菩提樹院に參りて侍りける

に神樂岡にて郭公の鳴きければよめる　律師慶暹

五月雨に淺澤沼のはなかつみかつ見るままにかくれゆくかな　左京大夫顯輔

崇德院に百首の歌奉りける時よめる

五月雨に日數へぬれば刈りつみし閑野の小菅くちやしぬらむ　前參議親隆

五月雨は水の水嵩や增るらしみをのしるしも見えずなり行く　皇太后宮大夫俊成

五月雨はたく藻の烟うちしめりしほたれまさる須磨のうら人　藤原淸輔朝臣

時しもあれ水の水菰をかりあげて乾さでくたしつ五月雨の空　待賢門院安藝

五月雨はあまのもしほ木朽ちにけり浦邊に煙たえてほど經ぬ

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけ

百首の歌めしける時花橘の歌とてよませ給うけ
る
崇德院御製

五月雨に花たちばなのかをる夜は月すむ秋もさもあらばあれ

題しらず
無品親王輔仁

五月雨におもひこそやれいにしへの草の庵の夜半のさびしさ

堀河院の御時百首の歌奉りける時五月雨の歌と
てよめる
藤原基俊

いとどしくしづの庵のいぶせきにうの花くたし五月雨ぞ降る

源俊頼朝臣

おぼつかないつか晴るべきわび人のおもふ心や五月雨のそら

中院入道左大臣中將に侍りける時歌合し侍りけ
るに五月雨の歌とてよめる
藤原顯仲朝臣

軒ちかく今日しもきなく郭公ねをやあやめに添へてふくらむ

後朱雀院の御時長久二年五月一品内親王の歌合
に花橘をよめる　　　　皇太后宮の五節（枇杷皇太后宮イ）

たゞならぬはな橘のにほひかなよそふる袖はたれとなけれど

題しらず　　　　　　　藤原もとゝし

風にちる花たちばなに袖しめて我が思ふ妹がたまくらにせむ

　　　　　　　　　　　藤原家基

うき雲のいさよふよひの村雨におひ風しるくにほふたちばな

　　　　　　　　　　　左大辨親宗

我がやどの花たちばなに吹く風をたが里よりとたれ（がイ）眺むらむ

花橘薫枕といへる心をよめる　　藤原公衡朝臣

をりしもあれ花たちばなのかをるかな昔をみつるゆめの枕に

すぎぬるか夜半のねざめのほとゝぎす聲は枕にある心地して

右大將實房中將に侍りける時十五首の歌よませ侍りけるによめる　道因法師

夜を重ね寐ぬより外にほとゝぎすいかに待ちてか一聲は聞く

郭公をよみ侍りける　權中納言長方

こゝろをぞつくしはてつる郭公ほのめくよひのむらさめの空

久我内大臣の家にて旅宿菖蒲といへる心をよめる　前中納言雅頼

都人ひきなつくしそあやめ草かりねのとこのまくらばかりは

菖蒲の歌とてよみ侍りける　攝政前右大臣

五月雨にぬれぬれひかむ菖蒲草ぬまの岩がきなみもこそ越せ

内大臣良通

右大臣に侍りける時家に百首の歌よませ侍りけるに郭公の歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

おもふことなき身ならずば郭公夢に聞く夜もあらましものを

曉聞郭公といへる心をよみ侍りける

右大臣

ほとゝぎす鳴きつるかたを眺むれば唯ありあけの月ぞ殘れる

郭公の歌とてよめる

權大納言實國

なごりなく過ぎぬなるかな郭公こぞかたらひし宿としらずや

權大納言宗家

夕月夜いるさのやまの木隱(こがくれ)にほのかに名のるほとゝぎすかな

前左衞門督公光

ほとゝぎす聞きもわかれぬ一聲によもの空をも眺めつるかな

攝政右大臣の時の歌合に郭公の歌とて

皇太后宮大夫俊成

覺盛法師

またで聞くひとにとはばや郭公さても初音や（のイ）うれしかるらむ

崇德院に百首の歌奉りける時よめる　前參議教長

尋ねても聞くべきものを郭公ひとだのめなる夜半のひとこゑ

遠聞郭公といふ心を　權大納言實家

思ひやる心もつきぬほととぎす雲のいくへのほかに鳴くらむ

暮天郭公といへる心をよみ侍りける　仁和寺法親王守覺

ほととぎすなほ初聲をしのぶやま夕ゐる雲のそこに鳴くなり

郭公の歌とてよめる　藤原清輔朝臣

かざごしをゆふ越えくれば郭公ふもとの雲のそこになくなり

從三位賴政

一聲はさやかに鳴きてほととぎす雲路はるかに遠ざかるなり

郭公まつはひさしき夏の夜をねぬに明けぬとたれかいひけむ

修理大夫顯季歌合し侍りけるに郭公をよめる　藤原道經

ふた聲ときかでや止まむ郭公まつにねぬ夜のかずはつもりて

郭公の歌とてよめる　賀茂重保

郭公しのぶるほどはやまびこのこたふる聲もほのかにぞするきくイ

山寺にこもりて侍りけるに郭公のなかざりければよめる　道命法師

あやしきは待つ人からか郭公なかぬにさへも濡るるそでかな

題しらず　康資王母

寐ざめするたよりにきけば郭公つらき人をも待つべかりけり

刑部卿頼輔母

郭公又もやなくと待たれつつ聞く夜しもこそ寐られざりけれ

うのはなのかきねとのみや思はまし賤のふせやに煙たたずば

山里にこれかれまかりて歌よみ侍りけるに野草をよめる　藤原定通

焼きすてしふる野のを野のま葛原玉まくばかりなりにける哉

堀河院の御時百首の歌奉りける時あふひをよめる　藤原もとevsし

あふひ草照る日はかみの心かは影さすかたにまづなびくらむ

賀茂の齋院おり給ひて後祭の御生の日人の葵を奉りけるに書きつけられて侍りける　前齋院式子内親王

神山のふもとになれしあふひ草ひきわかれても年ぞへにける

仁和寺のみこの許にて郭公の歌五首よみ侍りける時よめる　按察使公通

卯花をよめる　左京大夫顯輔

むらむらに咲けるかきねの卯花は木の間の月の心地こそすれ

暮見卯花といへる心をよみ侍りける　右近大將實房

ゆふ月夜ほのめくかげも卯花のさける垣根はさやけかりけり

卯花の歌とてよみ侍りける　仁和寺入道法親王

玉川とおとにききしは卯花を（のイ）露のかざれる名にこそありけれ

白河院鳥羽殿におはしましける時をのこども歌合し侍りけるに卯花をよめる　藤原季通朝臣

見ですぐる人しなければうの花のさけるかきねやしら河の關

遠村卯花といへる心をよめる　賀茂政平

うの花のよそめなりけり山ざとのかきねばかりに降れる白雪

卯花藏宅といへる事をよめる　藤原敦經朝臣

千載和歌集 卷第三

夏歌

堀河院の御時百首の歌奉りける時更衣（ころもがへ）のこころをよみ侍りける

前中納言匡房

夏衣はなのたもとに脱ぎかへて春のかたみもとまらざりけり

藤原基俊

今朝かふるせみの羽衣きて見れば袂に夏はたつにぞありける

崇德院に百首の歌奉りける時夏のはじめの歌とてよめる

藤原實清朝臣

あかでゆく春のわかれにいにしへの人やう月といひ初めけむ

海路三月盡といへる心をよめる　前大僧正覺忠

惜めどもかひもなぎさに春くれて波とともにぞたち別れぬる

堀河院の御時百首の歌奉りける時春の暮の心をよめる　前中納言匡房

つねよりも今日のくるるを惜むかないま幾度の春としらねば

前齋宮河内

けふ暮れぬ花の散りしもかくぞありし二度春はものを思ふよ

幾返り今日に我身の逢ひぬらむ惜しきは春の暮（過ぐイ）るるのみかは

源仲綱

身のうさも花見しほどは忘られき春のわかれを歎くのみかは

藤原經家朝臣

いづかたと春のゆくへは知らねども惜む心のさきに立つらむ

行路三月盡といへる心をよめる

琳賢法師

もろともにおなじ都は出でしかどつひにも春に別れぬるかな

三月盡の日皇太后宮大夫俊成の許によみて遣しける

法印靜賢

花はみなよもの嵐にさそはれてひとりや春のけふは行くらむ

閏三月盡によみ侍りける

權大僧都範玄

花の春重（かさな）るかひぞなかりける散らぬ日數のそはばこそあらめ

百首の歌めしけるとき暮の春の心をよませたまうける　崇徳院御製

花は根にとりは古巣にがへるなり春のとまりを知る人ぞなき

三月のつごもりによみ侍りける　中務卿具平のみこ

命あらばまたもあひみむ春なれど忍び難くてくらす今日かな

式子内親王

ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮のそら

百首の歌奉りける時暮の春の心をよみ侍りける　大納言隆季

くれてゆく春はのこりも無きものを惜む心のつきせざるらむ

三月盡の心をよみ侍りける　久我内大臣

入日さす山の端さへぞ恨めしきくれずば春のかへらましやは

藤原定成

山吹の花のつまとは聞かねども移ろふなべに鳴くかはづかな
　土御門右大臣の家に歌合しける時藤花をよめる　康資王母
いづかたににほひますらむ藤のはな春と夏との岸をへだてて
　永承六年内裏の歌合に藤花をよみ侍りける　中納言祐家
九重にさけるを見れば藤のはな濃きむらさきの雲ぞ立ちける
　百首の歌奉りける時よみ侍りける　大炊御門右大臣
年ふれどかはらぬ松をたのみてやかかりそめけむ池の藤なみ
　やよひのつごもりの比白河殿に御かたたがへの
　行幸ありける夜春殘二日といへる心をうへのを
　のこどもつかうまつりけるついでによませ給う
　ける　二條院御製
われもまた春と共にや歸らましあすばかりをばここに暮して

やまぶきの花咲きにけり蛙なく井手のさと人いまやとはまし　　藤原基俊

堀河院の御時肥後が家によき山吹ありときこしめしてめしければ奉るとて結びつけ侍りける　　二條太皇太后宮肥後

九重にやへ山吹をうつしては井手のかはづのこころをぞくむ

水邊山吹といへる心をよめる　　藤原範綱

吉野川岸のやまぶき咲きぬれば底にぞふかきいろは見えける　　藤原定經

くちなしの色にぞすめる山吹のはなの下ゆく井手のかはみづ

山吹をよめる　　惟宗廣言

いかなれば春をかさねて見つれども八重にのみさく山吹の花

百首の歌奉りける時やまぶきの歌とてよめる　　藤原清輔朝臣

藤原季通朝臣

心なきわが身なれども津の國の難波の春にたへずもあるかな

堀河院の御時の百首のうち（歌の中にイ）呼子鳥をよめる　前中納言匡房

思ふことちえにやしげき呼子鳥しのだの森のかたに鳴くなり

おなじ百首のときすみれをよめる　中納言國信

今宵寐てつみてかへらむ菫さく小野のしばふは（にイ）露しげくとも

修理大夫顯季

雉子（きぎす）なくいはたの小野のつぼ菫しめさすばかりなりにける哉

嘉承二年后の宮の歌合に菫をよめる　源顯國朝臣

道遠みいり野のはらのつぼすみれ春のかたみにつみて歸らむ

堀河院の御時の百首の（歌奉りける時イ）うち欵冬をよめる　前中納言匡房

春ふかみ井手のかは水かげ添はばいくへか見えむ山吹のはな

山家落花といへる心をよめる　　前大納言俊實

花のみな散りてののちぞ山里のはらはぬ庭は見るべかりける

花落客稀といへる心をよめる　　藤原基俊

故鄕は花こそいとど忍ばるれ散りぬるのちは訪ふひともなし

みちの國にまかりける時なこその關にて花の散りければよめる　　源義家朝臣

吹く風をなこそのせきとおもへども道もせに散るやま櫻かな

小野の氷室山のかたに殘りの花尋ね侍りける日僧都證觀が坊にてこれかれ歌よみけるによめる　　源仲正

したさゆるひむろの山のおそ櫻きえのこりける雪かとぞ見る

百首の歌奉りける時春の歌とてよめる　　前參議親隆

鏡山ひかりは花の見せければちりつみてこそさびしかりけれ

道因法師

散る花を身にかふばかり思へどもかなはで年の老いにける哉

覺盛法師

あかなくに散りぬる花のおもかげや風にしられぬ櫻なるらむ

源仲綱

山ざくら散るを見てこそおもひ知れたづねぬ人は心ありけり

花の散るを見てよみ侍りける　道命法師

よそにてぞ聞くべかりける櫻花目のまへにても散らしつる哉

池に櫻のちるを見てよみ侍りける　能因法師

櫻ちるみづの面にはせきとむる花のしがらみ掛くべかりけり

花浮澗水といへる心をよみ侍りける　花園左大臣

山風にちりつむ花しながれずば如何で知らましたにがは［のしたイ］の水

櫻さく比良の山かぜ吹くままに花になりゆく志賀のうらなみ
花留客といへる心をよみ侍りける　右近大將實房
ちりかかる花の錦は著たれどもかへらむことぞ忘られにける
落花の心をよめる　權大納言實國
あかなくに袖につつめば散る花の嬉しと思ふになりぬべき哉
久我内大臣の家にて身にかへて花を惜むといへる心をよめる　權中納言通親
櫻花憂身にかふるためしあらば生きて散るをば惜まざらまし
花の歌とてよめる　俊惠法師
み吉野のやましたかぜやはらふらむ梢にかかるはなのしらゆき
源有房
一枝は折りてかへらむ山ざくら風にのみやは散らしはつべき

堀河院の御時百首の歌奉りける時櫻をよめる　前中納言匡房

山櫻ちぢに心のくだくるは散るはなごとに添ふにやあるらむ

藤原仲實朝臣

はなのちる木のしたかげはおのづから染めぬ櫻の衣をぞきる

藤原基俊

春をへて花ちらましやおくやまの風を櫻のこころとおもはば

崇德院の御時十五首の歌奉りける時花の歌とて

よみ侍りける　右兵衞督公行

あらしふく志賀の山邊のさくら花ちれば雲井はささ波ぞたつ

百首の歌奉りける時よめる　前參議親隆

春風に志賀のやまごえ花ちればみねにぞ浦のなみは立ちける

花の歌とてよみ侍りける　左近中將良經

白雲とみねには見えて櫻ばな散ればふもとの雪にぞありける

百首の歌たてまつりける時花の歌とて　藤原季通朝臣

吉野やま花はなかばに散りにけりたえだえ殘るみねのしら雲

寛治八年さきのおほきおほいまうち君の高陽院の家の歌合に櫻をよめる　周防内侍

やま櫻をしむ心のいくたびか散るこのもとに行きかへるらむ

後朱雀院の御時うへのをのこどもひんがし山の花見侍りけるに雨のふりにければ白河殿にとまりておのおの歌よみ侍りけるによみ侍りける　大納言長家

春雨にちる花見ればかきくらしみぞれし空のここちこそすれ

落花滿山路といへる心をよめる　赤染衞門

踏めばをし踏までは行かむ方もなしこころづくしの山櫻かな

千載和歌集　卷第二

春歌下

鳥羽殿（院イ）におはしましけるころ常見花といへる心ををのこどもつかうまつりけるついでによませ給うける

白河院御製

咲きしより散るまで見れば木の下（もと）に花も日數も積りぬるかな

みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給へりけるころ池上花といへる心をよませ給うける

院御製

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

山の花の心をよみ侍りける

大宮前太政大臣

百首の歌奉りける時よみ侍りける　　待賢門院堀河

白雲とみねのさくらは見ゆれども月のひかりは隔てざりけり

上西門院兵衛

花の色に光さしそふはるの夜ぞ木の間の月は見るべかりける

歌合し侍りける時花の歌とてよめる　　太宰大貳重家

をはつ瀬の花のさかりを見わたせば霞にまがふみねのしら雲

藤原範綱

さゝなみやながらのやまの嶺つゞき見せばや人にはなの盛を

十首の歌人々によませ侍りける時花の歌とてよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

み吉野の花のさかりをけふ見ればこしのしらねに春風ぞ吹く

ささなみやしがの都はあれにしを昔ながらのやまざくらかな

日吉のやしろの歌合とて人々よみ侍りける時よめる

祝部宿禰成仲

ささなみや志賀の花園見るたびに昔のひとのこころをぞ知る

花の歌とてよめる

賀茂成保

たかさごのをのへの櫻さきぬれば梢にかかるおきつしらなみ

圓位法師

おしなべて花のさかりになりにけり山の端ごとにかかる白雲

藤原爲業

吉野山はなのさかりになりにけり絶ゆるときなき峯のしら雲

毎春花芳といへる心をよめる

源仲正

春をへてにほひを添ふるやま櫻はなは老こそさかりなりけれ

尋花日暮れぬといへる心をよめる　源俊頼朝臣

暮れはてぬかへさは送れ山櫻たがために來てまどふとか知る

花の歌とてよめる　道因法師

花ゆゑにしらぬ山路はなけれどもまどふははるの心なりけり

賀茂の社の歌合とて人々よみ侍りける時花の歌とてよめる　藤原公時朝臣

年を經ておなじさくらの花の色を染めますものは心なりけり　藤原公衡朝臣

花ざかりよもの山邊にあくがれてはるは心の身にそはぬかな

春日の社の歌合とて人々よみ侍りける時よめる　顯昭法師

吉野川みかさはさしもまさらじを青根を越すやはなのしら波

故郷花といへる心をよみ侍りける　讀人しらず

十首の歌人のよませ侍りけるとき花の歌とて　前左衛門督公光

みな人のこころにそむる櫻花いくしほとしにいろまさるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時花の歌とてよめる　左京大夫顯輔

かつらぎやたかまの山の櫻花くもゐのよそに見てや過ぎなむ

前參議教長

山櫻かすみこめたるありかをばつらきものから風ぞしらする

藤原淸輔朝臣

神がきのみむろの山は春きてぞ花のしらゆふかけて見えける

夜思山花といへる心を　仁和寺後入道法親王覺性

夜もすがら花のにほひを思ひやるこころや嶺に旅寐しつらむ

尋深山花といへる心をよみ侍りける　攝政前右大臣

咲きぬやとしらぬ山路に尋ね入る我をば花のしをるなりけり

京極の家にて十種供養し侍りける時白河院御幸せさせ給ひて又の日歌奉らせ給うけるによみ侍りける

京極前太政大臣

櫻ばなおほくの春にあひぬれど昨日けふをやかぎり(ためし イ)にはせむ

後二條關白内大臣

花ざかり春のやまべを見わたせば空さへにほふ心地こそすれ

右衞門督基忠

咲きにほふ花のあたりは春ながら絶えせぬ宿のみ雪とぞ見る

毎朝見花といへる心をよみ侍りける

中院右大臣

尋ねきて手折るさくらの朝露に花のたもとの濡れぬ日はなし(ぞなき イ)

東山に花見侍りける日よみ侍りける

右大臣

かりにだに厭ふ心やなからまし散らぬ花さくこの世なりせば

徳大寺左大臣

よろづよの花のためしやけふならむ昔もかかる春しなければ

近衛殿に渡らせ給うて歸らせ給ひける日遠尋山
花といへる心をよませ給うける　崇徳院御製

尋ねつる花のあたりになりにけりにほふにしるし春のやま風

法性寺入道前太政大臣

歸るさをいそがぬほどの道ならばのどかに峯の花は見てまし

寛治八年さきのおほきおほいまうち君の高陽院
の家の歌合に櫻の歌とて　中納言女王

山櫻にほふあたりのはるがすみ風をばよそに立ちへだて（つらイ）なむ

藤原顯綱朝臣

花ゆゑにかからぬ山ぞなかりける心ははるのかすみならねど

崇徳院に百首の歌奉りける時春の歌とてよめる　藤原季通朝臣

春はなほ花のにほひもさもあらばあれただ身にしむは曙の空

百首の歌めしける時春の歌とてよませ給うける　崇徳院御製

あさゆふに花まつ程は思ひねの夢のうちにぞ咲きはじめける

待賢門院堀河

いづかたに花咲きぬらむと思ふよりよもの山邊にちる心かな

白河院花御らんじにおはしましけるに召なかりければよみて奉り侍りける　京極前太政大臣

山櫻たづぬと聞くにさそはれぬ老のこころのあくがるるかな

鳥羽院位おりさせ給うて後白河に御幸ありて花御らんじける日よみ侍りける　花園左大臣

かげきよき花のかがみと見ゆる哉のどかに澄めるしら河の水

崇德院に百首の歌奉りける時春駒の歌とてよめる

藤原淸輔朝臣

みこもりにあしの若葉やもえつらむ玉江のぬまをあさる春駒

堀河院の御時百首の歌のうち歸雁のうたとてよめる

源俊賴朝臣

春くればたのむの雁もいまはとてかへる雲路に思ひたつなり

歸雁の心をよみ侍りける

左近中將良經

ながむれば霞めるそらの浮雲とひとつになりぬ歸るかりがね

從三位賴政

天つ空ひとつに見ゆるこしの海の波をわけてもかへる雁がね

祝部宿禰成仲

かへる雁いく雲井ともしらねども心ばかりをたぐへてぞやる

に結びつけて皇太后宮大夫俊成の許に遣し侍りける
大納言定房
昔よりちらさぬやどの梅の花わくるこころはいろに見ゆらむ
堀河院の御時百首の歌奉りける時春雨の心をよめる
前中納言匡房
よも山にこのめはる雨降りぬればかぞいろはとや花の頼まむ（もイ）
藤原基俊
春雨のふりそめしより片岡のすそ野のはらぞあさみどりなる
題しらず
和泉式部
つれづれとふるは（れば イ）涙のあめなるを春のものとや人の見るらむ
堀河院の御時百首の歌の中に早蕨をよめる
藤原基俊
みやま木のかげ野の下のした蕨もえ出づれども知る人もなし

百首の歌めしける時梅の歌とてよませ給うける　崇德院御製

春の夜は吹きまふ風のうつり香に木ごとに梅と思ひけるかな

梅花夜薰といへる心をよめる　源俊頼朝臣

梅が香は己が垣根をあくがれてま屋のあまりに隙もとむなり

題しらず　右大臣

うめが香にこゑうつりせば鶯のなくひと枝は折らましものを

二品法親王

梅が枝の花に木づたふうぐひすの聲さへにほふ春のあけぼの

權大納言實家

風わたる軒端の梅にうぐひすの鳴きて木づたふ春のあけぼの

中院(なかのゐん)にありける紅梅のおろし枝遣さむなど申し

けるを又の年の二月ばかり花咲きたるおろし枝

よめる　大納言師頼

いまよりは梅さくやどは心せむ待たぬに來ます人もありけり

前中納言匡房

にほひもて分かばぞ分かむ梅の花それとも見えぬ春の夜の月

崇德院に百首の歌奉りける時よみ侍りける　大炊御門右大臣

梅の花をりてかざしにさしつれば衣におつるゆきかとぞ見る

題しらず　和泉式部

梅が香におどろかれつつ春の夜の闇こそ人はあくがらしけれ

藤原道信朝臣

さよふけて風や吹くらむ花の香の匂ふここちの空にするかな

皇太后宮大夫俊成

春の夜はのきばの梅をもる月のひかりもかをる心地こそすれ

春日野の雪を若菜につみそへて今日さへ袖のしをれぬるかな

睦月の廿日頃雪の降りて侍りける朝に家の梅を折りてとしよりの朝臣につかはしける　權中納言俊忠

咲きそむる梅の立枝に降る雪のかさなる數をとへとこそ思へ

かへし　源俊賴朝臣

梅が枝に心もゆきてかさなるを知らでや人のとへといふらむ

梅の木に雪のふりけるに鶯のなきければよめる　左京大夫顯輔

梅が枝に降りつむ雪はうぐひすの羽風にちるも花かとぞみる

永保二年二月后の宮にて梅花久薰といへる心をよみ侍りける　久我前太政大臣

かをる香の絕えせぬ春は梅の花ふきくる風やのどけかるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時梅花の歌とて

霞の歌とてよめる　刑部卿顯輔

春くれば杉のしるしも見えぬかな霞ぞたてる三輪のやまもと

左兵衛督隆房

見わたせばそことしるしの杉もなし霞のうちや三輪の山もと

百首歌奉りける時子の日の心をよめる　待賢門院堀河

ときはなる松もや春をしりぬらむはつねを祝ふ人にひかれて

家に侍りける女房(にょうばう)のもとに睦月七日前中宮の女房若菜をつかはしたりけるを聞きてつかはしける　治部卿通俊

うらやまし雪の下草かき分けてたれをとぶひの若菜なるらむ

堀河院の御時百首歌奉りけるうち若菜の歌とてよめる　源俊頼朝臣

承暦二年内裏後番の歌合に鶯をよめる　藤原顯綱朝臣

春たてばゆきのした水うちとけて谷のうぐひす今ぞなくなる

後冷泉院御時皇后宮の歌合によみ侍りける　大納言隆國

山里のかきねに春やしらるらむ霞まぬさきにうぐひすの鳴く

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時十首の歌よませ侍りけるによめる　源俊頼朝臣

烟かとむろの八島を見しほどにやがても空のかすみぬるかな

右大臣に侍りける時家に歌合し侍りけるに霞の歌とてよみ侍りける　攝政前右大臣

かすみしく春のしほぢを見わたせばみどりを分くる沖つ白波

堀河院の御時百首の歌のうち霞の歌とてよめる　前中納言匡房

わぎも子がそでふる山も春きてぞかすみの衣たちわたりける

千載和歌集　巻第一

春歌上

春たちける日よみ侍りける　源俊頼朝臣

春のくるあしたの原を見わたせば霞も今日ぞたちはじめける

堀河院御時百首歌奉りける時よめる　中納言國信

みむろやま谷にや春のたちぬらむ雪のしたみづ岩たたくなり

百首歌たてまつりける時初春の心をよめる　待賢門院堀河

雪ふかき岩のかけ道あとたゆるよし野のさとも春はきにけり

堀河院御時百首の歌奉りける時殘雪をよめる　前中納言匡房

道たゆといとひしものを山里に消ゆるは惜しきこその雪かな

つめたてまつるべき物をもうけたまはれるならし。この集かくこのたびしるしおかれぬれば、住吉の松の風久しく傳はり、玉津島の浪ながくしづかにして千々の春秋をおくり、世々の星霜をかさねざらめや。文治三の年の秋長月の中のとをかに、えらびたてまつりぬるになむありける。

の葉、錦いろいろに、玉こゑごゑなりとのみ思へれど、山の井のふかき名をから
ざること多く、難波江のあしのをかしきふしあることは難くなむありけれど、
かつはこのむ心ざしを憐み、かつは道をたやさざらむが爲めに、瓦のまど、柴の
庵の言の葉をも、見るによろしく、聞くにさかへざるをばもらす事なし。勅して
千うた二百(ふたもも)ちあまり、二十(はた)卷(まき)とせり。古より勅をうけたまはりて集を撰ぶこと、
あるひはその位たかく、或はその品下れるも、久しく此の道をまなび、ふかく其
の心をさとれるともがらは、つとめ來れる中に、松の戸ほそに遁れ、苔の袂にし
をれたるもの、これをえらべるあとなむなかりけれど、宇治山の僧喜撰といひ
けるなむ、すべらぎのみことのりをうけたまはりて、倭歌の式をつくりける。式
を作り、集を撰ぶ、かの昔のあとにより、今このなずらへあるがうへに、和歌の浦
の道にたづさひては七十(ななそぢ)のしほに過ぎ、我が　のりのすべらぎにつかへた
てまつりては、六十(むそぢ)になむあまりにければ、家々の言の葉、浦々の藻鹽草、かきあ

べき仰ごとなむありける。かの御時よりこの方、年はふたももちあまりに及び、世はとつぎあまり七世になむなりにける。過ぎにし方も年久しく、今ゆくさきも遙にとどまらむため、此の集を名づけて千載和歌集といふ。かの後拾遺集の後、同じく勅撰になずらへて撰べるところ、金葉、詞花のふたつの集あり。然れども部類ひろからず、歌の數少くして、殘れる歌多し。その外今の世までの歌をとり撰べるならし。抑この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國日の本のひろきふみの道をもまなびず、鹿の園、鷲の嶺の深き御法をさとるにしもあらず、唯假字のよそぢあまり七文字のうちを出でずして、心に思ふ事をことばにまかせていひ連ぬるならひなるが故にこそ、三十もじあまり一文字をだによみ連ねつるものは、出雲八雲の底をしのぎ、敷島やまとみことのさかひに入りすぎにたりとのみ思へるなるべし（らしイ）。しかはあれども、まことには鑽ればいよいよ堅く、仰げば彌高きものは、このやまと歌の道になむありける。春の林の花、秋の山の木

ふとなづけし年より、もゝしきの古きあとをば、紫の庭、玉の臺、千年ひさしかるべきみぎりと磨きおき給ひ、藐姑射の山のしづかなるすみかをば、青き谷、菊の水、よろづ代すむべき境としめ定め給ふ。かれこれおし合せて、みそぢあまり三かへりの春秋になむなりにける。あまねき御うつくしみ、秋津島のほかまで及び、廣き御惠、春の園の花よりもかうばし。近うなれつかうまつり、遠くきゝ傳ふるたぐひまで、事にふれ折にのぞみて、むなしくすぐさぬ情おほし。春の花のあした、秋の月の夕、おもひをのべ、心をうごかさずといふことなし。ある時には糸竹の聲しらべをとゝのへ、あるときはやまともろこしの歌ことばをあらそふ。敷島の道もさかりにおこりて、心の泉古よりも深く、詞の林昔よりもしげし。こゝに今の世の道をこのむともがらの言の葉をもきこしめし、昔の時のをりにつけたる人の心をも見そなはさむ事によりて、後拾遺集に撰び殘されたる歌、かみ正暦のころほひより、下文治の今に至るまでのやまとうたを、えらび奉る

千載和歌集序

やまとみこと歌は、ちはやぶる神代よりはじまりて、ならの葉の名におふ宮にひろまれり。玉しきたひらの都にしては、延喜の聖の御代には古今集を撰ばれ、天暦のかしこき御時には後撰集をあつめ給ひ、白河の御代には後拾遺を勅せしめ、堀河の先帝はももぢの歌を奉らしめ給へり。おほよそこのことわざ、我が世の風俗として、これを好みもてあそべば、名を世々に殘し、これを學びたづさはらざるは、おもてを墻にしてたてらむが如し。かかりければ、此の世に生れ、我が國にきたりと來たる人は、たかきもくだれるも、この歌をよまざるはすくなし。聖德太子は片岡山の御ことをのべ、傳敎大師は我がたつ杣の言の葉をのこせり。よりて世々の御門もこの道をばすて給はざるをや。ただし、又集を撰び給ふあとは、猶まれになむありける。我が君世をしろしめして、保ちはじめ給

よそになど佛のみちをたづねけむ我が心こそしるべなりけれ

左京大夫顯輔

いかでわが心の月をあらはしてやみにまどへる人をてらさむ

常在靈鷲山の心をよめる

登蓮法師

世のなかの人のこころの浮雲にそらがくれするありあけの月

詞花和歌集終

の事ことわり給へといなりにこもりて祈り申しける法師の夢に社の中よりいひ出し給ひける歌

長きよの苦しきことを思へかしなに歎くらむかりのやどりを

賀茂のいつきときこえける時に西にむかひてよめる

選子内親王

思へどもいむとていはぬ事なれば其方に向きて音をのみぞなく

信解品周流諸國五十餘年といふ心を

神祇伯顯仲

あくがるる身のはかなさは百年の半過ぎてぞおもひ知らるる

即身成佛といふ事をよめる

讀人しらず

露の身のきえて佛になることはつとめて後ぞ知るべかりける

舍利講のつひでに願成佛道の心を人々によませ侍りけるによめる

關白前太政大臣

はしましければよめる　藤原有信朝臣

涙のみ袂にかかる世のなかに身さへ朽ちぬることぞかなしき

をとこにおくれてよめる　讀人しらず

をりをりのつらさを何に歎きけむ軈なきよもあればありけり

人の四十九日の誦經文にかきつけける

人をとふかねの聲こそ哀なれいつか我が身にならむとすらむ

にひまゐりして侍りける女のまへゆるされて後程なく身まかりにければ　四條中宮

悔しくも見初めける哉なべて世の哀とばかり聞かましものを

いなりのとりゐに書きつけて侍りける　讀人しらず

かくてのみよにありあけの月ならば雲かくしてよ天くだる神

おやの所分をゆゑなく人におしとられけるをこ

今日よりは天の川霧たちわかれ如何なる空にあはむとすらむ

かへし　　　讀人しらず

七夕はのちの今日をもたのむらむ心ぼそきはわが身なりけり

むすめにおくれて服著はべるとてよめる　　　神祇伯顯仲

あさましや君にきすべき墨染のころもの袖をわれぬらすかな

大江匡衡身まかりて又の年の春花を見てよめる　　　赤染衞門

こぞの春ちりにし花も咲きにけりあはれ別のかからましかば

左兵衞督公行妻におくれて侍りける頃女房につけて申さする事侍りける御返しによませ給ひける　　　新院御製

いづる息いるを待つ間も難き世を思ひしるらん袖はいかにぞ

後冷泉院御時藏人にて侍りけるに御門かくれお

たによませ給ひける　圓融院御製
おもひかねながめしかども鳥部山はては烟も見えずなりにき
一條攝政身まかりにける頃よめる　少將義孝
ゆふまぐれ木茂き庭をながめつつ木の葉とともに落つる涙か
子のおもひに侍りけるころ人のとひて侍りけれ
ばよめる　待賢門院安藝
人しれず物思ふをりもありしかどこの事ばかり戀しきはなし
兼盛子におくれて歎くと聞きていひ遣しける　淸原元輔
おひたたで枯れぬと聞きしこの本のいかで嘆きの森となるらん
天曆のみかどかくれおはしまして七月七日御忌
果ててちりぢりにまかり出でけるに女房の中に
おくり侍りける

昔見したる井の水はかはらねどうつれるかげぞ年をへにける

帥前内大臣はりまへまかりけるともにて川じり
をいづる日よめる　　大江正言

思ひ出もなきふる里の山なれど隱れ行くはたあはれなりけり

三條太政大臣身まかりて後月をみてよめる　　前大納言公任

いにしへを戀ふる涙にくらされておぼろに見ゆる秋の夜の月

むすめにおくれて歎き侍りける人に月のあかか
りける夜いひつかはしける　　堀河右大臣

その事と思はぬだにもあるものを何ごこちして月を見るらむ

あはたの右大臣身まかりにける頃よめる　　藤原相如

夢ならで又も逢ふべき君ならば寐られぬいをも歎かざらまし

堀河の中宮かくれ給ひてわざの事はててのあし

水上のさだめてければきみが代にふたたびすめる堀河のみづ

有馬の湯にまかりたりけるによめる　宇治前太政大臣

いざやまたつづきも知らぬ高嶺にてまづくる人に都をぞ問ふ

熊野へまうでけるみちにて月をみてよめる　道命法師

都にてながめし月のもろともに旅のそらにも出でにけるかな

はりまに侍りける時月を見てよめる　帥前内大臣

都にてながめし月をみるときは旅のそらともおぼえざりけり

信濃守にてくだりけるに風越のみねにてよめる　藤原家經朝臣

かざこしの峯の上にて見るときは雲は麓のものにぞありける

藤原頼任朝臣美濃守にて下り侍りける供にまかりてその後年月をへてかの國の守に成りてくだり侍るとて垂井といふいづみを見てよめる　藤原隆經朝臣

よませ給ひけるによめる

わたの原こぎ出でてみれば久方の雲井にまがふおきつしら波

後冷泉院御時大嘗會主基方御屛風に備中國高倉山にあまたの人花摘みたるかたかきたる所によめる

藤原家經朝臣

うちむれて高くら山につむものはあらたなる世のとみ草の花

今上大嘗會悠紀方御屛風に近江國板倉の山田に稻をおほく刈りつめりこれを人見たるかたかきたる所をよめる

左京大夫顯輔

板くらの山田につめるいねを見て治れる世のほどを知るかな

圓融院御時堀河院に二たび行幸せさせ給ひけるによめる

曾禰好忠

新院位におはしましける時うへのをのこどもをめして述懷の歌よませ給ひけるに白河院の御事
忘るる時なくおぼえ侍りければ　大納言成通
白河のながれをたのむこころをば誰かは空にくみて知るべき

堀河院御時百首歌奉りける中に　大藏卿匡房
百とせの花にやどりて過してきこのよは蝶の夢にぞありける

むすめのさうし書かせけるおくに書きつけける　源義國妻
木の下にかき集めたる言の葉をははその杜のかたみとは見よ

左京大夫顯輔近江守に侍りける時とほきこほりにまかりけるに便につけていひ遣しける　關白前太政大臣
思ひかねそなたのそらをながむればただ山の端にかかる白雲

新院位におはしましし時海上遠望といふことを

遠江にきりかへて侍りければいひ遣しける　太皇太后宮肥後

筑波山ふかくうれしとおもふかな濱名の橋にわたすこころを
下﨟にこえられて堀河關白のもとに侍りける人のもとへおとどにも見せよとおぼしくてつかはしける　大中臣能宣朝臣

年をへて星をいただく黑髮のひとよりしもになりにけるかな
堀（イ）白河院位におはしましける時修理大夫顯季につけて申さする事侍りけるを宣旨のおそく下りければその冬ごろいひつかはしける　津守國基

雲の上は月こそさやに冴え渡れまだとどこほるものや何なるかへし　修理大夫顯季

とどこほることはなけれど住吉のまつ心にやひさしかるらむ

涙がはその水上をたづぬれば世のうきめより出づるなりけり

この集撰ぶとて家集こひて侍りければよめる　太政大臣

思ひやれ心のみづのあさければかきながすべき言の葉もなし

周防内侍あまになりぬと聞きていひ遣しける　大藏卿匡房

かりそめの浮世の闇をかき分けてうらやましくも出づる月哉

法師になりてのち左京大夫顯輔が家にて歸雁を

よめる　沙彌蓮寂

歸る雁西へゆきせばたまづさに思ふことをば書きつけてまし

題しらず　讀人しらず

身をすつる人は誠にすつるかは捨てぬ人こそすつるなりけれ

藤原實宗常陸の介に侍りける時大藏省のつかひ

ども嚴しくせめければ匡房にいひて侍りければ

この世にはまたも見るまじ梅の花ちりぢりならむ事ぞ悲しき
その後程なく身まかりにけるとぞ
人の四位をとらせて侍りければ　讀人しらず
此身をば空しき物と知りぬればつみえむ事もあらじとぞ思ふ
題しらず　増基法師
我が思ふ事のしげきにくらぶればしのだの森の千枝は物かは
大江以言
網代には沈む水屑もなかりけり宇治のわたりに我やすままし
大原に住みはじめけるころ俊綱朝臣のもとへい
ひつかはしける　良暹法師
大はらやまだすみがまもならはねば我が宿のみぞ烟たえける
題しらず　賢智法師

いとくらくなりければよめる　　神祇伯顯仲

このよだに月まつほどは苦しきにあはれいかなる闇に惑はむ

病おもくなり侍りけるころ雪のふるを見てよめる　　良暹法師

覺束なまだ見ぬみちをしでの山雪ふみわけて越えむとすらむ

大江擧周の朝臣おもくわづらひてかぎりに見え侍りければよめる　　赤染衛門

かはらむといのる命はをしからでさても別れむことぞ悲しき

病重くなり侍りければ三井寺へまかりて京の坊にうゑおきて侍りける八重紅梅を今は花咲きぬらむ見ばやといひ侍りければ折りにつかはして見せければよめる　　大僧正行尊

よそに見し尾花が末の白露はあるかなきかの我が身なりけり

世の中はかなくおぼえさせ給ひけるころよませ
たまひける　花山院御製

かくしつつ今はとならむ時にこそ悔しき事のかひもなからめ

いりあひの鐘の聲を聞きてよめる　和泉式部

夕暮はものぞ戀しき鐘の音をあすも聞くべき身とし知らねば

大納言忠教身まかりける後の春鶯の鳴くを聞き
てよめる　藤原教良母

鶯のなくになみだの落つるかなまたもや春にあはむとすらむ（おもへばイ）

はかなき事のみおほく聞えけるころよめる　法橋清昭

皆人の昔がたりになり行くをいつまでよそに聞かむとすらむ

夏の夜はしに出でゐてすずみ侍りけるに夕闇の

新院六條殿におはしましける時月あかくはべりける夜御船にめして月前言志といふ事をよませ給ひけるによめる　　右近中將教長

三日月のまた有明になりぬるや浮世をめぐるためしなるらむ

櫻花のちるを見てよめる　　藤原實方朝臣

散る花に又もやあはむおぼつかな其春までと知らぬ身なれば

世の中さわがしくきこえける比よめる　　增基法師

朝な朝な鹿のしがらむ萩が枝のすゑ葉の露のありがたの世や

秋の野をすぎまかりけるに尾花の風になびくを見てよめる　　源親元

花薄招かばここにとまりなむいづれの野邊もつひのすみかぞ

心地れいならずおぼされける頃よみ給ひける　　四條中宮

詞花和歌集 巻第十

雜 下

みやこに住み佗びてあふみにたなかみといふ所にまかりてよめる　源俊頼朝臣

葦火たくまやの栖(すみか)は世の中をあくがれ出づる(そむろイ)かどでなりけり

女どもの澤に若菜摘むを見てよめる

しづのめがゑぐ摘む澤の薄氷いつまでふべき我が身なるらむ

四位して殿上おりて侍りけるころ鶴鳴皐といふことをよめる　藤原公重朝臣

昔見し雲井をこひてあしたづの澤邊になくや我が身なるらむ

厭ひてもなほ惜まるるわが身かな二度くべきこの世ならねば

神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍るとて寄月述懷と
いふ事をよみてといひ侍りければ遣しける　左京大夫顯輔

難波江の蘆間に宿る月みれば我が身ひとつもしづまざりけり

堀河院の御時百首歌奉りけるによめる　　大納言師頼

身のうさは過ぎぬる（にしィ）方を思ふにもいま（なほィ）行末のことぞかなしき

大藏卿匡房

埋木のしたは朽つれどいにしへの花のこころは忘れざりけり

題しらず　　大納言伊通

今はただむかしぞ常（更ィ）に戀ひらるる殘ありしをおもひでにして

小野宮右大臣のもとにまかりて昔のことなどいひてよめる　　清原元輔

老いてのち昔をしのぶ涙こそここら（よそのィ）ひとめをつつまざりけれ

題しらず　　賀茂政平

ゆく末のいにしへばかり戀しくば過ぐる月日も歎かざらまし

新院のおほせにて百首歌奉りけるによめる　　藤原季通朝臣

長恨歌の心をよめる　源道濟

思ひかね別れし野邊をきてみれば淺茅が原にあきかぜぞ吹く

陸奥國の任はてて上り侍りけるにたけぐまの松のもとにてよめる　橘爲仲臣

古里へ（にイ）われはかへりぬ武隈（たけぐま）のまつとは（もイ）たれに告げよとか思ふ

世にしづみて侍りけるころ春日の冬のまつりに幣たてまつりけるに思ひける事をみてぐらに書きつけ侍りける　左京大夫顯輔

枯れはつる藤の末葉（うらは）のかなしきはただ春の日を賴むばかりぞ

帥前内大臣あかしに侍りける時戀ひかなしみて病になりてよめる　高内侍

夜の鶴みやこの内にこめられて子を戀ひつつもなき明すかな

あしかれと思はぬ山の峯にだにおふなるものを人のなげきは

津の國に古曾部といふ所にこもりて前大納言公任のもとへいひつかはしける　　能因法師

ひたぶるに山田もる身となりぬれば我のみ人をおどろかす哉

後二條關白はかなき事にてむつかり侍りければ家の中には侍りながら前へもさしいで侍らで女房の中にいひ入れ侍りける　　源仲正

三笠山さすがに蔭にかくろひてふるかひもなきあめの下かな

おほやけの御かしこまりにて侍りけるを僧正源覺申しゆるして侍りければそのよろこびに五月五日まかりてよめる　　平致經

君ひかずなりなましかば菖蒲草いかなるねをか今日はかけまし

けるによめる　式部大輔資業

住吉のなみにひたれる松よりも神のしるしぞあらはれにける

ものへまかりける道に人のあやめをひきけるをとイ長き根やあるとこはせけるををしみ侍りければよめる　周防内侍

いかでかくねを惜むらむ菖蒲草うきには聲もたてつべき身を世イ

冷泉院へたかんな奉らせ給ふとてよませ給ひける　花山院御製

世の中にふるかひもなき竹の子はわがへむとしを奉つるなり

御かへし　冷泉院御製

年へぬる竹の齡をかへしてもこのよをながくなさむとぞ思ふ

男をうらみてよめる　和泉式部

忍び忍びに物思ひける比よめる　出羽辨

忍ぶるも苦しかりけりかずならぬ身には涙のなからましかば

忍びたる男のなりける衣をかしがましとておしのけければよめる　和泉式部

音せぬはくるしき物を身に近くなるとていとふ人もありけり

おもくわづらひけるに立ちおくれなばえなむながらふまじきといひたる男の返事によめる　大貳三位

人の世にふたたび死ぬるものならば忍びけりやと心みてまし

題しらず　左大辨俊雅母

夕霧に佐野のふな橋おとすなりたなれの駒のかへりくるかも

長元八年宇治前太政大臣の家に歌合しけるにかちがたのをのこども住吉にまうでて歌よみ侍り

ば弟忠清かよひ侍りけるも程なく忘れ侍りけれ
ば忠清が弟隆重にあひぬと聞きてかの女にいひ
つかはしける　　　　　　　　　　　　　藤原忠清

いかなればおなじ流の水にしもさのみは月のうつるならむ

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　さがみ

住吉のほそ江にさせるみをつくし深きにまけぬ人はあらじな

物思ひける頃よめる　　　　　　　　　　大納言道綱母

降る雨のあしとも落つる涙かなこまかにものを思ひくだけば

思ふ事侍りける頃いのねられず侍りければ終夜
ながめ明して有明の月の隈なく侍りけるが俄に
かきくらししぐれけるを見てよめる　　　赤染衛門

神無月ありあけの空のしぐるるをまた我ならぬ人や見るらむ

かへりける曉に雨のいたくふりければ朝にいひつかはしける

江侍從

かづきけむ袂は雨にいかがせし濡るるはさても思ひしれかし

題しらず

曾禰好忠

深くしも賴まざらなむ君ゆゑに雪ふみ分けて夜な夜なぞ行く

いたく忍びける男の久しく音せざりければいひつかはしける

赤染衞門

世の人のまだしらぬまの薄氷見わかぬほどに消えねとぞ思ふ

いひわたりける男の八月ばかりに袖の露けさなどいひたりける返事によめる

和泉式部

秋はみな思ふことなき荻の葉もすゑたわむまで露はおきけり

藤原隆時朝臣ものいひ侍りける女をたえにけれ

おもはれぬ空のけしきを見るからに我もしぐるる神無月かな

題しらず　待賢門院堀河

あだ人はしぐるる夜半の月なれやすむとてえこそ頼むまじけれ

たえにける男の五月ばかりに思ひかけずまうできたりければよめる　讀人しらず

たが里にかたらひかねて郭公かへるやま路のたよりなるらむ

たのめたる夜見えざりける男の後にまうできたりけるに出であはざりければ言ひわづらひて[びてイ]つらき事をしらせつるなどいはせたりければよめる　清少納言

よしさらばつらさは我に習ひけり頼めて來ぬはたれか教へし

かきたえたる男のいかが思ひけむきたりけるが

とうらみければ　　和泉式部

おのが身のおのが心にかなはぬを思はば物はおもひしりなむ

忍びける男のいかが思ひけむ五月五日の朝にあけて後歸りて今日あらはれぬるなむ嬉しきといひたりける返事によめる

菖蒲草かりにもくらむ物ゆゑにねやのつまとや人の見るらむ

保昌に忘られて侍りけるころ兼房朝臣のとひて侍りければよめる

人しれず物思ふことはならひにき花にわかれぬ春しなければ

藤原盛房かよひける女をかれがれになりて後神無月の二十日頃に時雨のしける日何事かといひつかはしたりければ母の返事にいへりける　　讀人しらず

いひ侍りけるに有明の月の三笠山よりさしのぼりけるを見てよめる　琳賢法師

ながらへば思ひ出にせむ思ひ出でよ君とみかさの山の端の月

京極前太政大臣家歌合によめる　大藏卿匡房

あふさかの關の杉原したはれて月のもるにぞまかせざりける

つくしより歸りまうで來てもとすみける所の有りしにもあらず荒れたりけるに月のいとあかく侍りければよめる　帥前内大臣

つくづく（れイ）と荒れたる宿をながむれば月ばかりこそ昔なりけれ

題しらず　高松上

深く入りてすまばやと思ふ山の端をいかなる月の出づるなるらむ

たがひにつつむ事ありける男のたやすく逢はず

所によめる　　大江嘉言

かぐ山の白雲かかるみねにてもおなじたかさぞ月は見えける、

家に歌合し侍りけるによめる　　左京大夫顯輔

夜もすがら富士の高嶺に雲きえて淸見が關にすめるつきかげ

山城守になりてなげき侍りける頃月のあかかりける夜まうで來りける人のいかが思ふととひはべりければよめる　　藤原輔尹朝臣

山城のいはたのもりのいはずともこころの中をてらせ月かげ

久しく音もせぬ人のもとへ月のあかかりける夜いひつかはしける　　中原長國

月にこそむかしのことは覺えけれわれを忘るる人にみせばや

山科寺にまかりけるに宗延法師にあひて終夜物

堀河院御時中宮の御方にまゐりて女房に物申しける程に月の山の端より立ちのぼりけるを見て女の月はまつにかならず出づるなむ哀なるといひければよめる

大納言公實

いかなれば待つには出づる月かげのいるを心に任せざるらむ

題しらず

花山院御製

こころみにほかの月をも見てしがなわが宿からの哀なるかと

月のあかく侍りける夜前大納言公任まうできたりけるをする事侍りて遲く出であひければ待ちかねて歸り侍りにければつかはしける

中務卿具平親王

恨めしく歸りけるかな月夜には來ぬ人をだに待つとこそきけ

屛風の繪に山のみねにゐて月見たる人かきたる

女房につけて奉りける　　太政大臣

すみのぼる月の光にさそはれて雲のうへまで行くこころかな

あれたるやどに月のもりて侍りけるをよめる　　良暹法師

板間より月のもるをも見つるかな宿は荒して住むべかりけり（ろイ）

題しらず　　内大臣

限もなくしのだの森の下晴れて千枝のかずさへ見ゆる月かげ（なイ）

山家月をよめる　　源道濟

さびしさに家出しぬべき山里をこよひの月におもひとまりぬ

新院殿上にて海路月といふ事をよめる　　平忠盛朝臣

行く人も天のとわたるここちして雲のなみぢに月をみるかな

題しらず　　橘爲義朝臣

君まつと山の端いでて山の端にいるまで月をながめつるかな

ければよめる　大中臣能宣朝臣

月はいり人は出でなばとまりゐてひとりや我は空をながめむ

御ぐしおろさせ給ひて後六條院の池に月のうつりて侍りけるを御覧じてよませ給ひける　小一條院御製

池水にやどれる月はそれながらながむる人のかげぞかはれる

左京大夫顯輔中宮亮にて侍りける時下臈にこえらるべしと聞きて宮の女房の中に歎き申したりけるに返事にたれとはなくて

世の中を嘆きないりそ三笠山さし出づる月のすまむかぎりは

田家月といふ事をよませ給ひける　新院御製

月きよみ田中にたてるかりいほのかげばかりこそ曇なりけれ

新院位におはしましし時月あかく侍りける夜

雲井よりつらぬきかくる白たまをたれ布引のたきといひけむ

新院位におはしましし時御前にて水草隔舟と
いふ事をよみ侍りける　　大藏卿行宗

難波江のしげき蘆間をこぐ船はさをのおとにぞゆく方をしる

題しらず　　律師濟慶

思ひ出もなくてや我が身やみなまし姨捨山のつき見ざりせば

父長實信濃守にてくだり侍りけるに共にまかり
てのぼりけるころ左京大夫顯輔家に歌合し侍り
けるに　　藤原爲眞

名にたかき姨捨山も見しかどもこよひばかりの月はなかりき

月あかく侍りける夜人々まうで來て遊び侍りけ
るに月入りにければ興つきて各々歸りなむとし

よませ給ひけるによめる　大納言師頼
春日山きたの藤なみ咲きしより榮ゆべしとはかねて知りにき
修理大夫顯季みまさかの守に侍りけるとき人々いざなひて右近馬場にまかりて郭公まち侍りけるに俊子内親王の女房の車まうできて連歌しよみなどしてあけぼのに歸り侍りけるにかの女房の車より
美作やくめのさら山と思へども和歌の浦とぞいふべかりける
このかへしせよといひければよめる　贈左大臣
和歌の浦といふにて知りぬ風吹かば波のよりこと思ふなるべし
左衛門督家成布引の瀧見にまかりて歌よみ侍りけるによめる　藤原隆季朝臣

春くればあちかたの海一かたにうくてふ魚の名こそをしけれ

宇治前太政大臣花見にまかりけると聞きてつかはしける

堀河右大臣

身をしらで人をうらむる心こそ散る花よりもはかなかりけれ

二條關白しら河へ花見になむといはせて侍りければよめる

小式部内侍

春の來ぬところはなきを白河のわたりにのみや花はさくらむ

入道攝政八重山吹をつかはしていかが見るといはせて侍りければよめる

大納言道綱母

たれかこの數はさだめしわれはただとへとぞ思ふ山吹のはな

新院位におはしまししし時皇后宮の御方に上達部うへのをのこどもをめして藤花年久といふ事を

播磨寺に侍りける時三月ばかり船よりのぼり侍りけるに津の國にやまぢといふ所に參議爲通朝臣しほゆあみて侍ると聞きてつかはしける　　平忠盛朝臣

ながるすな都の花も咲きぬらむわれもなにゆゑいそぐ船出ぞ

修行しありかせ給ひけるに櫻の花の咲きたりけるもとにやすみ給ひてよませ給ひける　　花山院御製

木のもとを栖とすればおのづから花みる人になりぬべきかな

人のもとにまかりたりけるに櫻花おもしろく咲きて侍りければあしたにあるじのもとへいひ遣しける　　天台座主源心

ちらぬ間にいま一度も見てしがな花に先立つ身ともこそなれ

花をゝしむ心をよめる　　大藏卿匡房

詞花和歌集 巻第九

雜 上

ところどころの名を四季によせて人々歌よみ侍りけるに三島江の春の心をよめる

源賴家朝臣

春霞かすめるかたや津の國のほのみしま江のわたりなるらむ

堀河院の御時うへのをのこども御前にめして歌よませ給ひけるに

源俊賴朝臣

須磨の浦にやく鹽がまの烟こそ春にしられぬかすみなりけれ

おなじ御時百首歌奉りけるによめる

なみたてる松のしづ枝をくもでにてかすみわたれる天の橋立

まだ知らぬ事をばいかが教ふべき人を忘るる身にしあらねば

おなじ所なる男のかきたえにければよめる　和泉式部

幾かへりつらしと人をみ熊野のうらめしながら戀しかるらむ

大江公資にわすれられてよめる　さがみ

夕ぐれは待たれしものを今はただ行くらむ方を思ひこそやれ

題しらず　讀人しらず

忘らるる人目ばかりを嘆きにてこひしき事のなからましかば

逢ふ事も我が心よりありしかば戀ひは死ぬとも人はうらみじ　藤原仲實朝臣

汲み見てし心ひとつをしるべにて野中の淸水わすれやはする

關白前太政大臣の家にてよめる　藤原基俊

淺茅生にけさおく露の寒けくにかれにし人のなぞやこひしき

心かはりたる男にいひつかはしける　淸少納言

忘らるる身はことわりと知りながら思ひあへぬは涙なりけり

久しく音せぬ男にいひつかはしける　讀人しらず

今よりはとへともいはじわれぞただ人を忘るる事を知るべき

中納言通俊たえ侍りければいひつかはしける　讀人しらず

さりとては誰にかいはむ今はただ人を忘るるこころをしへよ

返し　中納言通俊

いとほしく侍りけるわらはの大僧正行尊が許へまかりにければいひ遣じける　律師仁祐

鶯は木づたふはなのえだにても谷のふるすをおもひわするな

返事わらはにかはりて　大僧正行尊

うぐひすは花のみやこも旅なれば谷の古巣をわすれやはする

左衛門督家成が長月の晦日頃に初ていひそめて如何なる事かありけむ絶えて音づれ侍らざりけるがその冬ごろ聞くことのあればはばかりてえなむ言はぬといはせて侍りける返事によめる　皇嘉門院出雲

夜を重ね霜と共にしおきぬればありしばかりの夢をだに見ず

家に歌合し侍りけるに逢不遇戀といふことをよめる　中納言國信

よめる　　和泉式部

竹の葉に霰ふる夜はさらさらにひとりは寐べき心地こそせね

程なく絶えにける男のもとへいひ遣しける　　さがみ

ありふるも苦しかりけりながからぬ人の心をいのちともがな

かよひける女のこと人に物いふと聞きていひつかはしける　　淸原元輔

うきながらさすがに物の戀しきは今はかぎりと思ふなりけり

久しく音せぬ男につかはしける　　俊子內親王家大進

とはぬ間をうらむらさきに咲く藤の何とてまつに懸りそめけむ

男の絕々になりける頃いかにとゝひたる人の返事によめる　　高階章行朝臣女

思ひやれかけひの水のたえだえになり行くほどの心ぼそさを

ながら歸りにければあしたにいひ遣しける

涙さへいでにしかたをながめつつ心にもあらぬ月を見しかな

題しらず　　讀人しらず

つらしとて我さへ人を忘れなばさりとて中のたえや果つべき

平公誠

逢ふ事や涙の玉の緒なるらむしばし絶ゆれば落ちてみだるる

弟子なりけるわらはの親に具して人の國へあからさまにとてまかりけるが久しく見えざりければたよりにつけていひ遣しける　　最嚴法師

み狩野の暫(しはし)のこひはさもあらばあれ反(そり)果てぬるか矢形尾(やかたを)の鷹

たのめたりける男をいまやいまやと待ちけるにまへなる竹の葉に霰の降りかかりけるを聞きて

何處をもよがるる事のわりなきに二にわくる我が身ともがなれむイ

をとこに忘られて歎きける頃八月ばかりにまへなる前栽の露をよもすがらながめてよめる　赤染衛門

諸ともにおきゐる露のなかりせば誰とか秋の夜をあかさまし

題しらず　曾禰好忠

きたりとも寐るまもあらじ夏の夜の有明のつきも傾きにけり

新院くらゐにおはしましける時雖契不來戀といふ事をよませ給ひけるによみ侍りける　關白前太政大臣

來ぬ人をうらみもはてじ契りおきしその言の葉も情ならずや

題しらず　和泉式部

夕暮に物思ふことはまさるかと我れならざらむ人にとはばや

月のあかかりける夜まうできたりける男の立ち

物いひ侍りける女のもとへいひ遣しける　大江爲基

思ふことなくてすぎぬる世の中につひに心をとどめつるかな

夜がれもせずまうで來ける男の秋立ちける日その夜しもまうでこざりければあしたにいひ遣しける　一宮紀伊

常よりも露けかりける今宵かなこれや秋立つはじめなるらむ

女の許に罷りたりけるに親のいさむれば今はえなむ逢ふまじきといはせて侍りければよめる　坂上明兼

せきとむる岩間の水もおのづから下にはかよふ物とこそきけ

題しらず　惠慶法師

逢ふ事はまばらに編めるいよ簾いよいよ人をわびさするかな

等思兩人といふ事をよめる　右大臣

左京大夫顯輔家にて歌合し侍りけるによめる　藤原顯廣朝臣

心をばとどめてこそは歸りつれあやしや何のくれをまつらむ

女のもとより夜ふかく歸りてあしたに遣しける　藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにける哉

長月の晦日の日のあしたに初めたる女の許より

かへりて立ち歸りつかはしける　讀人しらず

皆人の惜む日なれどわれはただ遲く暮れゆくなげきをぞする

左衛門督家成歌合し侍りけるによめる　藤原範綱

すみよしのあさ澤小野の忘水たえだえならで逢ふよしもがな

藤原保昌朝臣に具して丹後國へまかりけるに忍

びて物いひける男のもとへいひつかはしける　和泉式部

われのみや思ひおこせむあぢきなく人は行方もしらぬ物ゆゑ

詞花和歌集　卷第八

戀　下

人しづまりて來といひたる女のもとへ待ちかね
てとくまかりたりければかくやは言ひつるとて
いであはず侍りければいひ入れ侍りける
藤原相如

君をわがおもふ心は大はらや何時しかとのみすみやかれつつ

題しらず
藤原道經

我が戀はあひ初めてこそまさりけれ飾摩の褐の色ならねども

女のもとより曉かへりて立ち歸りいひ遣しける
淸原元輔

夜を深み歸りし空もなかりしをいづくよりおく露にぬれけむ

播磨なる飾磨にそむるあながちに人をこひしと思ふころかな

冬の頃暮にあはむといひたる女にくらしかねて

いひつかはしける　　道命法師

ほどもなくくると思ひし冬の日の心もとなきをりもありけり

家に歌合し侍りけるによめる　　中納言俊忠

こひわびて獨ふせやによもすがら落つる涙やおとなしのたき

題しらず　大中臣能宣朝臣

御垣守衞士のたく火のよるはもえ晝は消えつつ物をこそ思へ

讀人しらず

我が戀は蓋身かはれる玉櫛笥いかにすれどもあふかたぞなき

山寺にこもりて日頃侍りて女のもとへいひつかはしける　藤原範永朝臣

氷しておとはせねども山川のしたはながるるものと知らずや

關白前太政大臣の家にてよめる　藤原親隆朝臣

かぜふけばもしほの烟かたよりになびくをひとの心ともがな

題しらず　新院御製

瀨を早み岩にせかるる瀧川のわれてもすゑに逢はむとぞ思ふ

曾禰好忠

しのぶれど涙ぞしるき紅にものおもふそでは染むべかりけり

文つかはしける女のいかなる事かありけむ今更に返事(たもイ)せず侍りければいひ遣しける　源雅光

くれなゐに涙のいろもなりにけり變るは人のこころのみかは

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる　平實重

戀ひ死なむ身こそ思へば(なかなかイ)惜しからね憂もつらきも人の咎かは

題しらず　道命法師

つらさをば君にならひて知りぬるを嬉しき事は誰にとはまし

女を恨みてよめる　藤原道信朝臣

嬉しきはいかばかりかは思ふらむ憂は身にしむ物にぞありける(ここちこそすれイ)

ひえの山に歌合し侍りけるによめる　心覺法師

戀すれば憂身さへこそ惜まるれ同じよにだに住まむと思へば

じげに見えければいひ遣しける　道命法師

山櫻つひに咲くべきものならば人のこころをつくさざらなむ

堀河院御時藏人に（てイ）侍りけるに贈皇后宮の御方に侍りける女を忍びてかたらひ侍りけるをこと人にものいふと聞きて白菊の花にさしつかはしける　源家時

霜おかぬひと（事イ）の心はうつろひておもがはりせぬしら菊のはな

返し女にかはりて　大納言公實

白菊のかはらぬ色もたのまれずうつろはでやむ秋しなければ

中納言としただが家の歌合によめる　藤原顯綱朝臣

紅のこぞめのころもうへに著むこひのなみだの色かはるやと

題しらず　源道濟

ことをよめる

わびつつもおなじ都はなぐさみき旅寐ぞ戀のかぎりなりける

冷泉院春宮と申しける時百首歌奉りけるによめる

源　重　之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ碎けてものを思ふころかな

堀河院御時百首歌奉りけるによめる

修理大夫顯季

我が戀はよしのの山のおくなれや思ひいれどもあふ人もなし

題しらず

平　祐　擧

むねは富士そでは淸見が關なれや烟もなみもたたぬ日ぞなき

藤　原　永　實

いたづらに千束くちにし錦木をまたこりずまに思ひたつかな

春になりてあはむとたのめける女のさもあるま

一度はおもひ絶えにし世の中をいかがはすべき賤のをだまき
　三井寺に侍りけるわらはにを京にいでばかならず
　告げよとちぎりて侍りけるを京へいでたりとは
　聞きけれどおとづれ侍らざりければいひ遣しけ
　る　　　　　　　　　　　　　　　　僧都覺雅
影見えぬきみは雨夜の月なれや出でても人にしられざりけり
　さらにゆるぎげもなき女に七月七日つかはしけ
　る　　　　　　　　　　　　　　　　大納言道綱
七夕にけさ引く糸の露を重みたわむけしきを見でややみなむ
　戀のうたとてよめる　　　　　　　　隆緣法師
身のほどを思ひしりぬることのみやつれなき人の情なるらむ
　左衞門督家成が津の國の山莊にて旅宿戀といふ

はしける　　　　　　　　　　　　　　　　　　平　兼　盛
忘るやとながらへゆけど身にそひて戀しき事は後れざりけり
題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　讀人しらず
年をへて燃ゆてふ不二の山よりも逢はぬおもひは我ぞ勝れる
侘びぬればしひて忘れむとおもへども心よわくも落つる涙か
おもはじと思へばいとど戀しきはいづれかわれが心なるらむ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　能　因　法　師
心さへむすぶの神やつくりけむ解くるけしきも見えぬ君かな
あだあだしくも有るまじかりける女をいと忍び
ていはせ侍りけるに世にちりてわづらはしきさ
まにきこえければいひたえて後とし月をへて思
ひあまりていひつかはしける　　　　　　　　前大納言公任

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる　大納言成通

よそながら哀といはむことよりも人傳ならでいとへとぞ思ふ

題しらず　寛念法師

戀ひ死なば君は哀といはずともなかなかよその人やしのばむ

つれなき女につかはしける　賀茂成助

いかばかり人のつらさを恨みましうき身の咎と思ひなさずば

左衞門督家成が家に歌合し侍りけるによめる　藤原賴保

いかならむ言の葉にてか靡くべき戀しといふはかひなかりけり

題しらず　淨藏法師

我が爲につらき人をばおきながら何のつみなき世をや恨みむ

女をあひかたらひけるころよしありて津の國に

ながらといふ所にまかりてかの女のもとにつか

題しらず　　平兼盛

谷川の岩間をわけてゆく水のおとにのみやは聞かむと思ひし（すらむイ）

春立ちける日承香殿女御のもとへつかはしける　　一條院御製

よとともに戀ひつつ過ぐる（すイ）年月は變れどかはる心地こそせね

承暦四年内裏の歌合によめる　　藤原伊家

わが戀はゆめぢにのみぞ慰むるつれなき人も逢ふと見つれば（ゆイ）

新院くらゐにおはしましし時うへのをのこども御前にめして寐覺の戀といふ事をよませ給ひけるによめる　　左兵衛督公能（行イ）

慰むるかたもなくてややみなまし夢にも人のつれなかりせば

寛和二年内裏歌合によめる　　藤原惟成

命あらば逢ふよもあらむ世の中になど死ぬばかりおもふ心ぞ

詞花和歌集　卷第七

戀　上

戀のうたとてよみ侍りける　　關白前太政大臣

あやしくも我がみ山木のもゆるかな思ひは人につけてし物を

題しらず　　藤原實方朝臣

いかでかはおもひ有りともしらすべき室の八島の烟ならでは

　　隆惠法師

かくとだにいはで果(はか)なく戀ひ死なば軈(やがて)しられぬ身とやなりなむ

堀河院御時百首歌奉りけるによめる　　大藏卿匡房

思ひかね今日たてそむる錦木の千束(ちづか)もまたで逢ふよしもがな

はかなくも今朝の別の惜しき哉いつかは人をながらへて見し むイ

ふたつなき心を君にとゞめおきて我さへ我にわかれぬるかな

大納言經信太宰帥にて下り侍りけるに俊頼朝臣

まかりければいひつかはしける　太皇太后宮甲斐

暮はまづそなたをのみぞ眺むべき出でむ日毎に思ひおこせよ

橘爲仲朝臣みちの國の守にてくだりけるに太皇

太后宮の大盤所よりとて誰とはなくて

東路（あづまぢ）のはるけき道を行きめぐりいつかとくべき下ひものせき

修理大夫顯季太宰大貳にて下らむとし侍りける

に馬に具してつかはしける　權僧正永緣

立ち別れはるかにいきの松なれば戀しかるべき千代の陰かな

あづまへまかりける人の宿りて侍りけるがあか

つきに立ちけるによめる　傀儡靡（イ）くぐつなびき

茜さす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらむと

弟子に侍りけるわらはの親に具して人の國へまかりけるにさうぞく遣すとてよめる　　法橋有禪

別路のくさ葉をわけむたび衣たつよりかねて濡るるそでかな

月ごろ人のもとにやどりけるがかへりける日あるじにあひてよめる　　玄範法師

また來むとたれにもえこそ言ひおかね心にかなふ命ならねば

もろこしへ渡り侍りけるを人のいさめ侍りければよめる　　寂照法師

止まらむ止まらじともおもほえず何處もつひの住處ならねば

人のもとに日ごろ侍りてかへる日あるじにあひていひける　　僧都淸胤

よろこびをくはへて急ぐ旅なれば思へどえこそ止めざりけれ

橘則光朝臣みちの國のかみにて下り侍りけるに餞し侍るとてよめる　藤原輔尹朝臣

とまりゐて待つべき身こそ老いにけれあはれ別は人の爲かは

物申しける女の齋宮の下り給ひけるともにまかりけるにいひ遣しける　藤原道經

かへり來む程をもしらで悲しきはよを長月のわかれなりけり

大納言經信太宰帥にて下りけるに川尻にまかりあひてよめる　津守國基

六年にて君は來まさむ住吉のまつべき身こそいたく老いぬれ

つねに侍りける女房の日向の國へ下り侍りけるに餞し給ふとてよませ給ひける　一條院皇后宮

詞花和歌集 巻第六

別

參議廣業たえて後伊豫のかみにてくだりけるにつかはしける
民部内侍

都にておぼつかなさをならはずば旅寐をいかに思ひやらまし

道貞にわすられて後みちの國のかみにてくだりけるに遣しける
和泉式部

もろともにたたまし物をみちのくの衣の關をよそに聞くかな

左京大夫顯輔加賀守にて下り侍りけるにいひつかはしける
源俊頼朝臣

天喜四年四月晦日后宮の歌合によませ給ひける　後冷泉院御製

長濱の眞砂のかずもなにならじつきせず見ゆる君が御（千イ）代かな

上東門院御屛風に十二月つごもりのかたかきたる所によめる　前大納言公任

一年を（のイ）暮れぬとなにか（いかがイ）惜むべきつきせぬ千代の春をまつには

河原院に人々まかりて歌合し侍りけるに松臨江といふことを　恵慶法師

たれにとか池のこころも思ふらむそこにやどれる松の千年を

後三條院の住吉まうでによめる　讀人しらず

君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけむすみよしの松

としつなに具して住吉にまうでてよめる　大納言經信

住吉のあらひと神の久しさにまつもいくたび生ひかはるらむ

京極前太政大臣家に歌合し侍りけるによめる　匡房

君が代はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のささむかぎりは

長元八年宇治前太政大臣の家の歌合によめる　能因法師

君が代は白雲かかる筑波嶺のみねのつづきのうみとなるまで

題しらず　染衛門

榊葉を手にとりもちていのりつる神の代よりも久しからなむ

三條太政大臣の賀の屛風の繪に花見てかへる人かきたる所によめる　中務

あかでのみかへると思へば櫻花をるべき春ぞつきせざりける

ある人の子三人にかうぶりをさせたりけるに又の日つかはしける　清原のもとすけ

松島の磯にむれゐるあしたづの己がさまざま見えし千代かな

詞花和歌集　巻第五

賀

一條院上東門院に行幸せさせ給ひけるに　入道前太政大臣

君が代にあふくま川の底きよみ千年をへつつすまむとぞ思ふ

正月一日子生みたる人に襁褓つかはすとてよめる　伊勢大輔

珍しくけふたち初むる鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな

一條左大臣の家の障子に住吉のかたかきたる所によめる　大中臣能宣朝臣

過き來にしほどをばすてつ今年より千代はかぞへむ住吉の松

おくやまの岩垣もみぢ散りはてて朽葉がうへに雪ぞつもれる　大江嘉言

日暮しに山路の昨日しぐれしは富士の高嶺の雪にぞありける

新院くらゐにおはしましし時雪中眺望といふ事をよませ給ひけるによみ侍りける　關白前太政大臣

くれなゐに見えしこずゑも雪ふれば白木綿(しらゆふ)かくる神なびの森

題しらず　和泉式部

まつ人の今もきたらばいかがせむ踏ままくをしき庭の雪かな

歳暮の心をよめる　成尋法師

數ならぬ身にさへ年のつもるかな老は人をもきらはざりけり　曾禰好忠

魂祭る年のをはりになりにけり今日にや又もあはむとすらむ

いほりさす楢の木陰にもる月のくもると見れば時雨ふるなり

天暦の御時御屛風に網代に紅葉おほく寄りたるかたかきける所をよめる

平　兼盛

みやまには嵐やいたく吹きぬらむ網代もたわに紅葉つもれり

鷹狩をよめる

藤原長能

霰ふるかた野のみ野のかりころも濡れぬ宿かす人しなければ

堀河院御時百首歌奉りけるによめる

大藏卿匡房

山深みやく炭がまのけぶりこそやがて雪げのくもとなりけれ

大和守にて侍りける時入道前太政大臣の許にて初雪を見てよめる

藤原義忠朝臣

年をへて吉野の山にみなれたる目にめづらしき今朝のしら雪

題しらず

大藏卿匡房

山ふかみおちて積れるもみぢ葉のかわける上に時雨ふるなり

落葉埋水といふ事をよめる　惟宗隆頼

今更におのがすみかを立たじとて木の葉の下に鴛ぞ鳴くなる

落葉有聲といふ事をよめる

風ふけば楢の枯葉のそよそよといひ合せつついつか散るらむ

題しらず　曾禰好忠

外山なる柴のたち枝にふくかぜの音きくをりぞ冬はものうき

讀人しらず

秋はなほ木の下陰もくらかりき月はふゆこそ見るべかりけれ

東山に百寺をがみけるに時雨しければよめる　左京大夫道雅

諸共に山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とはしらずや

旅宿時雨といふ事をよめる　瞻西上人

詞花和歌集　卷第四

冬

題しらず　曾禰好忠

何事も行きていのらむと思ひしに神無月にもなりにけるかな

楸おふる澤邊のちはら冬くればひばりの床ぞあらはれにける

家に歌合し侍りけるに落葉をよめる　大貳資通

梢にてあかざりしかばもみぢ葉の散りしく庭を拂はでぞ見る

題しらず　左衞門督家成

色々にそむるしぐれにもみぢ葉は爭ひかねて散りはてにけり

大江嘉言

初霜をよめる　　大中臣能宣朝臣

初霜もおきにけらしな今朝見れば野邊の淺茅も色付きにけり

雨中九月盡といふ事をよめる　　前大納言公任

いづ方へ秋のゆくらむ我が宿に今宵ばかりはあまやどりせよ

（校異：「へ」に「にイ」、「せよ」に「てイ」）

題しらず　曾禰好忠

山里はゆききの道も見えぬまで秋の木の葉にうづもれにけり

春より法輪寺にこもりて侍りける秋大井河に紅葉のひまなく流れけるを見てよめる　道命法師

春雨のあやおりかけし水のおもにあきはもみぢの錦をぞしく

雨後落葉といふ事をよめる　源俊頼朝臣

名殘なく時雨の空は晴れぬれどまだふる物は木の葉なりけり

月のあかき夜紅葉の散るをみてよめる　平兼盛

あれはてて月もとまらぬ我が宿に秋の木の葉を風ぞふきける

一條攝政家の障子(屏風イ)に網代に紅葉のひまなく寄りたるかたかきたる所をよめる　藤原惟成

秋深み紅葉おちしく網代木は氷魚のよるさへあかく見えけり

題しらず　道命法師

今年また咲くべき花のあらばこそ移ろふ菊にめかれをもせめ

曾禰好忠

草がれの冬まで見よと露霜のおきてのこせるしらぎくのはな

宇治前太政大臣白河にて見行客といふ事をよめる　堀河右大臣

關こゆる人にとはばやみちのくの安達のまゆみ紅葉しにきや

武藏の國より上り侍りけるに三河の國二村山の紅葉を見てよめる　橘能元

いくらとも見えぬ紅葉の錦かなたれふたむらの山といひけむ

寛治元年太皇太后宮の歌合によめる　大藏卿匡房

夕されば何かいそがむもみぢ葉の下てる山はよるも越えなむ

秋風に露をなみだとなくむしの思ふこゝろをたれに問はまし

駒迎をよめる　大藏卿匡房

逢坂の杉間のつきのなかりせばいくきの駒といかで知らまし

永承五年一宮歌合によめる　出羽辨

きく人のなど安からぬ鹿の音は我が妻を山こそこひて鳴くらめ

題しらず　藤原伊家

秋萩を草のまくらにむすぶ夜はちかくも鹿のこゑをきくかな

九月十三夜に月照菊花といふ事をよませ給ひける　新院御製

秋ふかみはなには菊の關なれば下葉につきももりあかしけり

關白前太政大臣家にてよめる　源雅光

霜がるるはじめと見ずば白菊のうつろふ色をなげかざらまし

敦輔王

萩の葉にこととふ人もなきものを來る秋ごとにそよと答ふる

題しらず　　曾禰好忠

秋の野のくさむらごとにおく露はよるなくむしの涙なるべし（りけりイ）

永源法師

八重葎しげれる宿はよもすがら蟲の音聞くぞとりどころなる

和泉式部

鳴く蟲のひとつ聲にも聞えぬはこころごころにものや戀（悲イ）しき

陸奥國の任はててのぼり侍りけるに尾張の國鳴海野に鈴蟲の鳴き侍りけるをよめる　　橘爲仲朝臣

古里にかはらざりけり鈴蟲のなるみの野邊のゆふぐれのこゑ

天祿三年女四宮歌合によめる　　橘正通朝臣

法輪へまうでけるにさが野の花おもしろく咲きて侍りければ見てよめる　赤染衛門

秋の野の花見る程の心をば行くとや云はむとまるとや云はむ

賀茂のいつきときこえて侍りける時本院のすいがきにあさがほの花咲きかかりて侍りけるをよめる　禖子内親王

神垣にかかるとならば朝顔もゆふかくるまでにほはざらめや

堀河院の御時百首歌奉りけるによめる　隆源法師

ぬしやたれきる人なしに藤袴見れば野ごとにほころびにけり

白河院鳥羽殿にて前栽あはせせさせ給ひけるによめる　周防内侍

朝な朝なつゆおもげなる萩が枝に心をさへもかけて見るかな

題しらず　　源道濟

ひとり居てながむる宿のをぎの葉に風こそわたれ秋の夕ぐれ

大江嘉言

荻の葉にそそや秋風ふきぬなりこぼれやしぬるつゆのしら玉

和泉式部

秋ふくは如何なるいろの風なれば身にしむばかり哀なるらむ

曾禰好

みよしののきさ山かげにたてる松いくく秋風にそなれきぬらむ

藤原顯綱朝臣

荻の葉に露吹きむすぶこがらしの音ぞ夜寒になりまさるなる

霧をよめる　　源兼昌

夕霧にこずゑも見えず初瀬山いりあひのかねの音ばかりして

秋の夜のつきに心のひまぞなき出づるをまつと入るを惜むと

関白前太政大臣家にて八月十五夜のこころをよめる　藤原朝隆朝臣

ひくこまにかげをならべて逢坂の關路よりこそ月はいでけれ

左衛門督家成が家に歌合し侍りけるによめる　隆縁法師

秋の夜の露も曇らぬ月をみておきどころなき我がこころかな

月を待つこころをよめる　大江嘉言

秋のよの月まちかねておもひやる心いくたびやまを越ゆらむ

月浮山水といふ心[事イ]をよめる　藤原忠兼

秋山の清水はくまじにごりなばやどれる月のくもりもぞする

寛和二年内裏歌合によませ給ひける　花山院御製

秋の夜の月にこころのあくがれてくもゐに物を思ふころかな

いかなればおなじ空なる月影の秋しもことに照りまさるらむ

家に歌合し侍りけるによめる　左衛門督家成

春夏とそらやはかはる秋の夜の月しもいかで照りまさるらむ

月を御覽じてよませ給ひける　三條院御製

秋に又逢はむあはじも知らぬ身は今宵ばかりの月をだに見む

題しらず　天台座主明快

有りしにもあらずなりゆく世の中にかはらぬ物は秋の夜の月

關白前太政大臣の家にてよめる　藤原重基

秋の夜の月の光のもるやまは木のしたかげもさやけかりけり

ひえの山の念佛にのぼりて月をみてよめる　良暹法師

天つ風雲ふきはらふたかねにて入るまで見つるあきの夜の月

京極前太政大臣家の歌合によめる　源（藤原イ）賴綱朝臣

天の川たま橋い（なイ）そぎわたさなむ淺瀬たどるも夜のふけゆくに

　橘俊綱伏見の山庄にて七夕後朝のこころをよめ
る　　　　　　　　　　　　　　　　良暹法師

あふ夜とは誰かはしらぬ棚機のあくる空をもつつまざらなむ

　　　　　　　　　　　　　　　　藤原顯綱朝臣

棚機のまちつるほどのくるしさとあかぬ別といづれまされる（りイ）

　題しらず　　　　　　　　　　　　祝部成仲

天の川かへらぬみづを棚機はうらやましとや今朝はみるらむ

　三條太政大臣の家にて八月十五夜に水上月とい
　ふことをよめる　　　　　　　　　源順

水清みやどれる月の（秋の月イ）かげさへや千代まで君とすまむとすらむ

　題しらず　　　　　　　　　　　　右大臣

ける　　　　　　　　　　　　　　　　花山院御製

棚機に衣もぬぎてかすべきにゆゆしとや見むすみぞめのそで

承曆二年内裏歌合によめる　　　　　藤原顯綱朝臣

棚機に心はかすとおもはねど暮れゆくそらはうれしかりけり

題しらず　　　　　　　　　　　　　加賀左衛門

如何なればとだえそめけむ天の川逢瀨に渡すかささぎのはし

新院のおほせごとにて百首歌たてまつりけるに

よめる　　　　　　　　　　　　　　左京大夫顯輔

天の川よこぎるくもや棚機のそらだきもののけぶりなるらむ

寬和二年内裏の歌合によめる　　　　大中臣能宣朝臣

おほつかな變りやしにし天の川としにひとたび渡る瀨なれば

七夕をよめる　　　　　　　　　　　修理大夫顯季

詞花和歌集 卷第三

秋

題しらず　曾禰好忠

山城の鳥羽田のおもを見わたせばほのかにけさぞ秋風はふく

津の國にすみ侍りけるころ大江爲基任はてての
ぼり侍りければいひつかはしける　僧都清胤

君すまばとはましものを津の國の生田のもりのあきのはつ風

七月七日式部大輔資業が（のイ）もとにてよめる　橘元任

萩の葉にすがく糸をもささがには棚機にとやけさは引くらむ

御ぐしおろさせ給ひて後七月七日よませたまひ

そま川の筏のとこのうきまくら夏はすゞしきふしどなりけり

長保五年入道前太政大臣の家に歌合し侍りける

によめる　源道濟

まつ程に夏の夜いたくふけぬればをしみもあへず山の端の月

題しらず　曾禰好忠

川上に夕立すらしみくづせぐやな瀬のさなみたちさわぐなり

閏六月七日によめる　太皇太后宮大貳

常よりもなげきやすらむ棚機のあはまし暮をよそにながめて

題しらず　さがみ

下紅葉ひと葉づつちる木のもとに秋とおぼゆる蟬のこゑかな

よしただ

蟲の音もまだうちとけぬ草むらに秋をかねてもむすぶ露かな

やどちかくはな橘はほり植ゑじむかしを忍ぶつまとなりけり

なでしこの花を見てよめる　藤原經衡

うすくこく垣ほににほふ撫子のはなのいろにぞ露もおきける

贈左大臣の家に歌合し侍りけるによめる　修理大夫顯季

たねまきしわが撫子の花ざかりいくあさ露のおきて見つらむ

寛和二年內裏歌合に　大貳高遠

なく聲もきこえぬもののかなしきは忍びにもゆる螢なりけり

六條右大臣家に歌合し侍りけるによめる　讀人しらず

さつきやみ鵜川にともすかがり火の數ますものは螢なりけり

水邊納涼といふ事をよめる　藤原家經朝臣

風ふけば河邊すずしくよる波のたちかへるべき心地こそせね

題しらず　曾禰好忠

題しらず　皇嘉門院治部卿

五月雨の日をふるままに鈴鹿川八十瀬のなみぞ音まさりける

堀河院御時百首歌奉りけるによめる　大藏卿匡房

我妹子がこやのしのやの五月雨にいかでほすらむ夏引のいと

右大臣家の歌合によめる　源忠季

五月雨は難波堀江のみをつくし見えぬや水のまさるなるらむ

郁芳門院のあやめの根合によめる　中納言通俊

もしほやく須磨の浦人うちはへていとひやすらむ五月雨の空

藤原通宗朝臣歌合し侍りけるによめる　良暹法師

五月やみ花たちばなに吹く風はたがさとまでか匂ひゆくらむ

世をそむかせ給ひて後花橘を御覽じてよませ給ひける　花山院御製

題しらず　能因法師

山彦のこたふる山のほとゝぎすひと聲なければふたこゑぞ聞く

藤原伊

郭公あかつきかけて鳴くこゑを待たぬ寐ざめの人やきくらむ

大納言公教

待つほどは寐(ね)るともなき(夜イ)を郭公なくねは夢のここちこそすれ

閑中郭公といふ事をよめる　源俊頼朝臣

なきつとも誰にかいはむ郭公かげよりほかにひとしなければ

題しらず　待賢門院堀河

こやの池におふる菖蒲の長き根はひく白糸のここちこそすれ

土御門右大臣の家に歌合し侍りけるによめる　源頼家朝臣

よもすがらたたく水鷄(くひな)は天の戸をあけて後こそ音せざりけれ

神まつりをよめる　源兼昌
榊とるなつの山路やとほからむゆふかけてのみまつる神かな
郭公を待ちてよめる　周防内侍
むかしにも有らぬわが身に郭公まつこころこそ變らざりけれ
關白前太政大臣の家にて郭公の歌おのおの十首づつよませ侍りけるによめる　藤原忠兼
郭公なく音ならではよの中に待つこともなき我が身なりけり
題しらず　花山院御製
ことしだにまづはつ聲を郭公よにはふるさでわれに聞かせよ
山寺にこもりて侍りけるに郭公のなき侍らざりければよめる　道命法師
山里のかひこそなけれほととぎす都のひともかくや待つらむ

詞花和歌集　卷第二

夏

卯月の一日によめる　僧基法師

今日よりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひわたらむ

題しらず　源俊頼朝臣

雪のいろをぬすみて咲ける卯の花はさえでや人に疑はるらむ

齋院長官にて侍りけるが少將に成りて賀茂の祭の使して侍りけるを珍しきよし人のいはせて侍りければよめる　大藏卿長房

年をへてかけしあふひは變らねど今日のかざしは珍しきかな

惜むとて今宵かきおく言の葉やあやなく春のかたみなるべき（らましィ）

麗景殿の女御の家の歌合によめる　讀人しらず

八重咲けるかひこそなけれ山吹のちらば一重もあらじと思へば

堀河院御時百首歌奉りけるによめる　太皇太后宮肥後

こぬ人をまちかねやまのよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞ聞く

新院位におはしましし時牡丹をよませ給ひける

によみはべりける　關白前太政大臣

咲きしより散り果つるまで見し程に花の下にて廿日經にけり

老人惜春といふ事をよめる　橘俊綱

老いてこそ春の惜しさは增りけれいま幾度もあはじと思へば

三月盡日うへのをのこどもをおまへにめして春

の暮れぬる心をよませさせ給ひけるによませ給

ひける　新院御製

める　　　　　　　　　　　　　藤原範永朝臣

散る花もあはれと見ずや石のかみふり果つるまでをしむ心を

庭の櫻の散るを御覽じてよませ給ひける　　　　花山院御製

我がやどの櫻なれども散るときは心にえこそまかせざりけれ

さくらの花のちるを見てよめる　　　　源俊頼朝臣

身にかへて惜むにとまる花ならばけふや我が世の限ならまし

落花滿庭といふ事をよめる　　　　花園左大臣

庭もせに積れる雪と見えながらかをるぞ花のしるしなりける

題しらず　　　　大中臣能宣朝臣

ちる花にせきとめらるる山川のふかくも春のなりにけるかな

寛和二年內裏歌合によめる　　　　藤原長能

一重だにあかぬにほひをいとどしく八重かさなれる山吹の花

太皇太后宮賀茂のいつきときこえ給ひける時人人まゐりて鞠つかうまつりけるに硯のはこのふたに雪をいれていだされたりけるしき紙にかきつけ侍りける　攝津

櫻花ちりしくにはをはらはねば消えせぬ雪となりにけるかな

住みあらしたる家の庭に櫻の花のひまなく散り積りて侍りけるを見てよめる　源俊頼朝臣

はく人もなき古里の庭のおもは花散りてこそ見るべかりけれ

橘としつなの朝臣の伏見の山庄にて水邊落花といふことをよめる　源師賢朝臣

さくら咲く木の下水は淺けれどちりしく花のふちとこそなれ

藤原兼房朝臣の家にて老人惜花といふことをよ

よめる　　　　　　　　　　　　　　　源　登　平

櫻ばな手ごとに折りてかへるをば春の行くとや人はみるらむ

題しらず　　　　　　　　　　　　　道命法師

春ごとに見る花なれど今年より咲きはじめたる心地こそすれ

歸雁をよめる　　　　　　　　　　　贈左大臣母

古里の花のにほひやまさるらむしづこころなくかへる雁がね

　　　　　　　　　　　　　　　　　源　忠　季

なかなかに散るを見じとや思ふらむ花の盛にかへるかりがねゝ

櫻の花のちるを見てよめる　　　　　藤原元眞

櫻ばな散らさで千代もみてしがな飽かぬ心はさてもありやと

天德四年内裏歌合によめる　　　　　大中臣能宣朝臣

櫻花風にし散らぬものならばおもふことなき春にぞあらまし

所々に花をたづぬといふ事をよませ給うける　白河院御製

春くればはなの梢にさそはれていたらぬ里のなかりつるかな

橘俊綱朝臣の伏見の山庄にて水邊櫻花といふことをよめる　源師賢朝臣

池水のみぎはならずばさくらばな影をも波にをられましやは

一條院の御時ならの八重櫻を人の奉りけるをその折御前に侍りければその花を題にて歌よめとおほせごとありければ　伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻けふここのへににほひぬるかな

新院のおほせ事にて百首の歌奉りけるによめる　右近中將教長朝臣

ふるさとに問ふ人あらば山櫻ちりなむのちを待てとこたへよ

人々あまた具して櫻花を手毎に折りて歸るとて

おなじ歌合によめる　　一宮紀伊

あさまだき霞なこめそ山ざくら尋ねゆくまのよそめにも見む

大藏卿匡房

白雲と見ゆるにしるしみよしのの吉野の山のはなざかりかも

承暦二年内裏の後番歌合（ごはんのうたあはせ）によめる　　大納言公實

山櫻をしむにとまるものならば花ははるともかぎらざらまし

遠山櫻といふ事をよめる　　前齋院出雲（羽イ）

九重にたつしら雲と見えつるはおほうち山のさくらなりけり

題しらず　　戒秀法師

春ごとに心をそらになすものは雲井に見ゆるさくらなりけり

しら川に花見にまかりてよめる　　源俊頼朝臣

白川のはるのこずゑを見わたせば松こそ花のたえまなりけれ

古鄕の柳をよめる　源道濟

古里のみかきの柳はるばると誰がそめかけしあさみどりぞも

題しらず　源賴政

みやま木のその梢とも見えざりし櫻ははなにあらはれにけり

京極前太政大臣の家に歌合し侍りけるによめる　康資王母

紅のうす花ざくらにほはずばみなしらくもと見てやすぎまし

この歌を判者大納言經信くれなゐの櫻は詩に作侍イれども歌にはよみたる事なむなきと申しければ

あしたにかの康資王母のもとにつかはしける　京極前太政大臣

白雲はたちへだつれどくれなゐのうすはな櫻こころにぞそむ

かへし　康資王母

しらくもはさも立たばたて紅のいまひとしほを君しそむれば

梅花をよめる　　右兵衛督公行

梅のはな匂をみちのしるべにてあるじも知らぬ宿に來にけり

題しらず　　俊惠法師

まこも草つのぐみわたる澤邊にはつながぬ駒も放れざりけり

藤原盛經

とりつなぐ人もなき野の春ごまは霞にのみやたなびかるらむ

僧都覺雅

(も)え出づる草葉のみかはをざさ原駒のけしきも春めきにけり

天德四年内裏歌合に柳をよめる　　平兼盛

佐保姫のいとそめかくる青柳を吹きなみだりそ春のやまかぜ

贈左大臣の家の歌合によめる　　原季遠

いかなれば氷は(吹きとくイ)とくる春風にむすぼほるらむあをやぎのいと

題しらず　曾禰好忠

雪消えばゑぐの若菜もつむべきに春さへ晴れぬみ山邊のさと

冷泉院東宮と申しける時百首歌奉りけるによめる　源重之

春日野に朝鳴く雉のはねおとは雪の消えまにわかな摘めとや

鷹司殿の七十賀の屛風に子日したるかたかきたる所によめる　赤染衛門

萬代のためしに君がひかるれば子の日の松もうらやみやせむ

題しらず　新院御製

子の日すと春の野ごとに尋ぬれば松にひかるる心地こそすれ

梅花遠薫といふ心を　源時綱

吹きくれば香をなつかしみ梅の花ちらさぬほどの春風もがな

詞花和歌集　卷第一

春

堀河院御時百首歌奉りけるに春たつ心をよめる　大藏卿匡房

氷りゐし志賀の唐崎うちとけてささなみ寄するはる風ぞ吹く

寛和二年内裏歌合に霞をよめる　藤原惟成

きのふかも霰ふりしかしがらきのとやまの霞はるめきにけり

天德四年内裏歌合によめる　平兼盛

ふる里は春めきにけりみよし野のみかきがはらは霞こめたり（なイ）

はじめて鶯の聲を聞きてよめる　道命法師

たまさかにわが待ちえたる鶯の初音をあやなひとや聞くらむ

金葉和歌集終

在水鳥の下夢にだにの上

山の歌合に戀の心を　　隆覺法師

身の程を思ひしりぬる事のみやつれなき人のなさけなるらん

在面影下淺ましや上

戀の心を　　琳賢法師

あくといふことを知らばや紅のなみだに染むる袖やかへると

在逢ひ見ての下いつとなく上

巻第八　戀歌下

題しらず　　讀人しらず

いとせめて戀しき時は播磨なる餝摩(しかま)に染むるかちよりぞくる

在逢ふ事の下逢ふ事は上

七十になるまでつかさもなくて萬にあやしき事

をおもひつゞけて　源俊頼朝臣

なゝそぢに滿ちぬる潮の濱びさし久しくよにも埋れぬるかな

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

異本

卷第七　戀歌上

攝政左大臣家にて戀の心をよめる　藤原爲眞（興イ）朝臣

あふ事のなきをうき田の森に住む呼子烏こそ我が身なりけれ

賴めて不逢戀　藤原親隆朝臣

戀しなで心つくしに今までもたのむればこそいきのまつばら

鵜の水にうかべるを見て

あらうと見れどくろき鳥かな　頼算法師

さもこそは住の江ならめよとともに　讀人しらず

瀧の音のよるまさるを聞きて

よるおとすなりたきのしら糸　讀人しらず

くり返しひるもわくとは見ゆれども

柱をみて

奥なるをもやはしらとはいふ　成光

見わたせば内にもとをばたてゝけり　觀暹法師

ひくにはよわきすまひ草かな　　　讀人しらず

とる手にははかなくうつる花なれど

　　鳥を籠に入れ侍りけるが（軒にさしたりけるが夜雨にイ）横雨に濡れけるを見て

雨ふればきじもしととになりにけり

かささぎならばかからましやは

　　蓑蟲のうめの花咲きたる枝にあるを見て

うめの花がさきたるみのむし　　　律師慶暹

　まへなるわらはのつけける

あめよりは風ふくなとやおもふらむ

川といふ川ありかみより船のくだりけるを蔀あ
くる侍してとはせければ蓼と申すものかりてま
かるなりといふを聞きて口すさびにいひける

たでかる船のすぐるなりけり　　源頼光朝臣

これを連歌に聞きなして

朝まだきからろのおとの聞こゆるは　　相模母

花くぎは散るてふことぞなかりける　　讀人しらず

風のまにまにうてばなりけり　　前太政大臣家ゆふしで

すまひぐさといふ草のおほかりけるを引きすて
させけるを見て

かりはかまをばをしと思ひて　信綱

あゆを見て　讀人しらず

なにゝあゆるを鮎といふらむ

鵜舟にはとりいれし物をおぼつかな　匡房卿妹

和泉式部がかもにまゐりけるにわらうづに足をくはれてかみをまきたりけるを見て

ちはやぶるかみをばあしにまく物か　神主忠頼

是をぞしものやしろとはいふ　和泉式部

源頼光が但馬守にてのぼりける時舘の前にけた

かはら屋をみて　　　　　　　　　　　讀人しらず

かはらやの板ぶきにても見ゆるかな

つちくれしてや作りそめけむ　　　　　助成（俊イ）

しかの島をみて（つくしのしかイ）

つれなく立てるしかの島かな　　　　　爲助

ゆみはりの月のいるにもおどろかで　　國忠

宇治へまかりけるみちにて日頃雨のふりければ水の出でて賀茂川を男のはかまをぬぎて手にさげて渡るをみて

かも川をつるはぎにてもわたるかな　　頼綱朝臣

見て

春の田にすきいりぬべきおきなかなかのみなぐちに水をいれはや　僧正源覺

宇治入道前太政大臣

日の入るを見て

日の入るはくれなゐにこそ似たりけれあかねさすとも思ひけるかな　觀暹法師

平爲成

田中に馬のたてるを見て

田にはむ駒はくろにぞありけるなはしろの水にはかげと見えつれど　永源法師

永成法師

あづま人のこゑこそ北にきこゆなれ　　永成法師
陸奥國よりこしにやあるらむ　　律師慶範

ももぞのの花をみて

ももぞののももの花こそ咲きにけれ　　頼經法師
梅津のうめは散りやしぬらむ　　公資朝臣

賀茂の御社にて物つく音のしけるを聞きて

しめの内にきねの音こそきこゆなれ　　神主成助
いかなる神のつくにか有らむ　　行重

宇治にて田の中に老いたる男のふしたりけるを

かくてつひにおちいるとてよめる

たゆみなく心をかくる彌陀佛(みだほとけ)ひとやりならぬちかひたがふな

障子(屏風イ)のゑに天王寺の西門にて(よりイ)法師の船にのりて西ざまに漕ぎはなれて行くかたかける所をよめる

源俊頼朝臣

阿彌陀佛ととなふる聲をかぢにてや苦しき海を漕ぎ離るらむ

連歌

ゐたりける所の北のかたに聲なまりたる人の物いひけるを聞きて

極樂をおもふといへる事を
源俊頼朝臣

よもの海の波にただよふ水屑をも七重の網にひきなもらしそ

醍醐の舍利會に花のちるを見てよめる
珍海法師母

けふも猶をしみやせまし法のためちらす花ぞと思ひなさずば

地獄の繪に劍のえだに人のつらぬかれたるを見てよめる
和泉式部

あさましや劍の枝のたわむまでこは何のみのなれるなるらむ

人のもとに侍りけるに俄にたえいりてうせなむとしければ蔀のもとにかきいれて大路におきたりけるに草の露のあしにさはる程郭公のなくを聞きていきのしたによめる
田口重如

草の葉にかどではしたり郭公しでのやま路もかくやつゆけき

薬王品の心をよめる　懐尋法師

うき身をし渡すと聞けばあま小船のりに心をかけぬ日ぞなき

人のもとにて經供養しけるに五百弟子授記品の心を説けるに繫寶珠のことのたふとかりけるよしをよみてかづけものに結びつけて侍りけるを見てかへしによみ侍りける　權僧正永緣

いかにして衣の玉をしりぬらむおもひもかけぬ人もあるよに

依他の八のたとひを人々よみけるに此身如幻といへる事をよめる　懐尋（春イ）法師

いつをいつと思ひ撓みて陽炎のかげろふ程の世をすぐすらむ

常住心月輪といへる心をよめる　澄成法師

よと共に心のうちにすむ月をありと知るこそ晴るるなりけれ

弟子品の心をよめる　　僧正靜圓

吹き返すわしの山風なかりせばころものうらの玉をみましや

提婆品の心をよめる　　瞻西上人

法のためになふ薪にことよせてやがて浮世をこりぞはてぬる

皇后宮權大夫師時

けふぞ知るわしの高嶺にてる月を谷川くみしひとのかげとは

龍女成佛をよめる　　勝超法師

わたつみの底のもくづと見し物をいかでか空の月となるらむ

涌出品の心をよめる　　權僧正永縁

たらちねは黑髮ながらいかなればこのまゆ白き糸となるらむ

不輕品の心をよめる　　覺雅法師

ありがたき法をひろめし聖にぞうち見し人もみちびかれける

しける　　選子内親王

あみだ佛ととなふる聲に夢さめて西へかだふく(ながるるイ)月をこそみれ

依釋迦遺教念阿彌陀といふ事をよめる　　皇后宮肥後

教へおきて入りにし月のなかりせばいかで心を西にかけまし

清海上人後生を猶おそり思ひてねぶり入りたりけるに枕がみに僧の立ちてよみかけける歌

かくばかりこちてふ風のふくを見てちりの疑を殘さずもがな

普賢十願の文に願我臨欲命終時といへる文をよめる　　覺樹法師

命をも罪をも露にたとへけり消えばともにや消えむとすらむ

衆罪如霜露といへる文をよめる　　覺譽法師

罪はしも露ものこらず消えぬらむ長き夜すがらくゆる思ひに

たりけるをほの聞きてよませ給ひける　　三宮

見しままに我は悟をえてしかば知らせでとると知らざらめやは

月のあかかりける夜瞻西上人のもとへつかはしける　　僧正行尊

いさぎよき空のけしきを賴むかなわれまどはすな秋の夜の月

例ならぬ事ありける頃いかがなど思ひつづけて心細さに　　源行宗朝臣

いかにせむうき世の中にすみがまの果は煙となりぬべき身を

實範聖人山寺にこもりぬと聞きてつかはしける　　靜嚴法師

心にはいとひはてつと思ふらむあはれいづこも同じうき世を

八月ばかりに月あかかりける夜あみだの聖(上人イ)のとほりけるを呼びよせさせて里なる女房にいひ遣

月より三四月までいかにも雨のふらざりければ
なはしろもせでよろづに祈りさわぎけれどかな
はざりければ守能因歌よみて一宮にまゐらせて
雨いのれと申しければまゐりていのり申しける
歌　　　　　　　　　　　　　　　能因法師
天の川なはしろ水にせきくだせあまくだります神ならばかみ
　神感ありて大雨ふりて三日三夜やまずと家集に見えたり
心經供養してそのこころを人々によませ侍りけ
るに　　　　　　　　　　　　　　攝政左大臣
色も香も空しと說ける法なれど祈るしるしはありとこそ聞け
　法文のありけるを里なる女房のもとより宮に申
　さずともしのびてあからさまにとりてなど申し

陽明門院かくれおはしまして後御わざの事果て
て又の日雲のたなびけるを見てよめる
藤原資信(陰イ)

今ぞ知るおもひの果は世の中のうき雲にのみまじるものとは

白河院の女御かくれ給ひて後かの家の南面の藤
の花さかりに咲きたりけるを見てよめる
僧正行尊

さだめなき世をうき雲ぞあはれなるたのみし君が烟と思へば

兼房朝臣重服になりてこもりゐて侍りけるに出
羽辨がもとよりとぶらひたりけるを是がかへし
せよと申しければよめる
橘元任

草木まで思ひけりとも見ゆるかな松さへ藤のころもきてけり(たればイ)

範國朝臣に具して伊豫國にまかりたりけるに正(實イ)

悲しさのその夕暮のままならば有りへて人にとはれましやは

よめる　　権僧正永縁

夢にのみむかしの人をあひ見れば覺むるほどこそ別なりけれ

人のむすめ母のものへまかりたりける程におもき病をしてかくれなむとしける時かきおきて身まかりける歌　　讀人しらず

露の身のきえも果てなば夏草のはは如何にして逢はむとすらむ

小式部内侍うせてのち上東門院より年ごろ給はりけるきぬを亡きあとにもつかはしけるに小式部内侍とかきつけられたるを見てよめる　　和泉式部

諸共に苔のしたには朽ちずしてうづもれぬ名をみるぞ悲しき

したしき人におくれてわざのことはてて歸り侍りけるによめる　　平忠盛朝臣

外ながら世を背きぬと聞くからに越路の空は打ちしぐれつつ

律師長済かくれてのち母のそのあつかひをして
ありける夜の夢にみえける歌

たらちめの嘆きをつみて我はかくおもひの下になるぞ悲しき

顕仲卿女子におくれてなげき侍りけるころ程へ
てとひにつかはすとてよめる　大蔵卿匡房

その夢をとはば歎きやまさるとて驚かさでも過ぎにけるかな

従三位藤原賢子れいならぬ事ありてよろづ心ぼ
そくおぼえけるに人のもとよりいかがなど問ひ
て侍りければよめる　藤原賢子

古は月をのみこそながめしにいまは日をまつわが身なりけり

身まかりてのち久しうなりにける母を夢にみて

玉匣かけごに塵もすゑざりしふたおやながらなき身とをしれ

大路に子をすてて侍りけるおしくくみに書きつけ侍りける歌

身にまさる物なかりけり緑子はやらむ方なくかなしけれども

阿波守知綱基イにおくれ侍りけるころ流されたりける人のゆるされて歸りたりけるを聞きてよめる　藤原知陰信イ母

流れてもあふせありけり涙川きえにしあわをなににたとへむ

心地例ならず侍りけるころ人のもとよりいかがなど申したりければよめる　讀人しらず

呉竹のふししづみぬる露の身もとふ言の葉におきぞゐらるる

範永朝臣出家しぬと聞きて能登守にてはべりけるころ國よりいひつかはしける　藤原通宗朝臣

うかりしに秋は盡きぬと思ひしを今年も蟲のねこそなかるれ

かへし　藤原知陰（信イ）

蟲の音はこの秋しもぞなきまさる別のとほくなるここちして

下﨟にこえられて歎き侍りけるころよめる　源俊頼朝臣

せきもあへぬ淚の川は早けれど身のうき草はながれざりけり

律師實源がもとに知らぬ女房の佛供養せむとてよばせ侍りければまかりて見れば事もかなはずげなるけしきを見てかたのごとく急ぎくやうして立ちける程にすだれの內より女房手づから衣ひとへとまきゐの手箱をさし出したりければ從僧してとらせかへりて見ればしろがねの箱のうちに書きて入れたりける歌　讀人しらず

もとより何事にかなど尋ねて侍りければつかはしける　平　基綱

櫻ゆゑいとひし風の身にしみて花よりさきに散りぬべきかな

後三條院かくれおはしまして後五月五日一品宮の御帳にさうぶふかせ侍りけるに櫻のつくり花のさされたりけるを見てよめる　藤原有祐朝臣

あやめ草ねをのみかくる世の中にをりたがへたるはな櫻かな

北方うせ侍りて後天王寺にまゐりける道にてよめる　六條右大臣

難波江（潟イ）のあしのわかねのしげければ心もゆかぬ船出をぞする

郁芳門院かくれおはしまして又の年の秋知陰（信イ）がりつかはしける　康資王母

金葉和歌集　卷第十

雜部下

公實卿かくれ侍りて後かの家にまかりたりけるに梅花さかりに咲きけるをみて枝にむすびつけて侍りける歌　藤原基俊

むかし見しあるじ顏にも梅が枝の花だにわれに物がたりせよ

かへし　中納言實行

ねにかへる花の姿の戀しくばただこのもとをかたみとは見よ

人々あまた具してはな見ありきてかへりてのち風おこりてふしたりけるに具して花見ける人の

堀河院御時源俊重が式部丞申しける申文にそへて頭辨重資がもとへつかはしける　源俊頼朝臣

日のひかりあまねき空のけしきにも我が身一つは雲隠れつつ

是れを奏しければ内侍周防をめしてこれが返しせよとおほせ事ありければつかうまつれる　周防内侍

何か思ふ春のあらしに雲晴れてさやけき影はきみぞ見るべき

そのたびなりにけりと云々

思ふ事侍りける頃よめる　　参議師頼

いたづらに過ぐる月日を數ふれば昔をしのぶ音ぞなかれける

鏡をみるに影のかはりゆくを見てよめる　　源師賢朝臣

變り行くかがみの影をみるからにおいその森の歎きをぞする

前太政大臣家に侍りける女を中將忠宗朝臣と少將顯國とともにかたらひ侍りけるに忠宗にあひにけりその後程もなく忘られけりと聞きて女のがりいひつかはしける　　源顯國朝臣

こゆるぎのいそぎて逢ひしかひもなく波よりこずと聞くは誠か

藏人親隆がかうぶり給はりて又の日つかはしける　　藤原公敎

雲の上になれにし物を蘆鶴の逢ふことかたにおりゐぬるかな

石だたみありけるものを君に又しくものなしと思ひけるかな
大原の行蓮聖人がのイもとへ小袖つかはすとてよめる
天台座主仁覺
憐まむぶイと思ふ心はひろけれどはぐくむ袖のせばくもあるかな
百首歌の中に述懷の心をよめる
源俊頼朝臣
世の中はうき身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり
男につきて越前國にまかりたりけるに男心かはりて常にはしたなければ都なる親のもとへいひつかはしける
讀人しらず
うちたのむ人の心はあらち山こしぢくやしき旅にもあるかな
かへし
おや
おもひやる心さへこそくるしけれあらちの山の冬のけしきはなイ

る　　　　　　　　　　　　　　周防内侍

住みわびて我さへのきの忍ぶ草しのぶかたかたしげき宿かな

賀茂成助に初めてあひてもの申しけるついでにかはらけとりてよめる　　津守國基

聞きわたるみたらし川の水きよみそこの心をけふぞみるべき

かへし　　賀茂成助

住吉のまつかひありて今日よりはなにはの事も知らす計りぞ

皇后宮弘徽殿におはしましける頃俊頼西面のほそどのにて立ちながら人に物申し侍るに夜の更けゆくままにくるしかりければ土にゐたりけるをみて疊をしかせばやと女の申しければ石疊しかれて侍るめりと申すを聞きてよめる　　皇后宮大貳

大中臣輔弘祭主にもあらざりけるころ祭主にな
させ給へと太神宮に申しこひて寐いりたりける
夜の夢にまくらがみに知らぬ人の立ちてよみか
けける歌

草の葉の（にイ）なびくもまたず（しらでイ）露の身のおき所なくなげくころかな

六條右大臣六條の家つくりていづみなど掘りて
とくわたりて見よなど（によもイ）申したり（をイ）ければよめる　顯雅卿母

千年まですまむ泉の底きよみかげならべむとおもひしもせじ

宇治平等院（寺イ）の主になりて宇治にすみつぎて比叡
の山の方をながめやりてよめる　忠快法師

宇治川のそこのみくづとなりながらなほ雲かかる山ぞ戀しき

家を人にはなちてたつとて柱にかきつけ侍りけ

夜な夜なはまどろまでのみ有明のつきせずものを思ふ頃かな

上陽人苦最多少思苦老亦苦といへる心をよめる　源　雅　光

昔にもあらぬ姿になり行けどなげきのみこそおもがはりせね

青黛畫眉眉細長といへる事をよめる　源　俊　頼　朝　臣

さりともとかくまゆずみのいたづらに心細くも老いにける哉

年ひさしく修行しありきて熊野にてげんくらべしけるを秋家卿まゐりあひて見けるにことの外にやせおとろへて姿もあやしげにやつれたりければ見忘れてかたはらなる僧にいかなる人ぞことのほかにしるしありげなる人かななど申しけるを聞きてつかはしける　僧　正　行　尊

心こそ世をば捨てしかまぼろしのすがたも人に忘られにけり

爲仲朝臣陸奥守にて侍りける時延任しつと聞きてつかはしける　藤原隆資

まつ我はあはれ八十(やそぢ)になりぬるをあふくま川の遠ざかりぬる(ぞイ)

したしき人の春日にまゐりて鹿のありつるよしなど申しけるを聞きてよめる　藤原實光朝臣

三笠山神のしるしのいちじるくしかありけると聞くぞ嬉しき

屏風の爲にしかすがのわたり行く人たちわづらふかたかける所をよめる　藤原家經朝臣

ゆく人も立ちぞわづらふしかすがの渡りや旅の泊りなるらむ

題しらず　讀人しらず

身のうさを思ひしとけば冬の夜もとどこほらぬは涙なりけり　皇后宮美濃

ばよめる　　讀人しらず
葉隱れにつはると見えし程もなくこはうみ梅になりにける哉
堀河院の御時中宮の女房たちを亮仲實が紀伊守にて侍りける時若浦みせんとてさそひければ許多まかりけるにまからでつかはしける　　前中宮甲斐
人なみに心ばかりは立ちそひて誘はぬわかのうらみをぞする
保實卿ほかにうつりて後かのもとの所につねに見ける鏡をとがせ侍りければくらきよしを申しけるを聞きてよめる　　藤原實信母
ことわりや曇ればこそはます鏡うつりし影もみえずなるらめ
月の入りぬるを見てよめる　　源師賢朝臣
西へゆく心はたれも有るものをひとりな入りそやまのはの月

日影にはなき名立ちけりをみ衣きてみよとこそいふべかりけれ

經信卿に具してつくしに侍りける（まかりたるにイ）ころ肥後守盛房野太刀（劔イ）のよきあり見せむなど申して程へにければいかになどたづねられて（とおどろかしたりければイ）忘れたるよしを申しければよめる　源俊頼朝臣

なき陰に懸けける太刀もある物をさやつかのまに忘れ果てぬる

大峯の神仙といへる所に久しう侍りければ同行どもみなかぎり有りてまかりにければ心細さによめる　僧正行尊

見し人はひとり我が身にそはねども後れぬものは涙なりけり

ただならぬ人のもてかくしてありけるに子をうみてけるが許より熟みたる梅をおこせたりけれ

身のうさもとふ一もじにせかれつつ心つくしの道はとまりぬ

男のなかりける夜こと人をつほねに入れたりけるにもとの男まうできあひたりければさわぎてかたはらのつぼねの壁のくづれよりくぐりてにがしやりての又の日その逃したるつぼねの主のがりよべの壁こそうれしかりしなどいひに遣したりければよめる

讀人しらず

寐ぬるよのかべ騒がしく見えしかど我が違ふれば事なかりけり

源頼家がもの申しける人の五節に出で侍りけるを聞きてまことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのくもりなきよにとよみて遣したりければかへしによめる

源光綱母

蜩（ひぐらし）の聲ばかりするしばの戸は入り日のさすにまかせてぞ見る

題しらず　藤原仲眞朝臣

年ふれば我がいただきにおく霜を草のうへとも思ひけるかな

殿上おり侍りけるころ人の殿上しけるを聞きて
よめる　源行宗朝臣

うらやまし雲のかけはしたち返りふたたび上（のぼ）る道をしらばや

殿上申しける頃ゆるされざりければよめる　平忠盛朝臣

思ひきやくもゐの月をよそに見て心のやみにまどふべしとは

かたらひ侍りける人のかれがれになりければこゝ
と人につきてつくしの方へまかりなむとしける
を聞きて男のもとよりまかるまじきよしを申し
たりければいひ遣しける、　内大臣家小大進

のきばうつ眞白の鷹の餌袋にをぎゑもささでかへしつるかな

後冷泉院の御時近江國より白き鳥を奉りたりけるをかくして人にも見せさせ給はざりければ女房たちゆかしがり申しければおのおの歌よみて奉れさてよくよみたらむ人にみせむとおほせ事ありければつかうまつれる

少將內侍

たぐひなく世に面白き鳥なればゆかしからずとたれか思はむ

甲斐國よりのぼりてをばなる人のもとにありけるがはかなき事にてそのをばのなありそとておひいだしたりければよめる

讀人しらず

鳥の子のまだ卵ながらあらませばをはといふ物はおひ出でざらまし

百首歌のなかに山家をよめる

修理大夫顯季

れいならぬ事ありてわづらひけるころ上東門院に柑子たてまつるとて人にかかせて奉りける　　堀河右大臣

つかへつるこのみの程を數ふればあはれ梢になりにけるかな

御かへし　　上東門院

すぎ來ける月日の數もしられつつこのみを見るも哀なるかな

僧正行尊まうできてよるとどまりてつとめて歸りけるとて獨鈷を忘れたりける返しつかはすとてよめる　　大納言宗通

草枕さこそは旅（旅寐イ）のとこならめ今朝しもおきてかへるべしやは

をとこ心かはりてまうで來ず成りにける後おきたりけるゐぶくろをとりにおこせたりければ書きつけてつかはしける　　櫻井尼

男かれがれになりて程へてたがひにわすれて後人にしたしくなりにけりなど申すと聞きてなげきける人にかはりてよめる
春宮大夫公實
無き名にぞ人のつらさは知られける忘られしには身をぞ恨みし
大貳資通忍びて物申しけるを程もなくさぞなど人の申しければよめる
相模
いかにせむ山田にかこふ垣柴のしばしのまだに隠れなき身を
肥後内侍をとこに忘られて歎きけるを御覽じてよませ給ひける
堀河院御製
忘られてなげく袂をみるからにさもあらぬ袖の萎れぬるかな
水車をみてよめる
僧正行尊
早き瀬にたえぬばかりぞ水車われもうきよにめぐるとを知れ

和泉式部石山にまゐりけるに大津にとまりて夜ふけて聞きければ人のけはひあまたしてののじりけるを尋ねければあやしの賤の（下人のイ）女がよねしらげ侍るなりと申しけるを聞きてよめる

鷺のゐる松原いかにさわぐらむしらげばうたて里とよみけり　　和泉式部

公實卿のもとにまかりたりけるに侍らざりければ出居におきたりける小弓をとりて侍（さぶらひ）にこれはおろしつとふれて出でにけりかの卿かへりて弓をたづねければ時房まうできてとりつと申しければおどろきて院の御弓ぞとくかへせといひにつかはしたりければ御弓につけて遣しける歌　　藤原時房

梓弓さこそはそりの高からめはるほどもなくかへるべしやは

百首歌の中に夢の心をよめる　修理大夫顯季

うたゝねの夢なかりせば別れにし昔のひとをまた見ましやは（も見ましやイ）

百首歌に旅（宿イ）の心をよめる　參議師頼

小夜中に思へばかなしみちのくのあさかの沼に旅寐してけり

この集撰じける時歌こはれておくるとてよめる　藤原顯輔朝臣

家の風吹かぬものゆゑはつかしの森の言の葉ちらしはてつる

しほ湯あみに西の海のかたへまかりたりけるに

みるといふ物をみづからつみて（とりイ）都なるむすめの

もとへつかはすとて　平康貞女

磯菜つむ入江の波のたちかへり君みるまでのいのちともがな

かへし　むすめ

長居するあまのしわざとみるからに袖のうらにもみつ涙かな

りの程とのゐ物のれうにきぬをかりて程過ぎて是を忘れて今まで返さざりける事など申したりける返事にいひつかはしける

前齋宮内侍

返さじとかねて知りにき唐衣こひしかるべき我が身ならねば

和泉式部保昌に具して丹後國に侍りけるころ都に歌合のありけるに小式部内侍歌よみにとられて侍り(まゐイ)けるを中納言定頼つぼねのかたにまうできて歌はいかがせさせ給ふ丹後へ人はつかはしてけむや使はまうでこずやいかに心もとなくおぼすらむなどたはぶれて立ちけるをひきとどめてよめる

小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず(ぬイ)あまのはしだて

天の川これやながれのするゑならむ空より落つるぬのびきの瀧　讀人しらず

選子内親王いつきにおはしましけるとき女房に物申さむとてしのびてまゐりたりけるに侍(さぶらひ)どもいかなる人ぞなどあらく申してとはせ侍りければたたうがみに書きておかせ侍りける　藤原惟規

神垣は木の丸どのにあらねどもなのりをせねば人とがめけり

郁芳門院伊勢におはしましける時あからさまに下りて侍りける時思ひがけず鐘の聲のほのかにきこえければよめる　六條右大臣北方

神垣のあたりと思ふにゆふだすき思ひもかけぬかねの聲かな

前齋宮伊勢におはしましける時寮頭保俊御まつ

つましながらひきならしけるを聞きて口ずさび

のやうにていひかけける　　攝津

琴の音や松ふく風に通ふらむ千世のためしにひきつべきかな

かへし　　美濃

うれしくも秋のみやまの松風にうひことのねの通ひけるかな

月のあかかりける夜人の琴ひくを聞きてよめる　　内大臣家越後

琴の音は月の影にもかよへばや空にしらべの澄みのぼるらむ

伊勢國の二見浦にてよめる　　大中臣輔弘

玉くしげ二見の浦のかひしげみまきゑに見ゆるまつのむら立

宇治前太政大臣布引の瀧見にまかりたりけると

もにまかりてよめる　　大納言經信

白雲とよそに見つればあしびきの山もとどろに落つる瀧つ瀬

けるにもれて公實卿のもとにつかはしける　　源　師　光

かすが山みねつゞき照る月影にしられぬたにの松もありけり

僧都賴基光明山にこもりぬと聞きてつかはしける　　橘　能　元

うらやまし浮世を出でていかばかり隈なき峯の月を見るらむ

かへし　　僧都賴基

もろともに西へやゆくと月影のくまなき峯をたづねてぞこし

郁芳門院伊勢におはしましける時あからさまに下りけるにすゞか川を渡りける時よめる　　六條右大臣北方

早くよりたのみわたりしすゞか川思ふことなる音ぞきこゆる

源仲正がむすめ皇后宮に初めて參りたりけるに琴ひくと聞かせ給ひてひかせさせ給ひければつ

良暹法師をうらむる事ありけるころむつき一日にまうできて又久しう見えざりければいひ遣しける

律師慶範

春の來しその日つらうはとけにしを又何事にとどこほるらむ

對山待月といへる事をよめる

藤原正季

このよには山の端出づる月をのみ待つ事にてもやみぬべき哉

山家にて有明の月を見てよめる

僧正行尊

木の間もる片われ月のほのかにも誰か我が身を思ひ出づべき

山寺に月のあかかりけるに經のたふときを聞きて涙の落ちければよめる

平康貞母

いかでかは袂につきのやどらましひかり待ちとる涙ならずば

宇治前太政大臣時の歌よみどもに月の歌よませ

一品宮天王寺にまゐらせ給ひて日頃御念佛せさせ給ひけるに御とものの人々住吉にまゐりて歌よみけるによめる

源俊頼朝臣

いくかへり花咲きぬらむ住吉の松もかみ代のものとこそ聞け

田家老翁といへる事をよめる

中納言基長

ますらをは山田の庵に老いにけり今いく秋にあはむとすらむ

仁和寺にすませ給ひけるころいつまでさてはなど都より人のたづね申したりければよませ給へる

三宮

かくてしもえぞ住むまじき山里のほそ谷川のこころぼそさに

（しも：イ のみ）

大峰の笙の岩やにてよめる

僧正行尊

草の庵をなに露けしと思ひけむ漏らぬいはやも袖はぬれけり

家が許につかはしける　藤原惟信朝臣

山吹もおなじかざしのはななれどくもゐの櫻なほぞこひしき

隆家卿太宰帥に二たびなりて後のたび香椎御社にまゐりたりけるに神主木のもとの杉の葉を折りて帥のかうぶりにさすとてよめる　神主大膳武忠

千早振かしひの宮のすぎの葉をふたたびかざすわがきみぞ君

源心座主になりてはじめて山にのぼりたりけるにやすみたる所にて歌よめと申しければよめる　良暹法師

年をへて通ふ山路はかはらねど今日はさかゆく心地こそすれ

藤原基清が藏人にてかうぶりたまはりておりにければ又の日つかはしける　藤原家綱

思ひかね今朝はそらをやながむらむ雲のかよひぢ霞へだてて

とたづねて侍りければつかはすとてうへに書き
つけ侍りける歌　　源行宗朝臣

いくとせにわれなりぬらむ諸人の花みる春をよそに聞きつつ

山ざとに人々まかりて花の歌よみけるによめる　　源　定信

みな人はよしののやまの櫻花をりしらぬ身やたにのうもれ木

後三條院かくれさせおはしまして後又のとしの
春さかりなる花をみてよめる　　右近將曹秦兼房

こぞみしに色もかはらず咲きにけり花こそ物は思はざりけれ

つかさめしの頃よろづにうらやましき事のみ聞
えければよめる　　藤原顯仲朝臣

としふれど春にしられぬ埋木は花のみやこに住むかひぞなき

藏人おりて臨時祭の陪從し侍りけるに右中辨伊

圓宗寺の花を御覽じて後三條院の御事などおぼしいでてよませ給へりける　三宮

植ゑおきし君もなき世に年へたる花はわが身の心地こそすれ

花見御幸を見て妹の内侍のもとに遣しける　權僧正永縁

行末のためしと今日をおもふとも今いくとせか人にかたらむ

かへし　内侍

いくとせも君ぞかた（かイ）らむつもりゐて面白かりし花のみゆきを

大峯にておもひもかけず櫻の花の咲きたりけるを見てよめる　僧正行尊

もろともにあはれとおもへ山櫻はなよりほかに知る人もなし

堀河院の御時殿上人あまたぐして花見ありきけるに仁和寺に行宗朝臣ありと聞きて懷紙やある

金葉和歌集 巻第九

雜部上

むかし道方卿に具して筑紫にまかりて安樂寺にまゐりて見侍りけるみぎりの梅の我が任にまゐりてみれば木のすがたはおなじさまにて花の老木になりて所々さきたるを見てよめる
大納言經信
神垣にむかしわが見しうめの花ともに老木となりにけるかな

山家鶯といへる事を人々によませ侍りけるついでに
攝政左大臣
山里もうきよのなかを離れねば谷のうぐひす音をのみぞなく

る　源顯國朝臣

我が戀はしづのしげ糸すぢよわみ絶え間は多くくるは少なし

戀の歌人々よみけるによめる　源俊頼朝臣

淺ましやこは何事のさまぞとよ戀せよとてもうまれざりけり

寄夢戀をよめる　源行宗朝臣

つらかりし心ならひに逢ひみても猶夢かとぞうたがはれける

俊忠卿の家にて戀の歌十首人々よみけるにおと

しめてあはずといへる事をよめる　源俊頼朝臣

奇しきも嬉しかりけりおとしむる其言の葉にかかると思へば

數ならぬ身をうぢ川のはしばしといはれながらも戀ひ渡る哉

戀歌十首人々よみけるに來不留といふ事をよめる

修理大夫顯季

玉津島きしうつ波のたちかへりせないでましぬ名殘ひさ(さびイ)しも

戀の歌とてよめる

春宮大夫公實

逢ふことは舟人よわみ漕ぐ舟のみをさかのぼる心地こそすれ

顯仲卿母

心からつきなき戀をせざりせば逢はでやみには迷はざらまし

見かはしながら恨めしかりける人によみかけける

內大臣家小大進

かくばかり戀の病はおもけれど目にかけさげてあはぬ君かな(逢戀イ)

攝政左大臣家にて時々あへりといへる事をよめ

圖るめる言のよきのみ多けれど空歎きをばこるにやあるらむ

逢ふ事の今はかたみのめをあらみもりて流れむ名こそをしけれ

逢ふ事は（ぞイ）かたねぶりなる磯額（いそびたひ）ひ（ぶイ）ねりふすともかひやなからむ

近江にか有りといふなるかれいひ山君は越えけり人とねくさし

逢ふ事のかた野に今は成りぬれば思ふがりのみ行くにやあるらむ

あふことはながめふる屋の板廂（いたびさし）さすがにかけて年のへぬらむ

かしがまし山の下ゆくさされ水あなかまわれもおもふ心あり

ぬすびとといふもことわりさ夜中に君が心をとりにきたれば

はなうるしこやぬる人のなかりけるあなはらぐろの君が心や

寄石戀といへる事をよめる　　前齋院六條

逢ふことをとふ石神のつれなきにわが心のみうごきぬるかな

攝政左大臣家にて戀のこころをよめる　　源雅光

返し　　　　　　　　　　左兵衛督實能

忘られむ名は世にふらじ五月雨もいかでか暫(しはし)をやまざるべき

題しらず　　　　　　　　讀人しらず

あま雲のかへしの風の音せぬは思はれじとのこころなるべし

足引のやまのまにまにたふれたるからきは獨ふせる(ぬるよイ)なりけり

津の國のまろやは人をあくた河君こそつらき瀬々は見えしか

あふみてふ名は高島にきこゆれどいづらはここ(くイ)にくり本の里

かさとりの山によをふる身にしあれば炭やきもをる我が心哉

み熊野に駒のつまづく青つづら君こそまろがほだしなりけれ

こりつむる歎きを如何にせよとてか君にあふご(いたくイ)の一筋もなき

あふごなき物としるしる何にかは歎きを山とこりはつむらむ

うとましや木の下蔭のわすれ水いくらの人のかげを見つらむ

すなと申しければよめる　源信宗朝臣

逢はぬ夜はまどろむ程のあらばこそ夢にもみきと人に語らめ

なき名たつといへる事をよめる　左京大夫經忠

人しれぬなき名はたてど唐衣かさねぬそではなほぞつゆけき

人をうらみてよめる　大中臣輔弘女

あぢきなく過ぐる月日ぞ恨めしき逢ひ見し程を隔つと思へば

三井寺にて人々戀歌よみけるによめる　僧都公圓

つらしとも思はむ人はおもはなむ我なればこそ身をば恨むれ

かたらひける女のもとにまからむなど申しけれどもさはる事ありてまからざりければ五月雨のころおくりて侍りける　讀人しらず

五月雨の空だのめのみ隙なくて忘らるる名ぞ世にふりぬべき

梓弓かへるあしたのおもひには引きくらぶべき事物イのなきかな
人のもとよりせめて袖ぬらすさまを見せばやな
どいはせたりければよめる　皇后宮少將
うらむともみるめもあらじ物ゆゑに何かは蜑の袖ぬらすらむ
旅宿戀といへることをよめる　修理大夫顯季
戀しさをいも知るらめや旅寐して山のしづくに袖ぬらすとは
人の夕方まうでこむと申したりければよめる　一宮紀伊
恨むなよかげ見えがたき夕月夜おぼろげならぬ雲間まつ身ぞ
藏人にて侍りける頃内をわりなく出でて女のも
とにまかりてよめる　藤原永實
三日月のおぼろげならぬ戀しさにわれてぞ出づる雲の上より
周防内侍したしくなりて後ゆめゆめこの事もら

人はいさありもやすらむ忘られて訪はれぬ身こそなき心地すれ

寄關戀をよめる　源俊頼朝臣

なこそてふことをば君が言ぐさを關の名ぞとも思ひけるかな

としごろ物申しける人のたえて音づれざりければつかはしける　讀人しらず

はやくよりあさき心を見てしかばおもひたえにき山川のみづ

題しらず

もらさばや細谷川のうもれみづかげだに見えぬ戀にしづむと

をとこの今日は方たがへに物へまかるといはせ侍りければつかはしける

君こそは一夜めぐりの神ときけなに逢ふことの方たがふらむ

後朝戀の心を　藤原顯輔朝臣

目のまへにかはる心をなみだ川ながれてやとも思ひけるかな

國信卿の家の歌合に初戀の心をよめる　源　兼昌

今日こそはいはせの杜の下紅葉色に出づればちりもしぬらめ（むイ）

雪の朝に出羽辨がもとより歸り侍りけるにかれ

よりおくりて侍りける　出　羽　辨

おくりては歸れと思ひし魂（たましひ）の行きさすらひて今朝はなきかな

かへし　大納言經信

冬の夜の雪げの空にいでしかど影よりほかにおくりやはせし

すみかを知らせぬ（ざるイ）戀といへる事をよめる　前齋院六條

行方（ゆくへ）なくかき籠むるにぞひきまゆのいとふ心の程は知らるる

よにあらんかぎりは忘れじと契りたりける人の

久しう音もせざりければよめる　讀人しらず

あふ事はいつともなくてあはれわが知らぬ命に年をふるかな
　ある所にて女房のながき髮を打ちいだして見せければよめる　藤原顯綱朝臣
人しれず思ふ心をかなへなむかみあらはれて見えぬとならば
　堀河院の御時艷書合によめる　中納言俊忠
人しれぬおもひありその浦風に波のよるこそいかまほしけれ
かへし　一宮紀伊
音にきく高師の浦のあだなみはかけじや袖のぬれもこそすれ
　くれには必ずとたのめたりける人のはつかの月出づるまで見えざりければよめる　攝政家堀河
契りおきし人もこずゑの木の間より頼めぬ月の影ぞもりくる
　心かはりたる人のもとへつかはしける　江侍從

物おもひ侍りけるころ月のあかかりける夜あかざりし面影つねよりも堪へがたくてよめる　橘俊宗女

つれづれと思ひぞ出づる見し人をあはで幾月ながめしつらむ

題しらず　上總侍從

あさましや涙にうかぶ我身かなこころかろくは思はざりしを

物へまかりける道にはしたもののあひたりけるをとはせ侍りければ上東門院に侍るすまひこそとなむ申すといひけるを聞きてよめる　源緣法師

名きくより兼ても移る心かないかにしてかは逢ふべかるらむ

戀の心をよめる　民部卿忠敎

戀ひわびてたえぬ思ひの煙もやむなしきそらの雲となるらむ

女のもとへつかはしける　大納言經信

山里のおもひかけひにつらゐてとくる心のかたげなるかな

山の歌合にこひの心をよめる　讀人しらず

たまさかに逢ふ夜は夢のここちして戀しもなどか現なるらむ

いかでかとおもふ人のさもあらぬさきにさぞな

ど人の申しければよめる　中原章經

こひわぶるきみにあふてふ言の葉は僞さへぞうれしかりける

伊賀少將がもとへつかはしける　前中納言資仲

よもの海の浦々毎にあされども怪しく見えぬいけるかひかな

かへし　伊賀少將

たまさかに波の立ちよる浦々は何のみるめのかひかあるべき

忍戀の心をよめる　源親房

ものをこそしのべばいはね岩代のもりにのみもるわが涙かな

逢ふ事もなぎさにあさる蘆鴨のうきねをなくと人しるらめや

人をうらみてよめる　盛經母

さのみやは我が身の憂になし果てて人のつらさを恨みざるべき

攝政左大臣の家にて戀の心をよめる　源雅光

名にたてるあはでの浦の蜑だにもみるめは潛く物とこそきけ

うらめしき人のあるにつけて昔思ひ出でらるる

事ありて　前齋宮甲斐

いま人の心をみわのやまにてぞ過ぎにし方はおもひ知らるる

わすれたる人のおもひ出でておとづれたるによ

める　橘俊宗女

めづらしや岩間によどむ忘水いく世をすぎておもひ出づらむ

皇后宮にて山里戀といへる事をよめる　左京大夫經忠

戀の心をよめる（人のがり遣しけるイ）　左兵衛督實能

我が戀の思ふばかりの色にいでばいはでも人にみえまし物を

もろともに郭公をまちけるにさはる事ありて入りにける後鳴きつやなどたづねけるを聞きてよめる　春宮大夫公實

郭公くもゐのよそになりしかばわれぞ名殘のそらになかれし（がめイ）

冬戀といへる事を　藤原成通朝臣

水の上（おもはイ）にふる白雪のあと（かたイ）もなく消えやしなまし人のつらさに

多聞といへる童をよびにつかはしたりけるに見えざりければ月のあかかりける夜よめる　權僧正永縁

まつ人のおほぞらわたる月ならばぬるる袂にかげは見てまし

寄水鳥戀　攝政左大臣

いろみえぬ心ばかりはしづむれど涙はえこそしのばざりけれ

題しらず　讀人しらず

逢ふ事は夢ばかりにて止みにしをさこそ見しかと人に語るな

大納言經信

蘆垣のひまなくかかるくものいの物むづかしくしげるわが戀

藤原忠隆

おさふれどあまる涙はもるやまのなげきに落つる雫なりけり

橘俊宗女

なき名たちける頃月をみてよめる

いかにせむなげきの森は茂けれど木の間の月の隱れなき世を

もの申しける人の久しう音もせざりければ遣し

ける　前齋院肥後

蘆ぶき(かやィ)のこや忘らるるつまならむ久しく人のおとづれもせぬ

戀の歌をよみける所にてよめる　源俊頼朝臣

忘草しげれるやどを來てみれば思ひのきより生ふるなりけり

人をうらみて　讀人しらず

今よりはおもひもいでじ恨めしといふもたのみのかかる契は

逢不遇戀をよめる　左兵衛督實能

思ひきや逢ひ見し夜はの嬉しさに後のつらさの増るべしとは

人をうらみけるころ心地例ならずおぼえければよめる　讀人しらず

あはずともなからん世には思ひいでよ我ゆゑ命絶えし人かと

女のがりつかはしける　藤原長實

するすみも落つる涙に洗はれて戀しとだにもえこそ書かれね

家の歌合に初戀を　中納言國信

わぎも子がころたちききし唐衣その夜の露にそでは濡れけり（にき イ）

我をばかれがれになりてこと人の許へまかると聞きてつかはしける　讀人しらず

ことわりや思ひくらぶの山櫻にほひまされるはなを愛づるも

郁芳門院根合に戀の心をよめる　周防内侍

戀ひわびてながむるそらの浮雲やわがしたもえの烟なるらむ

人をうらみて五月五日につかはしける　前齋宮河内

あふ事のひさしにふける菖蒲草ただかりそめの妻とこそ見れ

戀の心をよめる　太宰大貳長實

つらきをも思ひもしらぬ身の程に戀しさいかで忘れざるらむ（うきを イ）

題しらず　前中宮上總（齋 イ）

さきの世の契をしらではかなくも人をつらしと思ひけるかな

みちのくのおもひしのぶにありながら心にかかるあふの松原

戀の心をよめる　皇后宮權大夫師時

人しれぬこひをしすまの浦人は泣きしほたれて過すなりけり

奈良の人々百首の歌よみけるに恨の心をよめる　權僧正永緣

思はんとたのめし人の昔にもあらずなるみのうらめしきかな

戀の心（歌とてイ）をよめる　隆源法師

くるまも定なき世に逢ふ事をいつともしらで戀ひ渡るかな

藏人家時かれがれになりけるを恨みていひつかはしける　前中宮越後

人心あさ澤みづのねぜりこそこるばかりにも摘ままほしけれ

俊忠卿の家にて戀の歌十首人々よみけるに立聞戀といへる事をよめる　修理大夫顯季

月增戀といへる事をよめる　　　　　内　大　臣

いとどしく面影にたつこよひかな月見よとしも契らざりしを

戀の心を　　　　　　　　　　　　藤原顯輔朝臣

戀ひわびて寐ぬ夜つもれば敷妙の枕さへこそうとくなりけれ

鳥羽殿の歌合に戀の心をよめる　　藤原仲實朝臣

夜とともに袖のかわかぬ我がこひやとしまが磯によする白波

晩の戀といへる事をよめる　　　　中納言雅定

あふことを今宵と思はば夕づく日いる山のはも嬉しからまし

戀の心をよめる　　　　　　　　　右兵衛督伊通

山の井の岩もる水に影みればあさましげにもなりにけるかな

皇后宮にて人々こひの歌つかうまつりけるによめる　　　　太宰大貳長實

金葉和歌集　卷第八

戀歌下

初戀の心をよめる　　良暹法師

かすめてはおもふ心をしるやとて春の空にもまかせつるかな

公任卿家にて紅葉天橋立戀と三の題を人によませ侍りけるにおそくまかりて人々みな書きける程なりければ三の題をひとつによめるうた　　藤原範永朝臣

こひわたる人にみせばや松の葉もしたもみぢするあまの橋立

後朝戀の心をよめる　　源師俊朝臣

しののめの明けゆく空も歸るさは涙にくるる物にぞありける

權中納言俊忠卿家にて戀歌十首人々よみけるに

來不留戀といへる事をよめる　　源俊頼朝臣

おもひ草葉末にむすぶ白露のたまたまきては手にもたまらず

女を恨みて遣しける　　春宮大夫公實

蘆根はふ水の上とぞおもひしをうきは我が身にありける物を

重服になりたる人の立ちながらまうでこむと申したりければ遣しける　　橘俊宗女

立ちながらきたりとあはじ藤衣ぬぎすてられむ身ぞと思へば

戀の心を人にかはりてよめる　　前中（齋イ）宮上總

石（いは）ばしる瀧の水上はやくよりおとに聞きつつ戀ひわたるかな

皇后宮女別當

たのめおく言の葉だにもなきものをなににかかれる露の命ぞ

あだなりし人の心にくらぶれば花もときはのものとこそ見れ

百首の歌の中に戀の心をよめる　修理大夫顯季

我が戀はからす羽にかく言の葉のうつらぬ程はしる人もなし

攝政左大臣家にて戀の心をよめる　源雅光

あやにくにこがるる胸もある物をいかにかわかぬ袂なるらむ

寄山戀といへる事をよめる　大中臣公長朝臣

こひわびて思ひ入るさの山の端にいづる月日の積りぬるかな

つれなかりける人のもとにあふよしの夢を見てつかはしける　藤原公教

うたたねに逢ふと見つるは現にてつらきを夢と思はましかば

攝政左大臣家にて寄花戀といへる事をよめる　源雅光

吹く風にたへぬこずゑの花よりもとどめがたきは涙なりけり

皇后宮にて人々戀の歌つかうまつりけるに被返

書戀といへる事を　　美濃

戀ふれども人の心のとけぬには結ばれながらかへるたまづさ

人々に戀の歌よませ侍りけるに人にかはりて　　攝政左大臣

こころざし淺茅がするゑにおく露のたまさかにとふ人は賴まじ

寄三日月戀をよめる　　藤原爲忠

よひのまにほのかに人をみか月のあかで入りにし影ぞ戀しき

忍戀をよめる　　讀人しらず

忍ぶれどかひもなぎさのあま小舟波のかけても今はうらみじ（たのまイ）

雲居寺の歌合に人にかはりて戀の心をよめる　　三宮大進

なぞもかく身にかふばかり思ふらむ逢ひ見む事も人の爲かは

寄花戀　　攝政左大臣

いは（あイ）ぬまは下はふ蘆の根をしげみひまなき戀を君（人イ）しるらめや

かたらひける人のかれがれになりて恨めしかりけるにつかはしける　白河女御越中

待ちし夜のふけしを何に（とイ）歎きけむ思ひ絶えても過し（あられイ）ける身を

戀の心を人々よみけるによめる　律師實源

命をしかけて契りし中なればたゆるは死ぬるここちこそすれ

皇后宮・美濃

かきたえて程はへぬるをさヽがにの今は心にかからずもがな

旅宿戀を　攝政左大臣

見せばやな君しのびねの草枕たまぬきかくるたびのけしきを

堀河院の御時艶書合に（にイ）よめる　皇后宮肥後

思ひやれとはで日をふる五月雨の獨やどもる（せイ）そでのしづくを

なき名たてける人のもとにつかはしける　前齋宮內侍

あさましや逢瀨もしらぬ名取川まだきに岩間もらすべしやは（とイ）

逢不遇戀といへる事をよめる　左京大夫經忠

ひとよとはいつか契りし河竹のながれてとこそ思ひそめしか

俊忠卿の家にて戀歌十首人々によませ侍りける

に誓ひて逢はずといへる事をよめる　皇后宮式部

あひみての後つらからばよよをへてこれより增る戀に惑はむ

實行卿の家の歌合に戀の心をよめる　源俊賴朝臣

いつとなく戀にこがるる我が身よりたつや淺間の煙なるらむ

戀の歌とてよめる　藤原成通朝臣

後の世と契りし人もなき物を死なばやとのみ言ふぞはかなき　攝政左大臣

まうしければ歸りにける後ひと日はいかに思ひ
しなど申しければいひ遣しける　藤原正家朝臣
秋風に吹きかへされて葛の葉のいかにうらみし（うらむイ）物とかは知る
かたらひ侍りける人のあながちに申さする事の
ありければいひ遣しける　藤原有教母
從へ（はイ）ば身をば（もイ）すててむ心にもかなはでとまる名こそ惜しけれ
長實卿の家の歌合に戀の心をよめる　藤原忠隆
つつめども涙の雨のしるければ戀する名をもふら（ながイ）しつるかな
人にかはりて　春宮大夫公實
白菊のかはらぬいろもたのまれず移ろはでやむ秋しなければ
人を恨みてつかはしける　藤原惟規
島（鹽イ）風にしばだつ波のたちかへりうらみても猶たのまるるかな

菖蒲にもあらぬ眞菰をひきかけしかりのよどのの忘られぬ哉

閏五月侍りける年人をかたらひけるが後の五月

すぎてなど申しければよめる　　紀　季通

なぞもかくこひぢに立ちて菖蒲草あまり長びく五月なるらむ

人のもとに遣しける　　神祇伯顯仲

おのづから夜がるるほどのさ筵は涙のうきになると知らずや

そら事いひて久しうおとせぬ人のもとにいひつ

かはしける　　相模

ありふるもうき世なりけり長からぬ人の心をいのちともがな

人をうらみて遣しける　　藤原惟規

池にすむ我が名ををしのとりかへす物にもがなや人を恨みじ

女のもとにまかりたりけるに今宵はかへりねと

るりて旅の床の露けかりければよめる　太宰大貳長實

夜もすがら草の枕におく露はふるさと戀ふるなみだなりけりむらイ

忍戀の心をよめる　神祇伯顯仲

知らせばやほのみしま江に袖ひぢて七瀬のよどにおもふ心を

野分したりけるにいかがなどおとづれたりける人の其後又音もせざりければ遣しける　相模

荒かりし風の後より絶えぬるは蜘手にすがく糸にやあるらむ

國信卿の家の歌合に夜戀の心をよめる　源俊頼朝臣

よとともに玉ちるとこのすが枕見せばや人に夜半のけしきを

五月五日わりなくもていでたる所にこもといふものをひきたりけるを忘れがたさにいひ遣しける　相模

戀すてふもじの關守いく度かわれかきつらむこころづくしに
左兵衞督實能

命だにはかなからずば年ふともあひ見む事を待たましものを
後朝の心をよめる
源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひみても猶夢かとぞうたがはれける
堀河院御時の艶書合によめる
春宮大夫公實

思ひあまりいかでもらさむ奥山のいはがきこむる谷のした水
戀の心をよめる
藤原顯輔朝臣

年ふれど人もすさめぬ我がこひやくち木の杣の谷のうもれぎ
あるまじき人をおもひかけてよめる
讀人しらず

いかにせむ數ならぬ身にしたがはでつつむ袖より落つる涙を
院の熊野にまゐらせおはしましける時御迎にま

ふみそめておもひかへりし紅の筆のすさびをいかで見せけむ（まし イ）

實行卿家の歌合に戀の歌の心をよめる　長實卿母

知るらめや淀の繼橋よとともにつれなき人を戀ひわたるとは

藤原道經

戀ひわびておさふる袖や流れ出づる涙の川のゐぜきなるらむ

少將公教母

ながれての名にぞ立ちぬる涙川人目づつみをせきしあへねば

題しらず　皇后宮右衛門佐

涙川そでのゐぜきも朽ちはててよどむかたなき戀もするかな

源顯國朝臣

かくとだにまだいはしろの結び松むすほほれたるわが心かな

女のもとにつかはしける　藤原顯輔朝臣

ながむれば戀しき人のこひしきにくもらばくもれ秋の夜の月

題しらず　讀人しらず

つらしとも愚なるにぞいはれけるいかに恨むと人にしらせむ

もの申しける人の前中宮にまゐりにければなごりを戀ひて月のあかかりける夜いひつかはしける

藤原知房朝臣

面かげはかずならぬ身にこひられて雲井の月を誰とみるらむ

さはる事ありて久しうおとづれざりける女のもとよりいひ送り侍りける

讀人しらず

淺ましやなどかきたゆる藻鹽草さこそは蜑のすさびなりとも

文ばかりおこせていひたえにける人の許にいひ遣しける

內大臣家小大進

寄水烏戀といへることをよめる　源師俊朝臣

水鳥の羽風にさわぐさざなみのあやしきまでもぬるる袖かな

寄夢戀といへる事をよめる　左兵衛督實能

ゆめにだに逢ふとは見えよさもこそは現につらき心なりとも

題しらず　中納言顯隆

白雲のかかるやまぢをふみみてぞいとど心はそらになりける

中納言俊忠卿の家にてたのめてあはぬ戀といへる心をよめる　源顯國朝臣

逢ひ見むと賴むればこそ吳服(くれはとり)あやしやいかがたちかへるべき

忍戀の心をよめる　中納言實行

谷川のうへは木の葉にうづもれて下にながると人しるらめや

月前戀といへる事をよめる　藤原基光

朝寐がみ誰が手枕にたわつけてけさは形見にふりこしてみる

題しらず　　讀人しらず

戀すてふ名をだにながせ涙川つれなきひとも聞きやわたると

なにせむにおもひかけけむ唐衣戀しきことはみさをならぬに

中納言雅定

あふ事はいつとなぎさの濱千鳥波のたちゐに音をのみぞなく

ある宮ばらに侍りける人の忍びて宮をいでてあやしの小家にて物申して後日ごろありてつかはしける

春宮大夫公實

思ひいづやありしそのよの吳竹はあさましかりしふし所かな

題季卿家にて寄織女戀といふ心をよめる

少將公敎母

棚機はまたこむ秋も賴むらむ逢ふ夜もしらぬ身をいかにせむ

後朝の心をよめる　としよりの朝臣

わが戀はおぼろの清水いはでのみ堰きやる方もなくて暮しつ

顯季卿の家にて人々戀の歌よみけるによめる　藤原顯輔朝臣

あふとみて現のかひはなけれどもはかなきゆめぞ命なりける

女のもとにつかはしける　源雅光

逢ふ迄は思ひもよらず夏引のいとほしとだにいふと聞かばや

從二位藤原親子家の雙紙合に戀の心をよめる　宣源法師

今はただねられぬいをぞ友とする戀しき人のゆかりと思へば　太宰大貳長實

思ひやれ須磨のうらみて寐たる夜のかたしく袖にかかる涙を

ものいひける女の髮をかきこして見けるをよめる　津守國基

金葉和歌集　巻第七

戀歌上

五月五日はじめたる女のもとにつかはしける　小一條院御製

知らざりき袖のみぬれて菖蒲草かかるこひぢに生ひむ物とは

女のもとにつかはしける　大江公資朝臣

しの薄上葉にすがくささがにのいかさまにせば人なびきなむ

曉の戀をよめる　神祇伯顯仲

さりともと思ふかぎりは忍ばれて鳥と共にぞねはなかれける

つれなかりける女のもとにつかはしける　春宮大夫公實

これにしくおもひはなきを草枕たびに歸すはいなむしろとや

人はいさ我が世は末になりぬれば又あふさかも如何（いかが）まつべき

藤原有定

こひしさはその人かずにあらずとも都を忍ぶ（思ふイ）うちにいれなむ

經平卿つくしへまかりけるに具してまかりける

時公實のもとへつかはしける　中納言通俊

さしのぼる朝日に君を思ひ出でむかたぶく月にわれを忘るな

かへし　春宮大夫公實

あさ日とも月ともわかずつかのまも君を忘るる時しなければ

みちのくにへまかりけるにあふさかの關より都

へつかはしける　橘則光朝臣

我ひとり急ぐと思ひしあづまぢに垣根の梅はさきだちにけり

沖つ島くもゐの岸を行き返りふみかよはさんまぼろしもがな

としよりが伊勢へまかることありてくだり（いでたィ）ける

とき人々馬のはなむけし侍りける時よめる　　參議師頼

伊勢の海をの（のィ）のふるえに朽ちはてで都の方へかへれとぞ思ふ　　源行宗朝臣

待ちつけむ我が身なりせば歸るべき程をいく度君にとはまし（いく千たび歸りこん日をィ）

百首歌の中に別の心をよめる　　中納言國信

今日はさは立ちわかるとも便（たより）ありやなしやの情（なさけ）忘るな　　藤原基俊

秋ぎりの立ちわかれぬる君によりはれぬ思にまどひぬるかな

橘爲仲朝臣みちのくにくだりけるに人々むま

のはなむけし侍りけるによめる　　藤原實綱朝臣

おくれゐて我がこひをれば白雲の棚引く山を今日やこゆらむ

經輔卿つくしへくだり侍りけるに具してくだりけるに道より上東門院に侍りける人につかはしける

前太宰大貳長房朝臣

かたしきのそでに獨はあかせどもおつる涙ぞ夜をかさねぬる

是を御覽じてかたはらに書きつけさせ給ひける

上東門院

別路をげにいかばかり歎くらむ聞く人さへぞそでは濡れける

源公定が大隅守になりてくだりける時月あかかりける夜わかれををしみてよめる

源爲成

はるかなる旅の空にもおくれねばうらやましきは秋の夜の月

對〔イ但〕馬守にて小槻のあきみちが下りける時つかはしける

爲〔イ共〕政朝臣妻

金葉和歌集　巻第六

別離歌

兼房朝臣丹後守にてくだりけるに遣しける　大納言經長

君うしやはなのみやこのはなを見で苗代水にいそぐこころは

かへし　藤原兼房朝臣

よそにきく苗代水にあはれわがおりたつ名をも流しつるかな

重尹帥になりてくだり侍るに人々馬のはなむけし侍りける時よめる　堀河右大臣

かへるべきたびの別となぐさむる心にたがふなみだなりけり

題しらず　讀人しらず

雪つもる年のしるしにいとどしくちとせの松の花さくぞみる

かへし　六條右大臣

つもるべし雪つもるべし君が代は松の花さくちたび見るまで

天喜四年皇后宮の歌合に祝の心をよませ給うける　後冷泉院御製

長濱の眞砂のかずもなにならずつきせず見ゆる君が御代かな

松上雪をよめる（といへる事をよめるイ）　源頼家朝臣

萬代のためしと見ゆる松の上に雪さへつもる年にもあるかな

前齋宮伊勢におはしましける頃石などりの石合（歌イ）といへる事をせさせ給ひけるに祝のこころをよめる　源俊頼朝臣

くもりなくとよさかのぼる朝日には君ぞつかへむ萬代までに

宇治前太政大臣家の歌合に祝の心をよめる　中納言通俊

君が代は天つ兒屋根の命よりいはひぞ初めしひさしかれとは

大藏卿匡房

君が代はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のささむかぎりは

新院の北面にて藤花久句といへる事をよめる　大夫典侍

藤なみは君が千年をまつにこそかけて久しく見るべかりけれ

祝の心をよめる　源忠季

君が代はとみの小川の水すみて千年を經ともたえじとぞ思ふ

實行卿の家の歌合に祝の心をよめる　藤原爲忠

みづがきのひさしかるべき君が代を天照神やそらにしるらむ

前中宮初めて内へまるらせ給ひける夜雪のふり
て侍りければ六條右大臣のもとへつかはしける　宇治前太政大臣

同國いな井のさとを人にかはりてよめる　高階明頼

苗代のみづはいな井にまかせたり民やすげなる君が御代かな

祝の心をよめる　皇后宮肥後

いつとなく風ふく空にたつちりの數もしられぬ君が御代かな

花契遐年といへる事をよめる　太宰大貳長實

花もみな君がちとせをまつなればいづれの春か色もかはらむ

攝政左大臣中將にて侍りける頃春日祭の使にくだりけるに周防内侍女使にてくだりけるに爲隆卿行事辨にて侍りけるがもとにつかはしける　周防内侍

いかばかり神もうれし（あはれイ）とみかさ山二葉の松の千代のけしきを

題しらず　藤原道經

きみが代はいく萬代かかさぬべきいつぬきがはのつるの毛衣

嘉承二年三月鳥羽殿の行幸に池上花といへる事をよませ給ひける　堀河院御製

池水のそこさへにほふ花ざくら見るともあかじ千代の春まで

大嘗會主基方辰日參入音聲に鼓山をよめる　藤原行盛

音たかきつゞみの山のうちはへて樂しき御代となるぞ嬉しき

悠紀方の朝日の里をよめる　藤原敦光朝臣

曇なきとよのあかりにあふみなる朝日の里はひかりさしそふ

巳日の樂の破に雄琴の里をよめる

松風のを琴の里にかよふにぞをさまれる世にこゑはきこゆる

後冷泉院の御時の大嘗會の主基方備中國二萬鄕をよめる　藤原家經朝臣

みつぎもの運ぶよほろを數ふれば二萬の里人かずそひにけり

禁中翫花といへる心をよめる　中納言實行

九重にひさしくにほへ八重櫻のどけきはるのかぜと知らずや

花契遐年といへる事をよめる　源師俊（頼イ）朝臣

萬代とさしてもいはじさくら花かざさむ春のかぎりなければ

橘俊綱朝臣家歌合に祝の心をよめる　藤原國行

自ら（たのつか）我が身さへこそいははるれ君が千代にも逢はまほしさに

百首歌の中に祝の心をよめる　源俊頼朝臣

君が代は松の上葉におくつゆのつもりて四方の海となるまで

祝の心をよめる　大納言經信

君が代のほどをばしらで住吉の松をひさしとおもひけるかな

後一條院御時弘徽殿女御歌合に祝の心をよめる　永成法師

君が代は末の松山はるばると越すしらなみのかずも知られず

金葉和歌集　卷第五

賀　歌

長治二年三月五日内裏にて竹不改色といへること をよませ給うける　　堀河院御製

よよふれど面變りせぬ河竹はながれての世のためしなりけり

千代イ　ながきイ

郁芳門院根合の祝の心をよめる　　六條右大臣

萬代はまかせたるべし石淸水ながきながれをきみによそへて

堀河院御時中宮はじめて遷御の時松契遐年といへる事をよめる　　大納言俊實

水のおもに松のしづえのひぢぬれば千とせは池の心なりけり

さぐりてよみ侍りけるに年のくれをとりてよめる　藤原永實

數ふるに殘りすくなき身にしあればせめても惜しき年の暮かな

この歌よみて後としの內に身まかりにけるとぞ

としの暮の心をよませ給ひける　三宮

いかにせむ暮れ行く年をしるべにて身を尋ねつつ老は來にけり

中原長國

年くれぬとばかりこそ〔をこそイ〕は聞かましか〔なイ〕我身の上に積らざりせば

中納言國信

何事を待つとはなしに明けくれて今年もけふになりにける哉

つながねどながれもやらず高瀬舟むすぶ氷のとけぬかぎりは

水鳥をよめる　　前齋院六條

なかなかに霜のうはぎを重ねてやをしの毛衣さえまさるらむ

池水鳥をよめる　　前齋宮内侍

なみまくら如何にうきねをさだむらむ氷る益田の池のをし鳥

題しらず　　修理大夫顯季

さむしろにおもひこそやれ笹の葉のさゆる霜夜のをしの獨寐

依花待春といふ心を　　内大臣

何となく年のくるるはをしけれど花のゆかりに春をまつかな

としのくれの心をよめる　　藤原成道朝臣

人しれず暮れゆく年を惜むまに春といふ名の立ちぬべきかな

霜月十日ごろに攝政左大臣家にて冬の題どもを

に月のあかかりける夜參りたりけれど女房達ね
たりけるにや月もみざりければ殿上の御簾にむ
すびつけける歌　　藤原兼房朝臣
かき暮し雨ふる夜半やいかならむ月と雪とはかひなかりけり
冬月をよめる　　源雅光
あらち山雪ふりつもる高嶺よりさえても出づる夜半の月かな
家經朝臣が桂の山庄のさうじの爲に神樂したる
かたかける所をよめる　　康資王母
さかき葉や立ちまふ袖の追風に靡かぬ神はあらじとぞおもふ
神樂をよめる　　皇后宮權大夫師時
神がき(なびイ)のみむろのやまに霜ふればゆふしでかけぬ榊葉ぞなき
氷をよませ給へる　　三宮

雪の歌とてよめる　　源俊頼朝臣

衣手のさえゆくまゝにしもとゆふかつらぎ山に雪はふりつゝ

雪の御幸におそくまゐりければしきりにおそき

よし御使をたまはりてつかうまつれる　　六條右大臣

朝ごとのかゞみの影に面なれてゆき見むとしも急がれぬかな

炭竈をよめる　　皇后宮權大夫師時

すみがまに立つ烟さへ小野山は雪げのくもと見ゆるなりけり

百首歌の中に雪をよめる　　隆源法師

みやこだに雪ふりぬればしがらきの槇の杣山あと絶えぬらむ　　皇后宮肥後

道もなくつもれる雪に跡たえてふる里いかにさびしかるらむ

選子內親王いつきにおはしましける時雪ふりたる

鷹狩の心をよめる　　俊頼朝臣

はしたかをとりかふ澤に影みれば我が身も共にとやがへりけり

　　内大臣家越後

ことわりや交野(かたの)の小野に鳴く雉子さこそは狩(かり)の人はつらけれ

百首歌の中に雪の心をよめる　　大藏卿匡房

いかにせむ末の松山なみこさば峯のはつゆき消えもこそすれ

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる　　皇后宮攝津

ふる雪に杉の青葉もうづもれてしるしも見えず三輪の山もと

　　中納言女王

岩代のむすべるまつにふる雪は春もとけずやあらむとすらむ

大嘗會主(すき)基方備中國彌高山をよめる　　藤原行盛

雪ふればいやたかやまの梢にはまだ冬ながらはな咲きにけり

深山霰をよめる　大藏卿匡房
はしたかのしらふに色やまがふらむとかへる山に霰ふるなり
水邊寒草といへる事をよめる　大中臣公長朝臣
たかねには雪ふりぬらし眞柴川きしのかげ草たるひしにけり
宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる　源賴綱朝臣
衣手によごのうら風さえさえてこだかみ山にゆき降りにけり
橋上初雪といへる事をよめる　前齋院尾張
白波の立ちわたるかと見ゆるかな濱名の橋にふれるしらゆき
初雪をよめる　大納言經信
はつ雪はまきの葉白くふりにけりこや小野山の冬のさびしさ
雪中鷹狩のこころをよめる　源道濟
ぬれぬれも猶かりゆかむはしたかの上毛(うはけ)の雪を打ち拂ひつつ

神祇伯顯仲

風早みとしまが崎をこぎ行けばゆふなみ千鳥たちゐなくなり

氷をよめる　藤原隆經朝臣

高瀬舟棹のおとにぞしられぬる蘆間のこほりひとへしにけり

谷水結氷といへる事をよめる　内大臣

谷川のよどみにむすぶこほりこそ見るひともなき鏡なりけれ

百首歌の中に氷をよめる　藤原仲實朝臣

しながどりゐなのふしはらかぜさえてこやの池水氷しにけり

冬月をよめる　神祇伯顯仲

冬さむみ空にこほれる月影はやどにもるこそ解くるなりけれ

氷滿池上といへる事をよめる　大納言經信

水鳥のつららの枕ひまもなしうべ冴えけらしとふのすがごも

十月十日ごろに鹿のなきけるを聞きてよめる　法印光淸

何事にあきはてながらさを鹿のおもひ返してつまをこふらむ

百首歌のなかに紅葉をよめる　源俊頼朝臣

龍田川しがらみかけてかみなびのみむろの山の紅葉をぞみる

あじろをよめる　皇后宮肥後

氷魚（ひを）のよる川瀬にみゆる網代木（あじろぎ）はたつ白波のうつにやあるらむ

月照網代といへる事をよめる　大納言經信

月きよみ瀬々の網代による氷魚はたま藻にさゆる氷なりけり

旅宿冬夜といへる事をよめる

旅寐する夜床さえつつ明けぬらしとかたぞ鐘の聲きこゆなり

關路千鳥といへる事をよめる　源兼昌

淡路島かよふ千鳥のなく聲にいくよねざめぬ須磨のせきもり

音にだにたもとをぬらす時雨かなまきの板屋のよるの寐覺に

時雨をよめる　攝政家三河

神無月しぐれの雨のふるままにいろいろになるすずか山かな

後朱雀院御時御前にて霧藏紅葉といへる事をよめる　前中納言資仲

紅葉ちるやまは秋霧はれせねば龍田のかはのながれをぞみる

大井河にまかりて紅葉の心をよめる　源致親

大井河もみぢをわくる筏士はさををにしきをかけてこそみれ

落葉をよめる　大納言經信

みむろやまもみぢ散るらし旅人の菅の小笠ににしきおりかく

竹風似雨といへるこころをよめる　前中納言基長

なよ竹の音にも袖をかづきつつ濡れぬにこそは風と知りぬれ

金葉和歌集　巻第四

冬歌

承暦二年御前にて殿上のをのこども題を探りて

歌つかうまつりけるに時雨をとりて　　源師賢朝臣

神無月しぐるるままにくらぶ山したてるばかり紅葉しにけり

従二位藤原親子家の草子合にしぐれをよめる　　修理大夫顯季

しぐれつつ且ちる山のもみぢ葉をいかに吹く夜の嵐なるらむ

ならにて人々の百首歌よみけるに時雨をよめる　　權僧正永緣

山川のみづはまさらでしぐれには紅葉の色ぞふかくなりける　　源定信

大井河ちるもみぢ葉にうづもれてとなせの瀧は音のみぞする

落葉隨風といへる事をよめる　太宰大貳長實母

色ふかきみやまがくれのもみぢ葉を嵐の風のたよりにぞみる

九月盡の心をよめる　中原經則

あすよりはよもの山邊の秋ぎりの面影にのみ立たむとすらむ

源俊頼朝臣

草の葉にはかなく消ゆる露をしも形見におきて秋の行くらむ

九月盡の日大井にまかりてよめる　春宮大夫公實

惜めどもよもの紅葉は散り果ててとなせぞ秋のとまりなりける

谷川にしがらみかけよ龍田姫みねのもみぢにあらし吹くなり

大井河の行幸につかうまつれる　　修理大夫顯季

大井河るぜきの音のなかりせば紅葉をしけるわたりとやみむ

深山紅葉といへる事をよめる　　大納言經信

山守よ斧の音たかくひびく（きこゆイ）なり峯のもみぢはよきてきらせよ

紅葉をよめる　　神祇伯顯仲

よそにみる峯のもみぢや散りくると麓の里はあらしをぞ待つ

大井河の逍遙に水上落（紅イ）葉といへる事をよめる　　藤原伊家

ははそちる岩間をくぐる（かづくイ）鴨とりはおのが青葉も紅葉しにけり

落葉埋橋といへる事をよめる　　修理大夫顯季

小倉山みねのあらしの吹くからに谷のかけはし紅葉しにけり

落葉藏水といへる心をよめる　　大中臣公長朝臣

千年まで君がつむべき菊なれば露もあだには置かじとぞ思ふ

攝政左大臣家にて隣家紅葉といへる事をよめる　藤原仲實朝臣

もずのゐる櫨(はじ)のたちえの薄紅葉たれわがやどの物とみるらむ

承暦二年内裏歌合にもみぢをよめる　源師賢朝臣

ははき木の梢やいづこおぼつかな皆その原はもみぢしにけり

宇治前太政大臣大井河にまかりたりけるともにまかりて水邊紅葉といへる事をよめる　大納言經信

大井河いはなみ高しいかだ士よきしの紅葉にあからめなせそ

太皇太后宮の扇合に人にかはりてもみぢの心をよめる　源俊頼朝臣

音羽山もみぢ散るらしあふさかの關の小川ににしきおりかく

落葉をよめる　藤原伊家

野花留人といへる事をよめる　平忠盛朝臣

行く人をまねくか野邊の花すすき今宵もここに旅寐せよとや

堀河院御時御前にておのおの題をさぐりて歌つかうまつりけるに薄をとりてつかうまつれる　源俊頼朝臣

うづらなく眞野のいりえの濱風に尾花なみよる秋のゆふぐれ

河霧をよめる　藤原基光

宇治川のかはせも見えぬ夕霧にまきのしま人ふねよばふなり

藤原行家

河霧のたちこめつれば高瀬舟わけゆくさをのおとのみぞする

郁芳門院の歌合に菊をよめる　中納言通俊

盛りなるまがきの菊を今朝みればまだ空さえぬ雪ぞつもれる

鳥羽殿の前栽合に菊をよめる　修理大夫顯季

攝政左大臣

女郎花夜のまのかぜに折れふしてけさ白露にこころおかるな

攝政左大臣家にて歌合し侍りけるに蘭をよめる　源忠季

佐保川のみぎはに咲ける藤袴なみのよりてや掛けむとすらむ

藤袴をよめる　右兵衛督伊通

かりにくる人もきよとやふぢばかま秋の野毎に鹿のたつらむ

神祇伯顯仲

さ〳〵がにの糸のとぢめやあだならむ綻びわたる藤ばかまかな

鳥羽殿の前栽合に女郎花のこころをよめる　春宮大夫公實

あだし野のつゆ吹きみだる秋風になびきもあへぬ女郎花かな

思野花といへる事をよめる　藤原伊家

今はしもほに出でぬらむ東路の岩田の小野のしののをすすき

野花帶露といへる事をよめる　皇后宮肥後

白露とひとはいへども野邊みればおく花ごとに色ぞかはれる

太皇太后宮扇合に人にかはりて萩の心をよめる　僧正行尊

小萩原にほふさかりは白露もいろいろにこそ見えわた（まさイ）りけれ

萩をよめる　太宰大貳長實

しらすげの眞野の萩原つゆながら折りつる袖ぞ人なとがめそ

女郎花をよめる　隆源法師

女郎花さける野邊にぞ宿りぬる花の名だてになりやしぬらむ

顯隆卿家に歌合し侍りける時女郎花をよめる　中納言俊忠

ゆふつゆの玉かづらして女郎花のはらの風にをれやふすらむ

女郎花をよめる　藤原顯輔朝臣

白露や心おくらむをみなへしいろめく野邊にひとかよふとて

鹿をよめる　　三宮大進
妻こふる鹿ぞ鳴くなるひとりねのとこの山風身にやしむらむ
　曉聞鹿といへる事をよめる　　皇后宮右衛門佐
思ふこと有明がたの月かげにあはれを添ふるさをしかのこゑ
　夜聞鹿聲といふ事をよめる　　内大臣家越後
夜はになく聲に心ぞあくがるる我が身は鹿のつまならねども
　攝政左大臣家にて旅宿鹿といへる事をよめる　　源雅光
さもこそはみやこ戀しき旅ならめ鹿の音にさへぬるる袖かな
　鹿の歌とてよめる　　藤原顯仲朝臣
世の中をあきはてぬとやさを鹿の今はあらしの山に鳴くらむ
　　藤原行家
秋ならで妻よぶ鹿を聞きしがなをりから聲の身にはしむかと

ればよめる　平忠盛朝臣

有明のつきもあかしの浦風になみばかりこそよると見えしか

月前落葉といへる事をよめる　源俊頼朝臣

あらしをや葉守の神もたたるらむ月に紅葉のたむけしてけりつればイ

蛬をよめる　前齋院六條

露しげき野邊にならひてきりぎりすわが手枕の下になくなり

はたおりといへる蟲をよめる　顯仲卿女

ささがにのいと引きかくる叢にはたおる蟲のこゑぞきこゆる

雁をよめる　讀人しらず

玉章(たまづさ)はかけてきつれどかりがねのうはの空にも聞ゆなるかな

歌合に雁を　春宮大夫公實

いもせやま峯のあらしやさむからむ衣かりがね空になくなり

月前旅宿といへる事をよめる　修理大夫顯季

松が根に衣かたしきよもすがら眺むるつきをいもや見るらむ（見るらむかイ）

ひとり月をながめてよめる　藤原有教母

ながむればおぼえぬ事もなかりけり月や昔のかたみなるらむ

行路曉月といへる事をよめる　權僧正永緣

もろともにいつとはなしに有明の月のみおくる山路をぞ行く

山にむかひて月を待つといへる事をよめる　土御門左（右イ）大臣

有明の月まつほどのうたたねは山のはのみぞゆめに見えける

山家曉月といへる事をよめる　中納言顯隆

山里の門田のいねのほのぼのと明くるもしらず月をみるかな

月のあかかりけるころ明石にまかりて月をみて
のぼりたりけるに都の人々月はいかにと尋ねけ

源俊頼朝臣

村雲や月のくまをばのごふらむ晴れゆくたびに照りまさる哉

月の心をよめる　　藤原家經朝臣

いまよりは心ゆるさじ月かげのゆくへも知らず人さそひけり

月照古橋といへる心をよませ給へる事イ　　三宮

とだえして人も通はぬたな橋は月ばかりこそ澄みわたりけれ

水上月をよめる　　藤原實光朝臣

月影のさすにまかせて行く舟はあかしの浦やとまりなるらむ

題しらず　　太宰大貳長實

さらぬだに玉にまがひておく露をいとどみがける秋の夜の月

永承四年殿上歌合に月の心をよめる　　藤原家經朝臣

よとともに曇らぬ雲のうへなれば思ふことなく月をみるかな

宿からぞつきの光もまさりけるよの曇りなくすめばなりけり
月をよめる　藤原忠隆
眺むればふけゆくままに雲晴れて空ものどかにすめる月かな
奈良の花林院の歌合に月をよめる　權僧正永縁
いかなればは秋はひかりのまさるらむおなじ三笠の山の端の月
月の歌とてよめる　藤原顯輔
三笠山もりくる月のきよければ神のこころもすみやしぬらむ
太皇太后宮の扇合に月の心をよめる　大納言經信
三笠山みねよりいづる月かげはさほの河瀨のこほりなりけり
顯季卿の家にて九月十三夜人々月の歌よみける
に　太宰大貳長實
くまもなくかがみと見ゆる月かげに心うつらぬ人はあらじな

かがみ山みねより出づる月なれば曇る夜もなき影をこそみれ

秋なにはの方にまかりて月のあかかりければよめる

參議師頼

いにしへのなにはの事を思ひ出でて高津の宮に月のすむらむ

秋月如晝といへることをよめる

藤原隆經

草の上の露なかりせば如何にして今宵の月をよると知らまし

菊の上にィ

翫明月といふ事をよめる

源行宗朝臣

なごりなく夜半の嵐に雲はれてこころのままにすめる月かな

八月十五夜に人々歌よみけるによめる

平師季

みかさ山ひかりをさして出でしより曇らであけぬ秋の夜の月

宇治入道前太政大臣の三十講の歌合に月の心をよめる

讀人しらず

經長卿の桂の山庄にて閑に月を見るといへる事をよめる　大納言經信

今宵わがかつらの里の月を見ておもひ残せることのなきかな

承暦二年内裏歌合に月をよめる　春宮大夫公實

くもりなき影をとどめば山のはに入るとも月を惜まざらまし

宇治前太政大臣家の歌合に月をよめる　皇后宮攝津

てる月のひかりさえゆく宿なれば秋の水にもつらゝ(つららイ)ほりゐにけり

源俊頼朝臣

やまのはに雲の衣をぬぎ捨ててひとりも月のたちのぼるかな

水上月　攝政左大臣

蘆根はひかつみもしげき沼水にわりなくやどる夜半の月かな

宇治前太政大臣家の歌合に月をよめる　一宮紀伊

さやけさはおもひなしかと月影を今宵としらぬ人にとはばや　春宮大夫公實

閏九月のある年八月十五夜によめる

秋は猶のこりおほかる年なれどこよひの月の名こそをしけれ　前齋院六條

水上月といへる心をよめる

雲のなみかからぬさよの月影をきよたき川にうつしてぞ見る　源俊頼朝臣

九月十三夜閑見月といへる事をよめる

すみのぼるこころや空をはらふらむ雲のちりゐぬ秋の夜の月　皇后宮肥後

月をよめる

月をみて思ふ心のままならばゆくへも知らずあくがれなまし　源師俊朝臣

人のもとにまかりて物申しけるほどに月の入りにければよめる

如何にしてしがらみかけむ天の川流るる月やしばしよどむと

る事をよませ給ひける　院御製

池水にこよひの月をうつしもてこころのままに我が物と見る

大納言經信

てる月の岩間の水にやどらずば玉ゐるかずをいかで知らまし

明月をよめる　民部卿忠教

いづくにもこよひの月をみる人の心やおなじそらにすむらむ

後冷泉院の御時皇后宮の歌合に駒迎のこころを

よめる　藤原隆經

ひく駒のかずより外にみえつるは關の清水の影にぞありける

駒迎の心をよめる　源仲正

東路をはるかに出づるもち月のこまに今宵やあふさかのせき

八月十五夜の心をよめる　源親房

風ふけば枝やすからぬ木の間よりほのめく秋の夕づくよかな

後冷泉院御時殿上の歌合に月の心をよめる　大納言經信

月かげのすみわたるかな天の原雲ふきはらふ夜半のあらしに

月はたびの友といへる事をよめる　法橋忠命

草枕このたびねにぞおもひしる月よりほかのともなかりけり

閑(しづかに)見月といへる事をよめる　顯仲卿女

もろともに草葉の露のおきゐずばひとりや見まし秋の夜の月

翫明月といへる事をよめる　前中納言伊房

いつはりになりぞしぬべき月影をこの見るばかり人に語らば

鳥羽殿にて旅宿月といへる事をよめる　春宮大夫公實

我こそはあかしのせとに旅寐せめおなじ水にもやどる月かな

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて池上翫月といへ

おのづから秋はきにけり山里のくず這ひかかる槙のふせやに

田家早秋といへる事をよめる　右兵衛督伊通

稲葉ふく風のおとせぬ宿ならばなににつけてか秋を知らまし

山家秋といへる事をよめる　藤原行盛

山深みとふ人もなきやどなれどそとものの小田に秋はきにけり

師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風といへる事をよめる　大納言經信

夕されば門田のいなばおとづれて蘆のまろやにあき風ぞふく

三日月の心をよめる　大江公資朝臣

山の端にあかでいりぬる夕月夜いつあり明にならむとすらむ

攝政左大臣の家にて夕月夜の心をよませ侍りけるによめる　藤原忠隆

かぎりありてわかるる時もたなばたの涙の色は變らざりけり

皇后宮權大夫師時

たなばたのあかぬわかれの涙にや花のかつらも露けかるらむ

内大臣家越後

天の川かへさの船に波かけよ乘りわづらはばほども經(ふ)ばかり

源俊頼朝臣

歸るさはあさ瀬もしらじ天の川あかぬなみだに氷しまさらば

草花告秋といふ事をよめる　源雅兼朝臣

咲きそむる朝(あした)の原の女郎花あきをしらするつまにぞ有りける

おなじ心をよめる　源緣法師

咲きにけりくちなし色の女郎花いはねどしるし秋のけしきは

秋のはじめの心をよめる　大納言經信

萬代に君ぞ見るべきたなばたのゆきあひの空を雲のうへにて

七夕の心をよめる　能因法師

たなばたの苔の衣をいとはずば人なみなみに貸しもしてまし

七月七日父のぶくにて侍りける年よめる　橘元任

藤衣いみもやするとたなばたに貸さぬにつけて濡るる袖かな

七夕の心をよめる　前齋宮河内

戀ひこひて今宵ばかりやたなばたの枕にちりの積らざるらむ

三宮

天の川わかれに胸のこがるればかへさの船はかぢも取られず

中納言國信

たなばたにかせる衣の露けさにあかぬけしきを空にしるかな

七夕後朝の心をよめる　内大臣

金葉和歌集 卷第三

秋歌

百首歌の中に秋立心をよめる　　春宮大夫公實

とことはに吹く夕暮のかぜなれど秋たつ日こそ涼しかりけれ

野草帶露といへる事をよめる　　太宰大貳長實

まくずはふあだの大野の白露を吹きなみだりそ秋のはつかぜ

待草花といへることをよめる　　皇后宮美濃

藤袴はやほころびてにほはなむ秋のはつかぜ吹きたたずとも

後冷泉院御時皇后宮の春秋の歌合に七夕の心を

よめる　　土佐内侍

秋隔一夜といへる事をよめる　　　中納言顯隆

みそぎするみぎはに風の涼しきは一夜をこめて秋やきぬらむ

宿ごとにはな橘ぞにほひけるひと木がすゑをかぜは吹けども

二條關白家にて雨後野草といへる事をよめる　源俊頼朝臣

この里も夕立しけりあさぢふに露のすがらぬくさの葉もなし

實行卿の家の歌合に鵜川の心をよめる　中納言雅定

大井河いくせ鵜舟のすぎぬらむほのかになりぬかがり火の影

夏月をよめる　源親房

玉くしげふたがみ山の木の間よりいづれば明くる夏の夜の月

六月廿日ごろに秋の節になる日人のもとに遣しける　攝政左大臣

みな月のてる日の影はさしながら風のみ秋のけしきなるかな

公實卿の家にて對水待月といへる事をよめる　藤原基俊

夏の夜の月まつほどのてすさびに岩もる清水いくむすびしつ

夜もすがらはかなく叩く水鷄かなさせる戸もなき柴の假屋(かりや)を

實行卿の家の歌合に夏風の心をよめる　修理大夫顯季

なつごろも裾野の草をふく風におもひもあへず鹿やなくらむ

水風暮涼といへる事をよめる　源俊朝朝臣

風吹けばはすのうき葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの聲

照射(ともし)の心をよめる　源仲正

澤水にほぐしの影のうつれるをふたともしとや鹿はみるらむ

神祇伯顯仲

鹿たたぬ端山(はやま)のすその照射して幾夜かひなき夜をあかすらむ

家の歌合に盧橘をよめる　中納言俊忠

五月闇(さつきやみ)花たちばなのありかをば風のつてにぞそらに知りける

百首歌の中に盧橘をよめる　春宮大夫公實

權中納言俊忠卿の家の歌合にさみだれの心をよめる　藤原顯仲朝臣

五月雨に水まさるらしさはだ川まきのつぎ橋浮きぬばかりに

五月雨の心をよめる　左兵衞督實能

さみだれは小田の水口(みなくち)手もかけでみづの心にまかせてぞみる

三宮

五月雨に入江のはしの浮きぬればおろす筏のここちこそすれ

攝政左大臣の家にて夏月の心をよめる　神祇伯顯仲

夏の夜の庭にふりしくしら雪は月のいるこそ消ゆるなりけれ

權中納言俊忠卿の家の歌合に水鷄の心をよめる　藤原顯綱朝臣

里ごとにたたく水鷄(くひな)の音すなりこころのとまる宿やなからむ

攝政左大臣の家にて水鷄の心をよめる　源雅光

五月五日家にあやめふくを見てよめる　左近府生秦兼久

同じくばとゝのへてふけ菖蒲草さみだれたらばもりもこそすれ

むかし中の院にすませ給ひける頃はみえざりけるあやめを人の中の院のと申し(などイ)けるを見てよませ給ひける　第三宮

淺ましや見しふる里の菖蒲草わがしらぬまに生ひにけるかな

百首歌の中にさみだれをよめる　參議師頼

五月雨は沼のいは(にイ)がき水こえて眞菰かるべきかたも知られず

五月雨の心をよめる　藤原定通

五月雨は日かずへにけりあづまやの萱が軒端の下くつるまで

承暦二年内裏の歌合に五月雨の心をよめる　源通時朝臣

五月雨に玉江のみづやまさるらむ蘆の下葉のかくれゆくかな

あやめ草ねたくも君がとはぬかな今日は心にかかれと思ふに

永承六年殿上にて根合にあやめをよめる　　大納言經信

萬代にかはらぬものはさみだれの雫にかをるあやめなりけり

郁芳門院の根合にあやめをよめる　　藤原孝善

菖蒲（あやめ）草ひく手もたゆく長きねのいかであさかの沼に生ひけむ

承暦二年内裏の歌合にあやめを　　春宮大夫公實

玉江にや今日の菖蒲を引きつらむ磨ける宿のつまと見ゆるは

宮づかへしける娘のもとに五月五日くすだま遣
はすとて　　權僧正永緣母

菖蒲草我身のうきを（にイ）引かへてなべてならぬに生ひも出でなむ

百首の中にあやめをよめる　　春宮大夫公實

菖蒲草よどのに生ふる物なればねながら人は引くにやあるらむ

聞きもあへずこぎぞわかるる郭公わが心なるふなでならねば

郭公をよめる　藤原成通朝臣

郭公一こゑなきて明けぬればあやなくよる[はイ]のうらめしきかな

月前郭公といへる事をよめる　皇后宮式部

郭公くものたえまにいる[もイ]月のかげほのかにも鳴きわたるかな

曉聞郭公といへる事をよめる　源定信

わぎもこにあふさか山の郭公あくればかへるそらになくなり

尋郭公といふことをよめる　讀人しらず

郭公たづぬるだにもあるものを待つ人いかでこゑを聞くらむ

雨中郭公といへる事をよめる　大納言經信

郭公くもぢにまどふ[よイ]聲すなりをやみだにせよさみだれのそら

五月五日實能卿のもとに藥玉つかはすとて　內大臣

俊忠卿の家の歌合に郭公をよめる　後二條關白家筑前

まつ人のやどをばしらで郭公をちのやまべを鳴きてすぐらむ（わたる イ）

中納言女王母

郭公ほのめくこゑをいづかたと聞きまどはしつ明ぼののそら

郭公をよめる　前齋院六條

宿ちかくしばしかたらへ郭公まつ夜のかずのつもるしるしに

中納言雅定

郭公まれになく夜はやまびこの答ふるさへぞうれしかりける

宇治太政大臣の歌合に郭公をよめる　康資王母

山ちかくうらこぐふねは郭公なくわたりこそとまりなりなれ

匡房卿美作守にて下りける道にて郭公なきけるを聞きてよめる　中原高眞（貞 イ）

承暦二年内裏歌合に郭公を人にかはりてよめる　藤原孝善

ほととぎす心もそらにあくがれてよがれがちなるみ山邊の里

郭公をよめる　權僧正永縁

聞くたびにめづらしければ郭公いつも初音のここちこそすれ

人々十首歌よみけるに郭公を　源俊頼朝臣

待ちかねてたづねざりせば郭公たれとか山のかひになかまし

中納言實行

いなり山たづねやみまし郭公まつにしるしのなきとおもへば

郭公驚夢といへる事をよめる　中納言公成

おどろかすこゑなかりせば郭公まだ現にはきかずやあらまし

待郭公といへる事をよませ給へる　院御製

郭公まつにかかりてあかすかな藤のはなとやひとは見るらむ

郭公すがたは水にやどれども聲はうつらぬものにぞありける

源雅光

郭公なきつとかたる人づてのことの葉さへぞうれしかりける

郭公尋ねける日は聞かで二日ばかりありて鳴きけるを聞きてよめる　橘成元

郭公おとはの山のふもとまでたづねしこゑをこよひ聞くかな

長實卿の家の歌合に郭公の心をよめる　左京大夫經忠

年ごとに聞くとはすれど郭公聲はふりせぬものにぞありける

郭公をまつ心を　内大臣

戀すてふなき名やたたむ郭公まつにねぬ夜のかずしつもれば

郭公をよめる　藤原顯輔朝臣

郭公あかで過ぎぬるこゑによりあとなき空に（なイ）ながめつるかな

神山の麓にさける卯のはなは誰がしめゆひしかきねなるらむ　大納言經信

卯花をよめる

賤の女が蘆火たく屋もうの花の咲きしかかれば褻れざりけり　源盛清

うの花を音なし河の波かとてねたくも折らで過ぎにけるかな　大中臣定長

卯の花の青葉も見えず咲きぬれば雪と花のみかはるなりけり　修理大夫顯季

鳥羽殿の歌合に郭公をよめる

み山いでてまだ里なれぬ郭公うはのそらなる音をやなくらむ　藤原節信

尋郭公といへる事をよめる

今日もまたたづねくらしつ郭公いかできくべき初音なるらむ　攝政左大臣

郭公の歌十首人々によませ侍りける頃に

大納言經信

たまがしは庭も葉廣になりにけりこやゆふしでて神祭るころ

鳥羽殿にて人々歌つかうまつりけるに卯のはなの心をよめる

春宮大夫公實

雪の色をうばひて咲けるうの花に小野のさと人冬ごもりすな

卯花連垣と（とはイ）いへる事をよめる

大藏卿匡房

いづれをかわきて折らまし山里の垣根つづきに咲ける卯の花

卯花をよめる

江侍從

雪としもまがひもはてず卯の花は暮るれば月の影かとも見ゆ

攝政左大臣

うの花のさかぬ垣根はなけれども名にながれたる玉川のさと

卯花たがかき根ぞといへる心（事イ）をよめる

中納言實行

金葉和歌集　巻第二

夏歌

卯月のついたちの日ころもがへの心をよめる　源師賢朝臣

我のみぞ急ぎたたれぬ夏ごろもひとへに春（花イ）ををしむ身なれば

二條關白家にて人々殘花の心をよませ侍りけるによめる　藤原盛房

夏山の青葉まじりのおそざくらはつ花よりもめづらしきかな

應徳元年四月三條内裏にて庭樹結葉といへる事をよませ給ひける　院御製

おしなべて梢あを葉（みどりイ）になりぬればまつの緑（ちとせイ）もわかれざりけり

春のゆくみちに來むかへ郭公かたらふこゑに立ちやとまると
中納言雅定

殘りなく暮れゆく春ををしむとて心をさへにつくしつるかな
三月盡戀といへる心（事イ）をよめる
內大臣

春はをし人は今宵とたのむれば思ひわづらふ今日のくれかな
攝政左大臣家にて人々三月盡の心をよませ侍りけるに
源俊頼朝臣

歸る春卯月のいみにさしこめてしばしみあれの程までも見む
重服に侍りけるとし三月晦日の日人のもとより音づれて侍りければ遣しける
藤原顯輔朝臣

思ひやれめぐり逢ふべき春だにもたち別るるは悲しきものを

まつかぜの音せざり（なかイ）せば藤波をなににかかれる花としらまし

二條關白の家にて池邊藤花といへる事をよめる　大納言經信

いけにひづ松のはひ枝に紫のなみおりかくるふぢ咲きにけり

百首の歌の中に藤花をよめる　修理大夫顯季

住よし（の江イ）のまつにかかれる藤の花かぜのたよりに波やお（たつイ）るらむ

雨中藤花といへる事をよめる　神祇伯顯仲

ぬるるさへ嬉しかりけり春雨に色ます藤のしづくとおもへば

隣家藤花といへる事をよめる　内大臣家越後

蘆垣のそととはみれど藤のはなにほひは我をへだてざりけり

題しらず　盛經（家イ）母

花のみや暮れぬる春のかたみとて青葉のしたに散り殘るらむ

三月盡の心をよめる　大僧都證觀

春ふかみかみなび河に影みえてうつろひにけりやまぶきの花

後冷泉院の御時歌合に山吹をよめる　　前太宰大貳長房

山吹にふきくる風も心あらば八重ながらをばやイ散らさざらなむ

晩見躑躅といふ心をよめる　　攝政左大臣家參河

いり日さすゆふくれなゐの色はえて山下てらす岩つつじかな

院の北面にて橋上藤花といへる事をよめる　　大夫典侍

色かへぬ松によそへてあづまぢのときはの橋にかかる藤なみ

藤花をよめる　　藤原顯輔朝臣

むらさきの色のゆかりに藤の花かかれる松もむつまじきかな

坊の藤の花さかりなりけるを見てよめる　　律師増覺

くる人もなき我が宿の藤の花たれを待つとて咲きかかるらむ

紫藤藏松といへる事をよめる　　良暹法師

あら小田に細谷川をまかすればひくしめ繩にもりつつぞゆく

苗代をよめる　津守國基

鳴のゐる野澤の小田をうち返し種蒔きてけりしめはへて見ゆ

後冷泉院御時弘徽殿の女御の歌合に苗代をよめる　藤原隆資

山里のそともの小田の苗代にいはまのみづを堰かぬ日ぞなき

家の山吹を人々あまたまうで來てあそびける頃に折りけるを見てよめる　中納言雅定

わが宿にまた來む人もみるばかり折りなやつしそ山吹のはな

水邊款冬　攝政左大臣

限ありて散るだにをしき山吹をいたくな折りそ井手の川なみ

おなじ心を　太宰大貳長實

下野やあらむとてめしにつかはしたりければ參りたるを御覽じてあの花折りてまゐれと仰言ありければ折りて參りたるをただにてはいかがとおほせ事ありければつかうまつりける　　下野

春の夜(ながきイ)の月のひかりのなかりせば雲井の花をいかでをらまし

新院の御方にて殘花薫風といへる事をよめる　　中納言雅定

散りはて(のころイ)ぬ花のありかをしらすれば厭ひし風ぞけふは嬉しき

奈良にて人々百首歌よみけるに早蕨(さわらび)をよめる　　權僧正永緣

やまざとは野邊のさ蕨もえいづる折にのみこそ人はとひけれ

百首の歌の中に杜若(かきつはた)を　　修理大夫顯季

あづまぢのかほやが沼の杜若(かきつはた)はるをこめても咲きにけるかな

春の田をよめる　　大納言經信

庭の花もとのこずゑに吹きかへせ散らすのみやは心なるべき

夜思落花といへる事をよめる　隆源法師

衣手に晝はちりつむさくら花よるはこころにかかるなりけり

春ものへまかりけるに山田つくるを見てよみ侍りける　高階經成朝臣

櫻さく山田をつくるしづの男はかへすがへすや花をみるらむ

花をよみ侍りける　右兵衛督伊通

白雲とみねには見えてさくら花ちればふもとの雪とこそみれ

後冷泉院の御時月のあかかりける夜女房御供にて南殿にわたらせ給ひたりけるに庭の花かつ散りておもしろかりけるを御覽じて是をしりたらむ人に見せばやとおほせ事ありて中宮の御方に

水上落花といへる心をよめる　大納言經信

水上に(はイ)花やちるらむ山がはのゐぐひにいとどかかるしらなみ

藤原成通朝臣

水の面にちりつむ花をみる折(時イ)ぞはじめて風はうれしかりける

落花衣にちるといへる事をよめる　藤原永實

散りかかるけしきは雪の心地して花には袖のぬれぬなりけり

堀河院御時花のちりたるをかきあつめて大きなる物のふたに山のかたにつませ給ひて中宮の御方に奉らせ給へりけるを宮御覽じて歌よめとおほせごと有りければつかうまつれる　御匣殿

さくら花雲かかるまでかきつめて吉野の山と今日はみるかな

花の庭にちりつもりたるを見てよめる　郁芳門院安藝

春の日ののどけき空にふる雪は風にみだるる花にぞありける

水上落花といへる事をよめる　源雅兼朝臣

花さそふあらしや峯をわたるらむさくらなみよる谷川のみづ

落花滿庭といへる事をよめる　左兵衛督實能

けさ見ればよはの嵐にちりはてて庭こそ花のさかりなりけれ

堀河院御時中宮の御方にて風靜花芳といへる事をつかうまつれる　源俊頼朝臣

こずゑには吹くとも見えで櫻花かをるぞ風のしるしなりける

落花の心をよめる　長實卿母

春ごとにおなじさくらの花なればをしむ心もかはらざりけり

落花隨風といふ心をよめる　右兵衛督伊通

うらやまし如何にふけばか春風のはなを心にまかせそめけむ

よしのやま嶺になみよる白雲とみゆるは花のこずゑなりけり

堀河院の御時女御の御かたの女房あまた花見ありきけるによめる

前齋宮筑前乳母

春毎にあかぬにほひをさくらばな如何なる風の惜まざるらむ

人にかはりてよめる

僧正行尊

外にては惜みに來つる花なれど折らではえこそ歸るまじけれ

後冷泉院の御時皇后宮の歌合に櫻をよめる

堀河右大臣

春雨にぬれて尋ねむやまざくら雲のかへしのあらしもぞ吹く

月前見花といふ心をよめる

大藏卿匡房

月影にはな見る夜半のうき雲は風のつらさにおとらざりけり

顯季卿の家にて櫻の歌十首人々によませ侍りけるによめる

太宰大貳長實

みねつづき匂ふ櫻をしるべにて知らぬ山路にまどひぬるかな

人々に櫻の歌十首よませ侍りけるによめる　修理大夫顯季

櫻花さきぬるときはよしのやま立ちものぼらぬ峯のしらくも

山花留人といへる事をよめる　大中臣公長朝臣

斧の柄は木のもとにてや朽ちなまし春をかぎらぬ櫻なりせば

宇治前太政大臣の家の歌合に櫻をよめる　皇后宮攝津

ちりつもる庭をぞみまし櫻花かぜよりさきにたづねざりせば

源俊頼朝臣

山櫻咲きそめしよりひさかたのくもゐに見ゆる瀧のしらいと

遙見山花といへる事をよめる　大藏卿匡房

初瀨山くもゐに花のさきぬれば天のかはなみ立つかとぞ見る

藤原忠隆

萬代に見るべき花のいろなれど今日のにほひをいつか忘れむ

終日尋花といふ事をよめる　源貞亮朝臣

しらくもにまがふ櫻を尋ぬとてかからぬ山のなかりつるかな

堀河院御時女房たちを花山の花見せにつかはしたりけるにかへりまゐりて御前にて歌つかうまつりけるに女房にかはりてよませ給うける　堀河院御製

よそにては岩こす瀧とみゆるかなみねの櫻やさかりなるらむ

源師俊朝臣

今日くれぬ明日もきてみむ櫻花こころしてふけ春のやまかぜ

山花を翫ぶといへる事をよめる　太宰大貳長實

かがみ山うつろふ花を見てしより面影にのみ立たぬ日ぞなき

深山花を（といへる事をイ）　攝政左大臣

白雲とをちのたかねの見えつるは心まどはすさくらなりけり

松間櫻花といへる事をよめる　内大臣

春ごとに松のみどりにうづもれて風にしられぬ花ざくらかな

左兵衛督實能

この春はのどかに匂へさくら花えださしかはす松のしるしに

山寒花遲といふことを　左京大夫經忠

山櫻こずゑのかぜのさむければ花のさかりになりぞわづらふ

花爲春友といへることをよめる　内大臣

散らぬまは花を友にてすぎぬべし春よりのちのしる人もがな

新院の御方にて花契遐年といへる事をよめる　待賢門院中納言

しらくもにまがふさくらの梢にて千歳の春をそらにしるかな

藤原顯輔朝臣

太政大臣

白河のながれひさしきやどなれば花の匂ひものどけかりけり

人にかはりてよめる

太宰大貳長實

吹く風も花のあたりはこころせよ今日をば常の春とやは見る

待賢門院兵衛

萬代のためしと見ゆるはなの色をうつしとどめよ白河のみづ

源雅兼朝臣

年ごとに咲きそふやどの櫻花なほゆくすゑのはるぞゆかしき

宇治前太政大臣京極の家の御幸の日よませ給ひける

院御製

春霞たちかへるべきそらぞなき花のにほひにこころとまりて

遠山櫻といへる事をよめる

春宮大夫公實

池邊柳をよめる　源雅兼朝臣

風ふけばなみのあやおる池水に糸ひきそふるきしのあをやぎ

呼子鳥をよめる　前齋院尾張

いとかやまくる人もなき夕暮にこころぼそくもよぶこ鳥かな

霞中歸雁といへる事をよめる　藤原成通朝臣

こゑせずばいかで知らまし春霞へだつる空にかへるかりがね

歸雁をよめる　藤原經通朝臣

今はとてこしぢに歸る雁がねは羽もたゆくや行きかかるらむ(くイ)

花薫風といふ心をよみ侍りける　攝政左大臣

よしのやま峯の櫻や吹きぬらむふもとの里ににほふはるかぜ

白河の花見の御幸に　新院御製

たづねつる我をや花も(風イ)まちつらむ今日ぞ盛(さかり)ににほひましける

道雅卿の家の歌合に梅花をよめる　藤原兼房朝臣

ちりかかる影はみゆれど梅の花水には香こそうつらざりけれ

梅の花をよめる　源　忠　季

かぎりありて散りはばつとも梅の花香をば梢に殘せとぞ思ふ

子の日の心をよめる　大中臣公長朝臣

春日野の子の日の松はひかでこそ神さびゆかむ蔭にかくれめ

百首の歌の中に子の日の心をよめる　大藏卿匡房

春霞たちかくせどもひめ小松ひくまの野邊にわれは來にけり

柳絲隨風といふ心（事イ）をよませ給ひける　院　御　製

かぜふけば柳のいとのかたよりに靡くにつけて過ぐる春かな

百首の歌の中に柳をよめる　春宮大夫公實

あさまだき吹きくる風にまかすればかたよりし（にイ）ける青柳の糸

皇后宮にて人々歌つかうまつりけるに雨中鶯といふ事をよめる　　源俊頼朝臣

春雨はふりしむれども鶯のこゑはしをれぬものにぞありける

良暹法師忍びてものへまかりけるに右大辨經頼が家の梅さかりに咲きければ門にひねもすに立ちくらして夕つかたいひいれ侍りける　　良暹法師

梅の花匂ふあたりはよきてこそいそぐ道をば行くべかりけれ

梅花夜芳といへることをよめる　　前太宰大貳長房

梅が枝に風やふくらむ春の夜はをらぬ袖さへにほひぬるかな

朱雀院に人々まかりて閑庭梅花といへる事をよめる　　大納言經信

今日ここに見にこざりせば梅の花ひとりや春の風にちらまし

年ごとにかはらぬものは春霞たつたのやまのけしきなりけり
　　霞の心をよめる　　太宰大貳長實
あづさゆみ春のけしきになりにけりいるさの山に霞たなびく
　　百首の歌の中に鶯の心をよめる　　修理大夫顯季
鶯の鳴くにつけてやまがねふくきびのやまびと春をしるらむ
　　初聞鶯といへる事をよめる　　春宮大夫公實
今日よりや梅のたちえに鶯のこゑ聞きなるるはじめなるらむ
　　正月八日春立ちける日鶯のなきけるを聞きてよ
　　める　　藤原顯輔朝臣
今日やさは雪うちとけて鶯のみやこに出づるはつねなるらむ（はじめイ）
　　あかつき鶯をきくといふ事をよめる　　源雅兼朝臣
鶯の木づたふ様もゆかしきにいまひところは明けはてて鳴け

つらゝゐし細谷川のとけ行くはみなかみよりや春はたつらむ
百首の歌の中に春の心を人にかはりてよめる　前齋宮河内
春のくる夜のまの風のいかなれば今朝ふくにしも氷とくらむ
初春の心をよめる　太宰大貳長實
いつしかと春のしるしに立つものはあしたの原の霞なりけり
正月の一日ごろ雪のふり侍りける日遣しける　修理大夫顯季
あらたまのとしの初に降りしけば初雪とこそいふべかりけれ
かへし　春宮大夫公實
朝戸あけて春のこずゑの雪みれば初花ともやいふべかるらむ
實行卿の家の歌合に霞の心をよめる　少將公敎母
あさみどりかすめる空のけしきにや常磐の山も春をしるらむ
藤原顯輔朝臣

金葉和歌集　巻第一

春歌

堀河院の御時百首の歌めしける時立春の心をよみ侍りける　　修理大夫顯季

うちなびき春はきにけり山川の岩間のこほり今日やとくらむ

春宮大夫公實

春たちてこずゑに消えぬ白雪はまだきに咲ける花かとぞ見る

藤原顯仲朝臣

いつしかと明けゆく空の霞めるは天の戸よりや春は立つらむ

皇后宮肥後

千載和歌集目錄

金葉和歌集目錄

詞花和歌集目錄

佻の趣を脱せざるに反し、其本集がよく高雅醇正の致を失はず、次いで來れる新古今の、幽玄奥妙なる歌風を胚胎したるが如き、玆に特記するに足らん。
以上の三集、何れも、正保四年開版の八代集原本と、天和三年版の八代集抄とによりて、嚴密に校訂し、異本の如きも、すべて、原本の形式に準じて、之を傍注する事となしたり。

明治四十四年六月

校訂者　塚本哲三

緒言

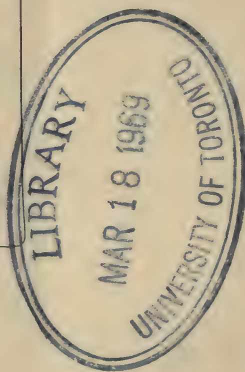
金葉和歌集は、崇德天皇の大治二年、源俊頼、白河院の院宣を蒙りて、撰奏せしものにして、十卷六百四十九首、別つて四季、賀、別、戀、雜、連歌の諸目となせり。勅撰集中連歌を收むるは、此集を始めとす。

詞花和歌集は、近衞天皇の仁平年中、藤原顯輔、崇德院の勅を奉じて、撰進せしものにして、收むる所、十卷四百九首に過ぎず。金葉集、詞花集、共に、其卷數の少きに於て、勅撰集の常型を逸したるもの也。

千載和歌集は、後白河院の宣旨によりて、後鳥羽院の文治四年、藤原俊成の撰進せる所、二十卷一千二百八十四首より成る。撰者俊成が、當時歌人輩の反目偏執、徒らに蝸牛角上に爭へる時に當りて、卓識雅量群を拔き、確執相下らざりし俊頼の歌を、多數に、此集に收錄せしが如き、金葉詞花の二集が、とかく浮華輕

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン



金葉和歌集　全

詞華和歌集　全

千載和歌集　全




有朋堂文庫